

東北大学学術資源研究公開センター 2011年度 年次報告



2012年9月

東北大学総合学術博物館
東北大学史料館
東北大学植物園

東北大学学術資源研究公開センター

2011 年度 年次報告

2012 年 9 月

東北大学総合学術博物館

東北大学史料館

東北大学植物園

I 組織概要

1. 学術資源研究公開センターの概要	1
1-1. 設立趣旨	1
1-2. 沿革	1
1-3. 組織・運営	1
1-4. 規程	2
1-5. 運営専門委員会委員	5
1-6. 学術資源研究公開センター教員	6
2. 各業務組織の概要	6
2-1. 総合学術博物館	6
(1) 沿革	6
(2) 総合学術博物館の設立趣旨	7
(3) 総合学術博物館の運営方針	9
(4) 総合学術博物館の組織と運営システム	10
(5) 総合学術博物館の施設概要	11
2-2. 史料館	11
(1) 理念・目的と事業内容	11
(2) 沿革	12
(3) 東北大学史料館の収集・所蔵資料	13
(4) 組織・スタッフ	14
(5) 関係委員会等	15
(6) 施設	16
2-3. 植物園	17
(1) 沿革	17
(2) 植物園の設立趣旨	25
(3) 植物園の運営方針	26
(4) 植物園の組織と運営システム	26
(5) 植物園の施設概要	27

II 2011年度の活動状況

II-1. 学術資源研究公開センターの活動	29
1. センターの組織整備・運営	29
1-1. 運営専門委員会	29

2. 資料収集・公開・普及教育事業	31
2-1. センターデータベースの整備事業	31
3. その他	31
3-1. 附属図書館業務に対する指導・支援	31
II-2. 各業務組織の活動	33
総合学術博物館	33
1. 組織・運営・財務	33
1-1. 博物館部会の開催	33
1-2. 学内・学外からの事業資金受託状況	34
2. 収蔵・展示事業	34
2-1. 資料標本等収蔵関連事業	34
2-2. 展示関連事業	35
2-3. その他	37
3. 教育・教育支援・普及教育活動	37
3-1. 入館者統計等	37
3-2. 学内教育との連携	37
3-3. 学外機関の利用	38
3-4. 体験活動等	38
3-5. ニュースレター・ホームページ	38
4. 学生に対する教育活動	39
4-1. 担当した講義名	39
4-2. 学部大学院生指導実績	40
5. 研究活動	40
5-1. 研究支援活動	40
5-2. 研究活動	40
5-3. 学術出版物の発行	40
史料館	41
1. 組織・運営	41
1-1. 組織整備（公文書室等の設置）	41
1-2. 利用規則等の制定・改正	41

1-3. 関係委員会の開催	41
1-4. 学内外からの事業資金獲得状況	46
2. 資料の管理・公開（アーカイブズ事業）	46
2-1. 資料の受入・整理	46
2-2. 資料利用者への対応	49
3. 普及・社会教育事業	51
3-1. 展示会および関連企画の開催	51
3-2. 展示室の利用状況	52
3-3. 他機関開催の展示会への出陳	53
4. 教育・研修・学習支援活動	53
4-1. 教育・学習活動における史料館の利用	53
4-2. 全学教育の担当	53
4-3. 職員研修への協力	53
5. 調査・研究活動	54
5-1. 学術出版物の発行	54
5-2. 学会・研究会・研修会等への参加および報告	54
5-3. 学会誌・学外メディア等における報告	54
5-4. 研修会等への参加	55
5-5. 科学研究費獲得状況	55
6. その他	55
6-1. 広報・情報公開（ニュースレター・ホームページ）	55
6-2. 東日本大震災への対応	55
植物園	56
1. 組織・運営	56
1-1. 補修・整備工事，庶務報告等	56
1-2. 植物園部会の開催	57
1-3. 学内外からの事業資金獲得状況	57
1-4. 東日本大震災被害復旧	58
1-4. その他	58
2. 収蔵・展示事業	59
2-1. 資料標本等収蔵関連事業	59
2-2. 展示関連事業	60

3. 教育・教育支援・普及教育活動	60
3-1. 入館者統計等	60
3-2. 学内教育との連携	61
3-3. 学外機関の利用	62
3-4. 報道機関・一般社会人等への対応	64
3-5. 講演会・体験活動等	64
3-6. ニュースレター・ホームページ・出版	65
4. 全学・学部・大学院生への指導	66
4-1. 授与した大学院学位	66
4-2. 担当した講義名	67
5. 研究活動	67
5-1. 研究支援活動	67
5-2. 研究活動	69
II-3. 各教員の活動状況	76
総合学術博物館	76
史料館	97
植物園	102

I 組織概要

1. 学術資源研究公開センターの概要

1-1. 設立趣旨

東北大学には、開学以来の「研究第一主義」の理念の下で生み出された、多くの新発見・発明の歴史があり、それらの研究の基礎となり、成果となった資料・標本・機器類の莫大な蓄積がある。総合学術博物館、史料館、植物園は、附属図書館などとともに、東北大学の学術を支援し、その生命基盤ともいふべき、図書、情報技術、学術資料および史料などを運営する東北大学の共同教育研究施設の一部として、これらの貴重な資料・標本等を管理・保管し、未来に継承するとともに、新たな研究・教育資源として活用できる環境を構築する責務を負ってきた。しかし、それらは財政基盤、施設、人員の配置のいずれもが規模が小さく、事業を行う上で十分に責務を果たせる環境が整っていなかった。そこで、業務性格に類似性のあるこれら3施設を統合して運営の合理化、業務ノウハウの共有化を図るとともに、大学内部局としての自立性を高めることにより、資料標本に基づく研究教育の学内中核拠点となり、大学の知の発信基地としての機能を果たすことを目的とする。さらに、「開かれた大学」の窓として、東北大学の研究教育の現状を公開するとともに、大学に蓄積された知的資源を展示や講演会等により一般公開し、社会に還元することとする。

1-2. 沿革

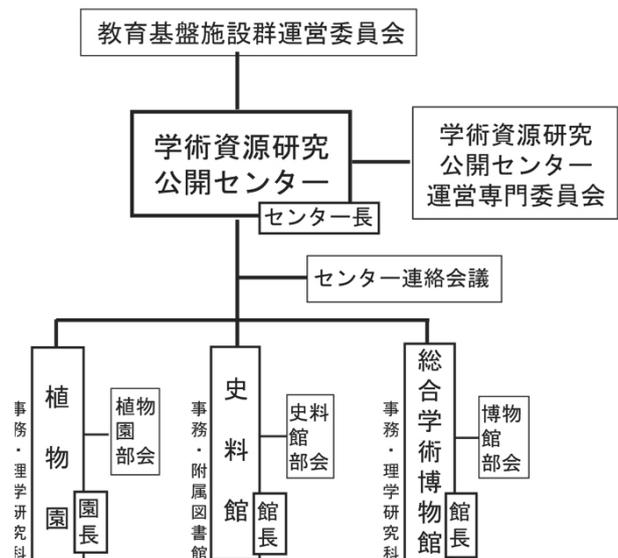
2006年（平成18年）4月1日に総合学術博物館、史料館、植物園の3学内共同利用施設を統合して「学術資源研究公開センター The Center for Academic Resources and Archives」とし、それら3施設をそれぞれセンターの業務組織として従前の業務に当たることとなった。

この統合にあたり、各業務組織に配置されていた教員、職員等をセンターの教員、職員等とし、新たに情報シナジーセンターの組織改編に伴い全学枠定員助手3名をセンターの教員として配置した。その結果、センター職員は教授3、助教授3、助手7（うち全学枠定員5）、技術職員4となった。また、2007年度からは、助教授は准教授、助手は助教に名称変更となった。

1-3. 組織・運営

学術資源研究公開センターは、学術資源研究公開センター長のもと、総合学術博物館・史料館・植物園の3業務組織から構成され、センターの教職員はこのいずれかの組織に所属して

東北大学学術資源研究公開センター
組織運営図



いる。またセンター長，3業務組織の長およびセンター長が指定する教員によりセンター運営会議が設置され，センター全体の連絡調整機関として運営されている。

センター全体の審議機関としては，センター運営専門委員会が設置され，その下に3業務組織に対応する各部会が設置されている。（自己評価報告書の組織図）

1-4. 規程

1. 東北大学学術資源研究公開センター規程

第1章 総則

（趣旨）

第1条 この規程は，東北大学学術資源研究公開センター（以下「センター」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

（目的）

第2条 センターは，東北大学（以下「本学」という。）の学内共同教育研究施設等として，標本，本学の歴史に関する資料その他の本学が所蔵する学術資料の収集及び保管，第8条に規定する植物園の敷地内に生育する生物資源の保全並びに学術資料及び生物資源に関する研究を行い，もって学内の教育研究に資するとともに，広く一般に公開して社会教育の振興に寄与することを目的とする。

第2章 職及び職員

（職及び職員）

第3条 センターに，次の職及び職員を置く。

センター長

教授

准教授

講師

助教

事務職員

技術職員

その他の職員

（センター長）

第4条 センター長は，センターの業務を掌理する。

2 センター長は，本学の専任の教授をもって充てる。

3 センター長の選考は，東北大学教育基盤施設群運営委員会の議に基づき，総長が行う。

4 センター長の任期は，2年とし，再任を妨げない。

（協力研究員及び協力調査員）

第5条 第3条に規定するもののほか，センターに，協力研究員及び協力調査員を置くことができる。

2 協力研究員は，センターの業務のうち特定の事項について調査研究及び公開を行い，

協力調査員は、センターの業務のうち特定の事項について調査等を行う。

3 協力研究員は本学の専任の教員以外の研究者等をもって、協力調査員は本学の事務職員又は技術職員をもって充てる。

4 協力研究員及び協力調査員は、第9条に規定する運営専門委員会の推薦に基づき、センター長が委嘱する。

5 協力研究員及び協力調査員の任期は、1年とし、再任を妨げない。

第3章 業務組織

(総合学術博物館)

第6条 センターに、業務組織として、総合学術博物館を置く。

2 総合学術博物館は、学術標本の収集、公開等を行う。

3 総合学術博物館に、館長を置く。

4 館長は、総合学術博物館の業務を掌理する。

5 館長は、本学の専任の教授をもって充てる。

6 館長の選考は、第9条に規定する運営専門委員会の議に基づき、センター長が行う。

7 館長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(史料館)

第7条 センターに、業務組織として、史料館を置く。

2 史料館は、本学の歴史資料としての価値を有する資料の収集、公開等を行う。

3 史料館に、館長を置く。

4 館長は、史料館の業務を掌理する。

5 館長は、本学の専任の教授をもって充てる。

6 館長の選考は、第9条に規定する運営専門委員会の議に基づき、センター長が行う。

7 館長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(植物園)

第8条 センターに、業務組織として、植物園を置く。

2 植物園は、園内に自生する植物の保護及び栽培を行うとともに、植物標本の収集、公開等を行う。

3 植物園に、園長を置く。

4 園長は、植物園の業務を掌理する。

5 園長は、本学の専任の教授をもって充てる。

6 園長の選考は、次条に規定する運営専門委員会の議に基づき、センター長が行う。

7 園長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

8 植物園に、八甲田山分園を置く。

第4章 運営専門委員会

(運営専門委員会)

第9条 センターに、その組織、人事、予算その他運営に関する事項を審議するため、運営専門委員会を置く。

(運営専門委員会の組織)

第10条 運営専門委員会は、委員長及び次に掲げる委員をもって組織する。

- 一 総合学術博物館長，史料館長及び植物園長
- 二 各研究科，教育情報学研究部，各附属研究所，東北アジア研究センター及び高等教育開発推進センターの教授又は准教授 各1人
- 三 センターの専任の教授及び准教授
- 四 その他運営専門委員会が必要と認めた者 若干人

(委員長)

第11条 委員長は、センター長をもって充てる。

2 委員長は、会務を掌理する。

(委嘱)

第12条 第10条第2号及び第4号に掲げる委員は、センター長が委嘱する。

(任期)

第13条 第10条第2号及び第4号に掲げる委員の任期は、2年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

2 前項の委員は、再任されることができる。

(部会)

第14条 運営専門委員会に、各業務組織の運営を円滑に行わせるため、部会を置く。

2 部会は、委員若干人をもって組織する。

第5章 雑則

(事務)

第15条 センターの事務については、国立大学法人東北大学事務組織規程（平成16年規第151号）の定めるところによる。

(雑則)

第16条 この規程に定めるもののほか、センターの組織及び運営に関し必要な事項は、センター長が定める。

附 則

1 この規程は、平成18年4月1日から施行する。

2 次に掲げる規程は、廃止する。

- 一 東北大学総合学術博物館規程（平成10年規第44号）
- 二 東北大学植物園規程（平成17年規第94号）
- 三 東北大学史料館規程（平成12年規第156号）

3 この規程施行の際現に前項の規定による廃止前の東北大学総合学術博物館規程の規定により平成18年4月1日に総合学術博物館長に併任されるものとして選考された者は、この規程施行の日において第6条第6項の規定により選考されたものとみなす。

4 この規程施行の際現に第2項の規定による廃止前の東北大学史料館規程の規定により

史料館長の任にある者は、この規程施行の日において第7条第3項に定める史料館長となったものとみなし、その任期は、同条第7項の規定にかかわらず、平成18年1月5日までとする。この場合において、史料館長の選考の範囲及び方法については、同条第5項及び第6項の規定は、適用しない。

- 5 この規程施行の日の翌日以後最初に選考される史料館長の任期は、第7条第7項の規定にかかわらず、平成20年3月31日までとする。
- 6 この規程施行の際現に第2項の規定による廃止前の東北大学植物園規程の規定により植物園長の任にある者は、この規程施行の日において第8条第6項の規定により植物園長となったものとみなす。

(平成18年4月1日施行、平成19年2月20日一部改正)

1-5. 運営専門委員会委員

委員長	学術資源研究公開センター長	教授	中静 透
委員	総合学術博物館長	教授	柳田 俊雄
委員	史料館長	教授	佐藤 伸宏
委員	植物園長	教授	中静 透
委員	文学研究科	教授	阿子島 香
委員	教育学研究科	教授	池尾 恭一
委員	法学研究科	准教授	金谷 吉成
委員	経済学研究科	教授	伊藤 健
委員	理学研究科	教授	掛川 武
委員	医学系研究科	教授	進藤千代彦
委員	歯学系研究科	教授	熊本 裕行
委員	薬学研究科	教授	土井 隆行
委員	工学研究科	教授	安斎 浩一
委員	農学研究科	教授	両角 和夫
委員	国際文化研究科	教授	長友 雅美
委員	情報科学研究科	教授	木下 賢吾
委員	生命科学研究科	准教授	牧 雅之
委員	環境科学研究科	教授	星野 仁
委員	医工学研究科	教授	阿部 高明
委員	教育情報学研究部	教授	村木 英治
委員	金属材料研究所	教授	佐々木孝彦
委員	加齢医学研究所	准教授	堀 勝義
委員	流体科学研究所	教授	大林 茂
委員	電気通信研究所	教授	中島 康治
委員	多元物質科学研究所	教授	高桑 雄二
委員	東北アジア研究センター	教授	栗林 均
委員	高等教育開発推進センター	教授	吉本 啓
委員	学術資源研究公開センター	教授	鈴木 三男
委員	学術資源研究公開センター	教授	西 弘嗣
委員	学術資源研究公開センター	准教授	佐々木 理
委員	学術資源研究公開センター	准教授	長瀬 敏郎
委員	学術資源研究公開センター	准教授	高嶋 礼詩
委員	学術資源研究公開センター	准教授	永田 英明

1-6. 学術資源研究公開センター教員

総合学術博物館	館長・教授	柳田 俊雄
	教授	西 弘嗣
	准教授	佐々木 理
	准教授	長瀬 敏郎
	准教授	高嶋 礼詩
	助教	佐藤 慎一
	助教	小川 知幸
史料館	館長	佐藤 伸宏 (文学研究科教授)
	准教授	永田 英明
	助教	曾根原 理
	助教	大原 理恵
植物園	園長	中静 透
	教授	鈴木 三男
	助教	米倉 浩司
	助教	大山 幹成

2. 各業務組織の概要

2-1. 総合学術博物館

(1) 沿革

東北大学は、理科大学として発足以来の約 100 年間の研究教育の過程で蓄積されてきた、240 万点をこえる膨大な学術資料標本を有している。これらは各部局で個別に保管・管理されてきたが、1965 年 4 月 16 日、本学が所蔵の学術資料標本を統合的に管理することを目的として、学長を委員長とする総合研究資料館設置準備委員会が開設された。同年 6 月 1 日、総合研究資料館の設置に関する特定の事項の調査研究のため、学長の委嘱により専門委員会が設置され、総合研究資料館の設置予定場所を理学部キャンパス内（現自然史標本館敷地）とすることが決定された。さらに、1974 年 7 月 1 日、医学部、理学部、文学部等の標本類を収蔵していた東北大学標本室（片平キャンパス旧化学棟）の運営に関し、学長の委嘱のもとに標本室運営委員会が設置された。しかし、この標本室は、研究の現場から遠く、研究教育に大きな支障をきたしていた。

その後、上記総合研究資料館構想は実現の見通しが困難であったため、各部局個別の構想が具体化し、1994 年度の概算要求において、理学部自然史標本館の設置が認可された。同標本館は、1995 年 3 月に竣工し、同年 10 月 3 日に開館した。標本館は、理学部地球科学系の資料標本を収蔵し、その一部について一般公開展示も行っている。この間、文学部では、チベット資料室・考古学陳列館の資料標本が外部研究者への利用に供されてきたが、多くの考古学資料は非公開の標本室に収蔵されてきた。また、他の多くの資料標本類も含め一般公開は行われてこなかった。

1995 年 6 月 16 日、文部省学術審議会学術情報資料分科会学術資料部会から、「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について」の中間報告が提出された。本学においてもその具

体化が検討され、1996年6月11日、評議会の下に「東北大学総合研究博物館（仮称）設置構想検討委員会」が設置され、理学部が世話部局となって新設計画が立案され、既存の施設を含む博物館構想について概算要求が行われてきた。

1998年4月9日、総合学術博物館の組織が認可され、教官8名：教授2名、助教授3名、助手2名（その後1名となる）、外国人客員教授1名と、事務官1名（理学部・理学研究科）、事務補佐員1名の組織構成で発足した。2006年4月1日には、総合学術博物館、史料館、植物園の3学内共同利用施設を統合して「学術資源研究公開センター The Center for Academic Resources and Archives」が設置され、総合学術博物館はこのセンターの業務組織として従前の業務に当たることとなった。また、センター設立にあたって、新たに情報シナジーセンターの全学卒定員（のうち中央卒定員）助手1名が総合学術博物館に配置され、2007年度からの名称変更などを経て、現在の総合学術博物館の教員は教授2、准教授2、助教2（うち中央卒定員1）である。

総合学術博物館の建物については新築計画にもとづき概算要求を行ってきたが、設置後12年をへた現在においても実現していないので、展示事業等については理学部自然史標本館を共用して運営し、現在に至っている。2007年の東北大学創立100周年を期に、50周年記念講堂を総合学術博物館として改装する方針が2004年4月に全学合意を得たが、この記念講堂改築案も実現には至らなかった。貴重な学術資源を研究・活用し、未来に継承するために、施設実現のための中期・長期の計画の見直しが必要となったので、2008年度には理事をリーダーとする「総合学術博物館将来構想検討プロジェクトチーム」（博物館PT）が設置された。博物館PTは、半年余の議論をへて2009年3月に報告書を取りまとめた。そこでは、総合学術博物館施設実現のためには、従来の構想の約半分の規模の公開部門・研究部門を中心とする中央館の建設を目指し、収蔵部門については別途検討すること、また、中央館もユニバーシティハウスなどとの合築でさらにコストダウンを図ることが望ましいことが示された。今後はこの博物館PT報告書で示された方針の早急な具体化が望まれている。

また、この間、理学部自然史標本館を共用しての展示のほか、東北大学収蔵標本に関するデータベース作成などの資料標本収蔵・管理事業や特別講演会、公開講座、博物館体験講座などの普及事業を行ってきた。さらに、外部施設を借用しての企画展・特別展「東北大学総合学術博物館のすべて」シリーズI～Xを企画し、実施してきている。

（2）総合学術博物館の設立趣旨

東北大学は、開学以来の「研究第一主義」のもとに、多くの新発見、発明の歴史があり、それらの研究の基礎となり、成果となった資料、標本、機器類の莫大な蓄積をもっている。総合学術博物館は、附属図書館・史料館・植物園などとともに、東北大学の学術を支援し、その生命基盤ともいえるべき、図書・情報技術・学術資料および史料などを運営する東北大学の共同教育研究施設（アカデミック・サービス）の重要な一部として、これらの貴重な知的財産を管理・保管し、データベース化をはかり、新たな知的資源として現在と未来に

活用できる環境を構築するための研究教育施設である。また、新たな資料・標本の発掘・収集につとめ、資料・標本にもとづく研究教育の学内中核拠点となり、大学の知の発信基地としての役割を果たす。

総合学術博物館は、図書館－史料館－植物園などとの連携を図り、「東北大学」についての初年次教育を行う場として機能するとともに、東北大学の学生・スタッフであることのアイデンティティを高め、大学の一員として共に発展を目指す共通の精神的基盤を与える場となる。また、学内構成員や来訪者の「集いの空間」となることを目指す。さらに、「開かれた大学」の窓として、東北大学 100 年の研究教育の歴史や現在行われている研究を公開するとともに、蓄積された知的財産を展示やインターネット、講演会等により一般公開し、社会に還元する。

東北大学収蔵学術資料標本

種 類	総標本資料点数
動物関係標本	162,563
植物関係標本	501,350
古生物関係標本	1,130,213
岩石・鉱物・鉱床関係標本	273,891
歴史・民族・考古学関係資料	356,519
科学技術史関係資料	2,233
金属学金属工学資料標本	5,000
合 計	2,431,769

*動物関係標本

脊椎動物骨格標本 (3,726)、動物標本 (1,900)、無脊椎動物液浸標本 (2,000)、海産動物標本 (6,101)、医学液浸標本 (200)、動物切片標本 (100,000)、法医乾燥標本 (4,800)、霊長類頭蓋標本 (220)、人歯列模型標本 (3,028)、小動物切片標本 (27,284)、カキ類標本 (52)、昆虫標本 (3,000)、家畜骨格・臓器標本 (1,069)、家畜骨格・剥製標本 (23)、動物寄生虫標本 (8,800)、魚類・底生生物液浸標本 (100)、生物液浸標本 (50)、海洋プランクトン液浸標本 (210)

*植物関係標本

植物さく葉標本 (277,000)、植物標本 (21,313)、ヤナギ科植物標本 (66,000)、ヤナギ科以外の植物標本 (5,000)、その他の植物標本 (130,500)、植物薄片標本 (500)、生薬標本・キノコ標本 (1,037)、冬虫夏草液浸標本 (150)

*古生物関係標本

動植物化石自然史標本館展示標本 (557)、植物化石標本 (13,500)、微化石標本 (824,973)、刺胞動物化石標本 (29,520)、貝類化石標本 (196,733)、その他の無脊椎動物化石標本 (16,466)、軟体動物化石標本 (7,700)、節足動物化石標本 (2,500)、花粉化石標本 (304)、その他の化石標本 (16,360)、化石薄片標本 (21,600)

* 岩石・鉱物・鉱床関係標本

岩石標本 (39,643), 鉱物標本 (21,432), 鉱石標本 (20,127), 岩石コア標本 (157,824), 岩石・鉱物標本 (33,965), 火山灰土標本 (500), 土壌標本 (400)

* 歴史・民族・人類関係標本

旧石器時代考古学重要資料 (2,193), 縄文時代考古学重要資料 (2,183), 弥生時代考古学重要資料 (608), 古墳時代・古代考古学重要資料 (806), 中世・近世考古学重要資料 (140), 北方系文化重要資料 (295), 朝鮮半島考古学重要資料 (70), 欧米考古学重要資料 (60), 民族・民俗重要資料 (310), 考古学基準資料 (30,364), その他民俗資料 (8,482) 考古学資料 (旧石器, 縄文, 弥生) (78,000), 考古学資料 (縄文, 古代) (4,800), 考古学資料 (旧石器, 弥生, 近世) (46,000), チベット造形資料 (1,231), その他の資料 (255), 日本史古文書 (1,000), 人類標本 (500), 古人類・考古学標本 (6,008), 地図類 (130,014)

* 科学技術史関係資料標本

科学技術史資料 (2,110), 建築模型 (123), 金属学金属工学資料標本 (5,000)

(3) 総合学術博物館の運営方針

総合学術博物館は、東北大学所蔵の学術資料標本類を一括収蔵・管理し、これらを研究・教育資源として有効に利用するとともに、各種の展示等を通じて東北大学の研究成果を社会に公開・還元するための、学内共同研究教育施設である。この目的のために、博物館は、史料館・植物園とともに学術資源研究公開センターを組織し、センター教員および各部局代表等から構成される学術資源研究公開センター運営専門委員会の議のもとに、東北大学がその研究教育活動を通じて蓄積してきた学術資源の継承・保全、データベース化、それらの学術財産としての活用および学内外への公開につとめる。具体的には、総合学術博物館部会の審議にもとづき、博物館兼務教員等全学の協力を得つつ、以下の諸事業を企画し、実施する。

- 1) 東北大学所蔵の資料標本等の収蔵・管理・利用等に関わる諸規程を整備し、東北大学の各部局に分蔵されている資料標本等を一括収蔵・保管・展示するとともに、これらを学内・学外の研究者や大学院生・学生の研究・教育の資源として利用できる体制を作る。
- 2) 新たな資料標本等の発掘・収集につとめるとともに、資料標本に基づく研究教育の学内拠点となることを目指す。また、資料標本類のデータベースを構築して、研究者に情報を提供し、かつ膨大なデータにもとづく新たな研究を行う。
- 3) ギャラリー展示・常設展示・特別展示・企画展示などを企画し、実施するとともに、インターネット・ホームページの公開などを行い、東北大学の研究教育の歴史や現状、東北大学が所蔵する学術資料標本等を一般公開する。また、博物館紀要・ニュースレターの発行、各種講演会・講座・体験学習会などの事業を行い、「開かれた大学」として研究成果の社会への還元を図り、社会教育・生涯教育に寄与する。

(4) 総合学術博物館の組織と運営システム

総合学術博物館（以下博物館）は、館長、研究部および事務室から組織される。従来は、博物館の組織、人事、予算その他運営に関する重要事項を審議するため、東北大学総合学術博物館運営専門委員会（以下「運営専門委員会」という。）をおいていた。また、運営専門委員会の下に、専門の事項を調査研究させるため、収蔵部会および展示部会が設置されていた。博物館の日常的業務運営や予算の執行等は、運営委員会の方針にもとづき、博物館教職員より構成される総合学術博物館運営会議によって行われてきた。

2006年度からは、総合学術博物館は学術資源研究公開センターの業務組織として、センター運営専門委員会の議による基本方針に従い、業務を行っている。総合学術博物館の具体的運営については総合学術博物館部会が審議する。

総合学術博物館には、教授2名、准教授3名、助教2名および客員教授1名が配置されている。総合学術博物館の日常的運営は、博物館教職員からなる博物館会議が担当する。また、関連する分野の兼務教員をセンターに置き、これらとともに研究テーマや研究分野ごとの研究グループを組織し、資料標本等にもとづく研究を行う。本学の専任の教員以外の研究者等からなる協力研究員、本学の事務職員又は技術職員からなる協力調査員の協力を得て、事業を推進することもできる。

総合学術博物館事務室は、専任（理学研究科）およびパートの事務員から構成され、博物館業務の円滑な遂行を図るための管理・運営事務および資料標本のデータベース作成業務などを担当する。

2011年度総合学術博物館部会委員

学術資源研究公開センター	教授・博物館長	柳田 俊雄
文学研究科	教授	阿子島 香
理学研究科	教授	吉田 武義
理学研究科	教授	箕浦 幸治
東北アジア研究センター	教授	石渡 明
文学研究科	教授	長岡 龍作
医学系研究科	助教	辻川 寛
学術資源研究公開センター	教授	西 弘嗣
学術資源研究公開センター	准教授	佐々木 理
学術資源研究公開センター	准教授	長瀬 敏郎
学術資源研究公開センター	准教授	高嶋 礼詩
学術資源研究公開センター	助教	佐藤 慎一
学術資源研究公開センター	助教	小川 知幸

2011年度総合学術博物館教職員

教授・館長	柳田 俊雄
教授	西 弘嗣
准教授	佐々木 理
准教授	長瀬 敏郎
准教授	高嶋 礼詩

助教	佐藤 慎一
助教	小川 知幸
客員教授	李 鮮 馥 (2012年1月～2012年2月)
客員教授	呂 君 昌 (2012年2月～2012年3月)
技官	根本 潤 (理学研究科)
技術支援員	鹿納 晴尚
事務官	佐藤 孝志 (理学研究科)
非常勤職員	長谷川せい子
パート職員 (窓口)	遠藤賀津子, 草野康子
パート職員 (データベース)	高玉久美子

2011 年度総合学術博物館兼務教員

文学研究科	教授	阿子島 香
文学研究科	教授	長岡 龍作
文学研究科	特任准教授	藤沢 敦
理学研究科	准教授	中森 亨
医学研究科	講師	笠原 紳
歯学研究科	助教	鈴木 敏彦
薬学研究科	教授	倉田祥一朗
国際文化研究科	教授	深澤 百合子
国際文化研究科	教授	鈴木 道男
情報科学研究科	教授	根元 義章
生命科学研究科	助教	鈴木 孝男
環境科学研究科	教授	境田 清隆
東北アジア研究センター	准教授	鹿野 秀一
理学研究科	技術職員	根本 潤

(5) 総合学術博物館の施設概要

総合学術博物館の施設は、構想中（概算要求中）であり、現在は理学研究科附属自然史標本館を共用して運営している。

2-2. 史料館

(1) 理念・目的と事業内容

東北大学史料館は、東北大学の歴史に関する資料の保存・公開をおこなう、東北大学のアーカイブズ（Archives＝文書館・公文書館）である。

発足間もない 2001 年度に当時の史料館運営委員会でまとめられた『東北大学史料館の将来構想』では、21 世紀の東北大学のアーカイブズとして史料館が果たすべき基本的な役割が、以下の 4 点に整理し明示されている。

- 一、大学における歴史的情報を学内外に公開し、現代的情報を対象とする情報公開制度との両輪で「開かれた大学」という理念を実現する。
- 二、大学自身の歴史的資料を、長期的な見通しに立った大学改革・大学評価の基礎となる材料として活用し、大学の発展に貢献する。

三、収蔵資料を基礎にした大学史に関する研究活動を行い、これを基礎にした大学教育・社会教育活動を行うことで学術研究や地域文化の発展に貢献する。

四、アーカイブズそのものに関する研究・教育活動及びその支援を行い、公文書館等各地の資料保存機関で活躍する人材の育成に貢献する。

ここ示された理念の実現のために、史料館では本部事務機構以下の学内諸部局や関係分野の教員との連携のもと、以下の事業を継続的に実施している。

- 1) 学内諸部局に散在する大学公文書を保存期間満了後に歴史的価値評価に基づいて選別集約し、同時に本学の歴史に関する個人文書等の調査・収集を行うことで、東北大学の歴史資料として価値を有する様々な記録資料の集約と保存を図る。
- 2) 史料館に集積された資料を一般の閲覧利用に提供し、同時にそのための利用環境の整備（資料調査・整理および目録・データベースの作成公開）を図る。
- 3) 常設展示や企画展示など東北大学の歴史に関する展示活動や広報誌の発行等を通じて、東北大学の歴史に関する社会教育・普及活動を実施する。
- 4) 東北大学の歴史や資料保存・公開等に関する調査研究活動を実施し、同時にこれらを基礎にした教育活動を行う。

(2) 沿革

東北大学史料館は、昭和 38 年(1963)7 月にわが国初の大学アーカイブズ「東北大学記念資料室」として設置されて以後、半世紀近くにわたって活動を続けている。その沿革は以下のようにまとめられる。

①『東北大学五十年史』編纂事業と東北大学記念資料室の発足

東北大学では、昭和 35 年(1960)に『東北大学五十年史』の編纂刊行を終了したのち、編纂事業において調査・収集した資料の保存公開の必要が認識され、1963 年(昭和 38)7 月、「本学の歴史に関係ある記念となる資料を収集、保存するとともに、これを公開活用して、もって本学及び学術の発展に寄与する」ことを目的とする「東北大学記念資料室」が設置された。当時国内にはこうした大学アーカイブズの設置例はまだなかったが、欧米の大学ではアーカイブズが多く設置され始めており、こうした事例を参考にわが国初の「大学アーカイブズ」として発足した。

当初この記念資料室は附属図書館内に設けられ、職員もまた図書館業務を兼務するなど実質的には図書館と一体的なかたちで運営されていた。しかし 1986 年 10 月からは片平地区の旧附属図書館本館閲覧室を単独で使用し、教員についても専任の教員が配置され、実質的にも図書館業務と独立した組織として運営されるようになった。

②いわゆる「情報公開法」の施行と東北大学史料館への改組

平成 12 年(2000)12 月、「東北大学記念資料室」は「東北大学史料館」へと改組された。この「史料館」への転換は、国立大学法人化に向けた学内改組の動きのなかで従来の「記念資料室」のありかたについて再検討を進めた結果、(1)いわゆる「情報公開法」の施行に伴う保存期間を満了した歴史公文書の保存公開体制整備、(2)『東北大学百年史』編纂事業

の伸展に伴う資料受入・保存公開体制のさらなる整備、(3)本学を代表する一般公開施設としての整備充実、といった観点から必要な改革としておこなわれたものであった。とくに(1)については、翌年4月より保存期間を満了した歴史公文書の評価を史料館が担当することが学内で正式に制度化され、以後歴史公文書にかかる業務が大きな比率を占めるようになった。

なお平成18年(2006)4月には、総合学術博物館・植物園・史料館を「業務組織」として傘下に置く「東北大学学術資源研究公開センター」が設置され、史料館は以後同センターの業務組織となった。その結果博物館等との連携も強めているが、一方で事務担当部局は従来通り附属図書館とされ、図書館との関係も維持されている。

③「公文書等の管理に関する法律」施行と史料館公文書室の発足

平成23年(2011)4月、「公文書等の管理に関する法律」の施行に伴い、国の行政機関や独立行政法人等における公文書管理制度の大幅な見直しがおこなわれることとなった。東北大学においても同法に対応する形で「国立大学法人東北大学法人文書管理規程」が制定されるとともに、従来から実施してきた歴史公文書の史料館への移管制度をふまえ、同法が「特定歴史公文書等」の保存公開施設として定める「国立公文書館等」に相当する施設として、史料館に新たに「公文書室」を設置することとなった。

公文書室は学術資源研究公開センター史料館の一部門である一方で、総長の指名する副学長又は理事が委員長をつとめる「東北大学公文書管理委員会」のもとで本学の歴史公文書の管理公開を担当する組織としても位置付けられるなど特別な位置づけとなっている。またこうした位置付けに対応し、公文書室関係の事務に関しては総務部総務課が担当している。

また公文書室の設置と同時に、個人からの寄贈資料やその他の大学史にかかる多様な歴史資料を「特定歴史公文書等」と区分して管理・公開するため、「公文書室」と並ぶ室として「記念資料室」を設置し、以後この2室(2部門)体制で、本学の歴史に関する資料の保存と公開をおこなっている。

(3) 東北大学史料館の収集・所蔵資料

「公文書等の管理に関する法律」および「国立大学法人東北大学法人文書管理規程」にもとづき保存期間を満了した東北大学の歴史公文書の移管を受けるとともに、教職員・卒業生はじめとする関係者の記録など大学の歴史を跡づける多様な資料を収集・保存し公開している。

史料館が収集・管理する資料の概要

区分	主な内容(公開中のもの)
東北大学の歴史公文書	東北大学の歴史公文書 約2,300冊 東北大学包撰校の歴史公文書 約420冊
東北大学および各部局・学内各種組織が発行する刊行物(学術誌を除く)	約2,200シリーズ

東北大学関係者の個人・関連団体資料	東北大学関係 40件／約5100点 包摂校関係 9件／2000点
東北大学の歴史に関する写真・動画資料	写真資料 5,960点 動画資料 3点
東北大学の歴史に関する物品資料・記念品等	看板, 教育用器具, 絵画, 印章, 衣服, 記念品等

(4) 組織・スタッフ

①スタッフ (2011年度)

1) 職員

館長 (公文書室長・記念資料室長)

文学研究科教授 佐藤 伸宏

教員等

准教授 永田 英明 (公文書室・記念資料室)

助教 曾根原 理 (記念資料室)

助教 大原 理恵 (記念資料室)

教育研究支援者 (2011.4.1～9.30) 徳竹 剛 (公文書室)

教育研究支援者 (2011.10.1～) 加藤 諭 (公文書室)

事務職員・アルバイト

再雇用職員 川村 秀子

事務補佐員 高橋 早苗

事務補佐員 金 銀貞

事務補佐員 (～2011.9.30) 加藤 諭

事務補佐員 菅原 朋浩

2) 兼務教員

文学研究科准教授 安達 宏昭

高等教育開発推進センター教授 羽田 貴史

高等教育開発推進センター講師 中川 学

高等教育開発推進センター講師 串本 剛

高等教育開発推進センター助教 高橋 禎雄

3) 協力研究員

東北学院大学(非常勤) 吉葉 恭行

東北薬科大学 (非常勤) 本村 昌文

東北学院大学 (非常勤) 佐藤 健治

岩沼市史編纂室 伊藤 大介

4) 協力調査員

総務部広報課課長補佐 千葉 史朗 (情報公開室長)

②組織

1) 資料管理・公開業務にかかる組織

「東北大学史料館」全体として本学の歴史に関する資料の管理公開に取り組むと共に、平成23年度より「特定歴史公文書等」の管理を担当する公文書室と、「歴史的資料等」の管理を担当する記念資料室の2室を設置し管理公開業務をおこなっている。

●公文書室

保存期間を満了し移管された本学の歴史公文書、および公文書に準じる性格を有するその他の資料を含む「特定歴史公文書等」の保存・公開等をおこなう。「公文書等の管理に関する法律」第二条第3項第二号に定める「国立公文書館等」としての指定を受けた施設。

●記念資料室

退職教員・卒業生その他の個人等からの寄贈資料を中心とする、東北大学の歴史に関する多様な資料の保存、公開等をおこなう。「公文書等の管理に関する法律」第二条第5項第三号に定める「歴史的若しくは文化的な資料又は学術研究用の資料」を管理する施設としての指定を受けた施設。

2) 事務担当組織

史料館にかかる諸種の事務事項のうち、公文書室に特有の事務については総務部総務課が、それ以外の事務については附属図書館事務部がそれぞれ担当している。

(5) 関係委員会等

①学術資源研究公開センター運営専門委員会史料館部会

「東北大学学術資源研究公開センター規程」第14条にもとづき、学術資源研究公開センター運営専門委員会の下に設置された、史料館の運営に係る専門的事項の審議をおこなう委員会。

2011年度委員名簿

委員長	史料館長・文学研究科教授	佐藤伸宏
委員	文学研究科教授	柳原敏昭
委員	東北アジア研究センター教授	平川 新
委員	高等教育開発推進センター教授	羽田貴史
委員	医学系研究科教授・附属図書館副館長	柳澤輝行
委員	学術資源研究公開センター史料館准教授	永田英明
委員	学術資源研究公開センター史料館助教	曾根原理
委員	学術資源研究公開センター史料館助教	大原理恵

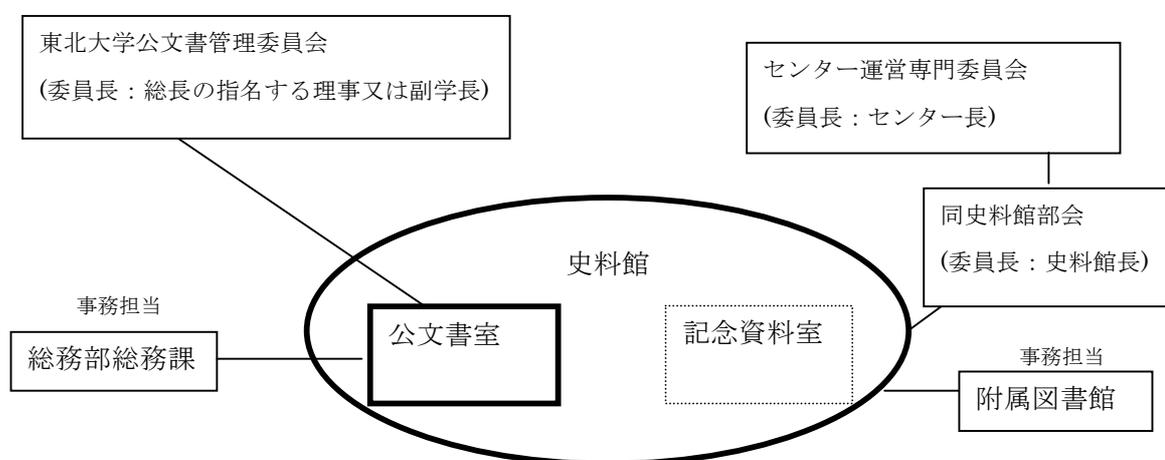
②東北大学公文書管理委員会

「国立大学法人東北大学法人文書管理規程」第8条に基づき、本学の法人文書および「学術資源研究公開センター史料館公文書室が保存する特定歴史公文書等」の管理に関する重要事項を審議する委員会。

2011 年度委員名簿

委員長	副学長	北村 幸久
委員	総務部長	高橋 秀市
委員	史料館長・文学研究科教授	佐藤 伸宏
委員	総務部総務課長	米本 善則
委員	東北アジア研究センター教授	平川 新
委員	公共政策大学院教授	牧原 出
委員	学術資源研究公開センター准教授	永田 英明

史料館組織概念図



(6) 施設

史料館本館は 1924 年に旧附属図書館本館として竣工した鉄筋コンクリート二階建ての施設を使用している。総床面積は 1214 m²であるが、うち 52 m²は小田滋国際司法裁判所判事記念室に提供中である。またこのほかに、現在本部 1 号館（旧理学化学科棟）内の約 100 m²を歴史公文書庫として使用している。

なお本館については平成 24 年度において、東日本大震災による被災復旧を兼ねた耐震改修工事が実施されることとなっており、これに伴い館内の書庫の区分等についても変更となる予定であり、利用計画の見直しをおこなう予定である。

施設は全般的に狭隘な状況にあり、業務遂行に必要な施設の確保が課題となっている。特に資料収蔵スペースの確保は今後の業務の遂行に不可欠の課題となっている。

史料館施設面積一覧（平成 24 年 3 月現在）

1 階	事務室	33 m ²
	教員室・会議室	84 m ²
	閲覧室	100 m ²
	廊下・便所等	73 m ²

	作業室	28 m ²
	(小田滋国際司法裁判所判事記念室)	52 m ²
2階	資料収蔵スペース (4室)	150 m ²
	展示室	332 m ²
	廊下等	77 m ²
中3階	資料収蔵スペース (4室)	85 m ²
	廊下	7 m ²
本部1号館3階	公文書室書庫	100 m ²
	物品保管庫	4 m ²

2-3. 植物園

(1) 沿革

本園

1958年(昭和33年)	4月	理学部附属青葉山植物園として開設。生物学教室より助手(後に助教授)1名を派遣。
1960年(昭和35年)	4月	文部省令6号により植物園設置の告示。助手(全学流用定員)1名を配置。
1962年(昭和37年)	4月	博物館法による博物館相当施設に指定。
1964年(昭和39年)	5月	ヤナギ科植物標本館落成。
1972年(昭和47年)	7月	敷地の約8割(385,153 m ²)が国指定天然記念物「青葉山」となる。
1987年(昭和62年)	4月	植物園記念館(津田記念館)落成。
1993年(平成5年)	4月	旧教養部生物学教官のうち教授1名が配置された。
1996年(平成8年)	3月	植物園本館落成。
1996年(平成8年)	4月	生物学教室より助手1名派遣。
1996年(平成8年)	10月	植物園本館落成記念式。
1997年(平成9年)	3月	定年退職により生物学教室よりの助教授が引き揚げられる。
1998年(平成10年)	3月	転出により生物学教室よりの助手が引き揚げられる。
2000年(平成12年)	4月	大学院理学研究科附属植物園となる。
2003年(平成15年)	8月	天然記念物指定範囲が国指定史跡「仙台城」の一部となる。
2004年(平成16年)	4月	大学法人化に伴い、財務省用地(通称L地区)が植物園用地として加わる。
2005年(平成17年)	4月	大学植物園となる。
2006年(平成18年)	4月	学術資源研究公開センター(植物園)となる。
2006年(平成18年)	12月	仙台城二の丸の杉並木が仙台市指定天然記念物となる。
2009年(平成21年)	4月	植物園開園50周年式典を挙げる。

東北大学植物園は仙台市の中央部を東西に走る丘陵地である青葉山丘陵の東端に位置し、この地の森林の歴史は慶長5年（1600）伊達政宗が仙台城を造営し、敵からの防御として御裏林を保護し、一般人の侵入を禁止したことに始まる。

明治維新後は軍隊の管理する地となり、仙台鎮台、大日本帝国陸軍第二師団が置かれ、昭和20年（1945）に太平洋戦争が終結すると進駐軍による接収が行われ、やはり一般人の出入りは禁止された。昭和33年（1958）に進駐軍が引き揚げると共に東北大学の管理地となり、理学部附属植物園となった。

当植物園は東北大学理学部生物学教室五十年史に故木村有香名誉教授が記述しているように、農学部と理学部で共同運営してはどうかということであったというが、諸般の事情により理学部附属植物園として発足した。この時の「東北大学の顔」として、学長を委員長とする運営委員会が設置されて運営・管理することとした。そして、平成12年に副総長制の発足に伴う総長、副総長の任務分担の区分に伴い、植物園運営委員会は総務担当副総長が担当することとなった。平成17年度からは、植物園が理学部から独立し、学内共同利用施設として教育基盤施設群に入ったため、植物園運営委員会は、植物園運営専門委員会に移行し、副学長が担当となった。さらに、平成18年度からは、総合学術博物館、史料館、植物園の3学内共同利用施設を統合し、「学術資源研究公開センター」が発足したことに伴い、その運営・管理は、学術資源研究公開センター運営専門委員会が担当することとなった。

植物園は青葉山を含む敷地約49万㎡のおよそ三分の一を一般公開地域として、観察路を設置して広く学内外に開放し、大学の研究・教育に役立てるとともに、一般の生涯教育に役立てることを主たる目的としている。そして、一般市民を対象とした啓発機関として博物館法による博物館相当施設に昭和37年（1962）に指定された。

植物園は自然植物園で、約8割が宮城県地方の丘陵地の気候的極相林とされるモミイヌブナ林に覆われており、丘陵地の自然生態系が良好に保全されていることから昭和47年（1972）7月に国指定の天然記念物「青葉山」に指定された。このように良好な生態系が維持されているため、丘陵地の鳥獣類も豊富であり、特別鳥獣保護区に指定されている。また、仙台城址が平成15年8月27日付けで国指定史跡に指定された。仙台城址の御裏林にあたる本植物園の天然記念物指定範囲（約39ha）が指定地に含まれる。

植物園の建物は昭和21年（1946）に進駐軍のクラブハウスとして建築された棟などを展示室、押し葉標本庫、研究室等に使用してきたが、老朽化が激しくなり、平成8年（1996）ほぼ同様の場所に、本館が新築・落成した。

昭和62年（1987）に故木村有香名誉教授の教え子に当たる名古屋市のヒマラヤ製菓社長津田氏の寄付により植物園記念館（通称津田記念館）が完成した。この記念館は押し葉標本庫を中心とし、貴賓室、ラウンジなどを備え、種々会議の場として利用されるとともに、押し葉標本80万点を収容できる日本の大学としては最大規模の押し葉標本庫を備えている。大正12年（1923）に東北帝国大学理科大学に開設された生物学教室の植物分類学教室を中心として収集されてきた押し葉標本（国際植物標本庫コード：TUS）は平成2年（1990）に

植物園記念館の押し葉標本庫に収納された。押し葉標本を必要とする研究は主として植物園記念館で行われている。

平成 21 年 4 月 29 日、植物園は開園 50 周年を迎え、同日、東北大学川内萩ホールにて井上総長、梅原仙台市長、邑田植物園協会会長らご臨席のもと開園 50 周年記念式典を挙げた。またこの関連事業として、植物園シンポジウム「青葉山の森を 22 世紀に伝える」、ミニ企画展「東北大学植物園の 50 年と青葉山」、植物園ガイドブック「植物園に行こう」の発行を行った。

植物園では研究に必要な生きた植物を栽培し、研究教育に供するために、世界各地から植物を採集する必要があるが、経費や時間の制約があるため、相互扶助精神によってお互いの植物園が種子交換事業を行っている。当植物園では種子交換事業を昭和 42 年（1976）に開始し、世界各地の植物園及び研究機関と隔年おきに種子交換事業を行い、現在 300 ヶ所に及んでいる。この事業で集められた種子は大学院理学研究科及び生命科学専攻の研究・教育に貢献している。

植物園は植物を生きた状態で保存することが重要な業務の一つである。当植物園ではヤナギ科植物の系統保存を行っており、400 近い系統が保存されており、世界一の規模を誇るヤナギ科植物のコレクションである。この系統保存樹から世界各地の植物園や研究機関に苗木の供給を行っている。

近年の野生植物の危機的な状況、そして、植物園自然保護国際機構（BGCI）が提唱する目標の一つ（地球上の絶滅危惧植物種の 50%を生育域外で保全）を受けて、日本でも、地方ごとに拠点園を設け、これらが連動しながら絶滅危惧種の種子を採集、保存、交換し、保全を図る取り組みが始まった。本園も 2005 年に BGCI に加盟すると共に、東北地区における保全拠点園として取り組みを開始し、東北地区の絶滅危惧植物種子採集と種子交換事業に参加している。

また、環境省が進めている日本の長期生態系観測のプロジェクト「モニタリングサイト 1000」に準コアサイト（森林）として 2006 年から参加し、園内のモミ林 1ha のプロットにおいて樹木生長調査、森林生産量調査、地表性甲虫類調査、繁殖鳥類調査を行っている。

一方、本学の教員はもとより、大学院生、学生、他大学、各種研究機関の研究者等が本植物園を利用して行っている各種研究について、その成果を取り纏め、また、研究成果の普及を計るために、平成 9 年度より「植物園利用研究成果報告会」を開催し、同時にそれらを「植物園利用研究成果報告書」として公表している。

平成 8 年 3 月に植物園本館落成に伴い展示内容の一新と充実を図った。天然記念物「青葉山」の自然林の成り立ち、森を構成する樹木、そこに生息する動物、季節の移り変わりを指標する花暦、生物種の多様性と絶滅危惧植物の問題、国際的に行われている種子交換事業の紹介と種子の行動など、本植物園の特徴と植物を中心とした生物界の様子を、大学での研究成果を踏まえて、分かり易く展示している。展示内容については毎年僅かではあるが更新している。

この他、平成 9 年(1997)に植物園ホームページ (<http://www.biology.tohoku.ac.jp/garden>)

/index.html) の開設, 平成 10 年度 (1998) から市民向けの公開講座を開催, 平成 17 年度より, 企画展を開催しており, 近年, 一般市民向けの社会教育活動を企画, 実施している.

八甲田山分園

1929 年 (昭和 4 年)	4 月	東北帝国大学理学部生物学教室の附属施設「八甲田山植物実験所」として開設.
1952 年 (昭和 27 年)	3 月	博物館法による博物館相当施設に指定される.
1952 年 (昭和 27 年)	4 月	本学以外の大学の実習の受入を開始する.
1958 年 (昭和 33 年)	4 月	技官 1 名の定員が認められる.
1964 年 (昭和 39 年)	4 月	助手 1 名の定員が認められる.
1966 年 (昭和 41 年)	4 月	理学部の附属施設となる (文部省令第 22 号).
1985 年 (昭和 60 年)	6 月	1984 年末に竣工した新管理等の落成式が行われる.
1994 年 (平成 6 年)	10 月	実験棟の全面改修工事が完了する.
1999 年 (平成 11 年)	10 月	転出に伴い, 助手 (理学部持ち回り定員) 1 名が削減となる.
2000 年 (平成 12 年)	4 月	理学研究科附属となる.
2004 年 (平成 16 年)	4 月	理学研究科附属植物園八甲田山分園となる.
2005 年 (平成 17 年)	4 月	大学植物園八甲田山分園となる.

植物園標本館 (津田記念館)

植物園記念館 (津田記念館; Herbarium Tsudanum; Tsuda Memorial Herbarium)

現在東北大学の植物標本が収蔵されている植物園記念館は, 東北帝国大学第三講座出身 (1944~1945 年在学) の故津田弘氏の寄付金によって建設されたので, 津田記念館の別名がある. 落成式は津田氏の尊敬する牧野富太郎の誕生日にあわせ, 1987 年 4 月 24 日に行われた. 植物園記念館は大学附属の植物標本館としては, 単一の建物としては日本最大の規模を誇り, 約 80 万点の植物標本を収蔵可能なように設計されている. また, 標本の収蔵条件も最適な状態に保たれており, 閲覧スペースも広くとられているために複数の研究者が同時に調査, 研究を行うことができる. 標本の収蔵スペースに余裕がなく収蔵条件も劣悪なものが多い日本の植物標本庫の中では極めて例外的な存在である.

東北大学植物標本室 (TUS)

1) 概要

東北大学の植物標本は, 現在, 何時でも利用可能な状態に整理された押し葉標本が約 300,000 点, 木材標本約 2,800 点あり, 目下整理中の標本が約 280,000 点ある. 押し葉標本は植物園内にある植物園記念館 (津田記念館) に分類学的順序に従って保管されており, 維持管理の実務は主に植物園が行っている. 本標本館は TUS (木材標本は TUSw) として知られている. TUS は国際植物分類学連合に登録され公示されている東北大学植物標本室

の国際的な略称で、Herbarium Tohoku Universitatis Sendaiensis の頭文字から採ったものであり、木材標本の TUSw の w は wood の略である。

2) 歴史と沿革

植物標本室は 1923 年（大正 12 年）の東北大学理学部生物学教室第三講座の開設とともに植物学の研究と教育のため、当時片平丁にあった旧生物学教室内に設置された。植物標本室は植物学の研究とともに発展し、実質は第三講座によって維持・管理されていた。第三講座は 1964 年（昭和 39 年）に植物分類学講座となり、さらに 1995 年（平成 7 年）4 月 1 日以後は組織改編により大講座制が施行されたことによって生態進化生物学講座の中の植物分類学研究室が旧植物分類学講座に相当することになり、さらに 2001 年（平成 13 年）4 月 1 日以後の生物学教室の生命科学研究科への移行に伴い、維持、管理業務が植物園に移管されることになった。

生物学科のごく初期の植物分類学研究には伊藤篤太郎（1921～1928 年在任）による新種フジノカンアオイ *Asarum fudsinoi* T. Ito の発見・記載があり、これは東北帝国大学理科報告第四輯（生物学）1 巻 1 号（1924）に発表された。伊藤篤太郎の標本は後に伊藤の転任に伴い持ち出されたため、フジノカンアオイの基準標本を含む伊藤の標本は今日、本植物標本室にはごくわずかしか残されていない。初期の時代の標本には吉井義次、田原正人、遠藤隆次（1891～1969）、木村有香（1900～1996）、牧野富太郎（1862～1957）、久内清孝（1884～1981）等のものがある。木村有香（1928～1963 在任）は日本のヤナギ科植物の分類体系を作り上げた分類学者であり、菅谷貞男（1950～1980 在任）とともに今日の本植物標本室の基礎を築いた。1964 年（昭和 39 年）にはヤナギ科植物標本館が理学部附属植物園（当時）内に完成し、ヤナギ科植物標本約 61,400 点（うち基準標本 164 点）が同館に移され、木村は退官後もここで研究を続けた。1969 年（昭和 44 年）に生物学教室の片平から青葉山への移転に伴い植物標本室（上記のヤナギ科標本を除く）も青葉山へと移転した。

1980 年からは大橋広好（1980～2000 年在任）が植物標本室主任になり、大橋の下で立石庸一（1980～1993 年在任）、根本智行（1993～1998 年在任）等によってマメ科植物の研究が中心課題となり、日本国内はもとより、台湾（1982～1992 年）、中国四川省およびチベット（1986 年）、中国南部（1993～1994 年）、北アメリカ（1995～1996 年）、韓国（1996～1997 年）、オーストラリア（1998～1999 年）、フィリピン（1998 年）、ニューカレドニア（1999 年）等においてマメ科植物の調査研究が精力的に実施された。また、大橋は従来行われていなかった世界の植物分類学研究機関との標本交換を開始し、多くの標本を国内外から受け入れた。これらによって収蔵標本数は飛躍的に増大し、青葉山の生物学教室内にあった標本室は手狭となったため、1987 年に植物園内に、生物学教室第三講座出身の津田弘氏（1925～1989）の寄付によって植物園記念館（津田記念館）が設立され、1990 年までに生物学教室の全植物標本を植物園記念館に移動した。1994 年以降、鈴木三男（1994～1997 年生物学教室在任；1997 年 4 月より附属植物園教授）によって現生樹木の木材標本のコレクションが前任地の金沢大学より移管され、TUSw として津田記念館内に保管されることにな

った。鈴木はまた木材標本の採集を日本国内はもとより、ネパール（1995～1997年）、サハラ（1996～1997年）、ニュージーランド（1998年）、中国福建省（1998年）、オーストラリア（1999年）等で行い、採集された木材標本は TUSw に、また同時に木材標本を採集した個体を押し葉標本として本標本室に収蔵した。1995年から横山潤（1995～理学研究科生物学専攻、2001～2007 生命科学研究科）によってベトナムやラオスの植物標本が新たに加わった。1998年からは米倉浩司（附属八甲田山植物実験所）が標本室のスタッフとなり、米倉によって八甲田山周辺を中心とする日本産植物の植物標本が加えられた。教官による収集以外にも、植物分類学を志望する多くの学部学生が本州北部や北海道の地域植物相を調べたり、学部や大学院の学生が自分の専門とする植物を各地で採集したことによって、日本産の植物標本は著しく充実した。2000年の大橋の退官に伴い、鈴木が植物標本室主任となり現在に至っている。2001年には津田記念館に所蔵されている基準標本の目録が出版された（Ohashi et al. 2001）。

3) 収蔵標本

本標本室に収蔵されている標本の主体をなすのは維管束植物の押し葉標本であり、現在約 400,000 点が整理された状態にある。特に、木村有香の研究したヤナギ科と、大橋広好の研究したマメ科が充実しており、96 点の正基準標本（Holotype）を含む 293 点の基準標本（Ohashi et al. 2001 にまとめられた数で 2000 年現在。その後 20 点ほど増加している）と論文の証拠標本多数が含まれている。藻類の押し葉標本は少数が存在するが、分類の専門家が不在であるために整理されていない。蘚苔類の乾燥標本は、樋口俊雄氏から寄贈された福島県植物誌の証拠標本を中心に約 7,000 点が保管されている。本標本室の標本の採集地域を見ると、国内では東北地方のものが多く、東北地方以外では琉球諸島からの標本に重要なものが多い。国外では、台湾、中国南部およびチベット、ネパール、北アメリカ、オーストラリアで採集された標本が多く収蔵されている点が特色である。

生物学教室の教官による採集品の中で、本標本室を特徴づける重要なものには次のようなものがある。

- * 日本産木本植物：農林水産省（2002 年度からは独立行政法人に移行）森林総合研究所が主催して毎年行われている木材標本採集調査で採集された木材の証拠標本で、採集地は北海道から沖縄までの日本各地を網羅しており、毎年増加中である。この証拠標本は、木本植物の材構造を研究する際、その材料の同定の信頼性を保証する上で不可欠の標本であり、貼付済みのものに関しては全てに木材標本の参照番号が記入され、木材標本の証拠標本であることを示すスタンプが押印されている。
- * 台湾産植物：大橋による 6 次にわたる台湾の学術調査によって採集された約 10,000 点の標本を主体に、台湾の研究機関との標本交換によって得た標本も含み、日本では最も充実した台湾植物のコレクションである。特にマメ科、バラ科、サトイモ科、リンドウ科、ツチトリモチ科などがよく研究されており、その結果として発表された新分類群の基準標本

や論文の証拠標本も含まれている。

- * 中国南部産植物：東北大学生物学教室と中国科学院華南植物研究所による 1993 年と 1994 年の 2 度にわたる中国の広東，広西，湖南，海南の 4 省の植物学合同調査によって採集された約 1200 点の標本と，鈴木による中国福建省武夷山の東北大学 - 中国科学院植物研究所合同調査（1998 年）によって採集された約 400 点の標本を主体に，中国科学院華南植物園との標本交換によって得た標本を含む。
- * 四川省西部-チベット産植物：1986 年に東北大学と中国科学院植物研究所との合同で行われた日中友好学術登山隊植物班によって，外国人に開放されて間もない成都-ラサ間の川蔵公路沿線で採集された約 8,000 点（重複品も含む）の標本。それまで外国人の立ち入れなかった地域の採集標本であり，学術上も貴重である。これに加えて，1990 年代末からハーバード大学の D. E. Boufford 教授が中心となって採集したこの地域の標本の重複品が同大学から交換で送られてきており，その数は約 600 点に達する。
- * ネパール産植物：東京大学を中心に進められているネパールの学術調査で採集された標本の重複品や，1983 年に立石が千葉大学の東ネパール調査隊に参加して採集した標本を主体とし，点数は整理済みのものでおよそ 5,000 点であり，年々増加中である。
- * 旧ソ連産植物：ロシア科学アカデミーのモスクワ植物園との過去 30 年にわたる標本交換事業を通じて得られた旧ソ連およびその周辺地域(モンゴル，トルコ)で採集された 2500 点ほどの標本。同植物園の主任研究員であった A.K. Skvortsov 博士が，専門のヤナギ科植物研究を通じて東北大学の木村有香教授と親交のあった縁で交換事業が続いており，分類群では特にヤナギ科が多く，地域では特に中央アジアとコーカサス，クリミア地域のものが主体を占める。
- * オーストラリア産植物：根本，横山による 1998～1999 年のオーストラリア北部（クイーンズランド州，北部地方）の調査によって採集された標本と，鈴木，米倉による 1999 年のオーストラリア南部（西オーストラリア州南部，タスマニア州，ビクトリア州およびニューサウスウェールズ州南部）の調査によって採集された標本。
寄贈を受けたり購入したりしたコレクションの中で，特に重要な，特色あるものには以下のようなものがある。
- * 岩野俊逸コレクション：新潟県小国町在住の岩野俊逸氏より寄贈を受けた標本で，総数約 20,000 点，ほぼ整理済みである。採集地は北海道から沖永良部島までの沖縄県を除くほぼ日本全土に及び，特に新潟県で採集されたものが多く，新潟県植物分布図集の証拠標本も多く含まれる。日本以外では，少数ながらアラスカで採集された標本が含まれる。
- * 池田登志男コレクション：長野県佐久市在住の池田登志男氏より寄贈を受けた標本で，採集地は長野県を中心に北海道から屋久島までの日本各地に及んでいる。
- * 岩淵初郎コレクション：岩手県在住の岩淵初郎氏より 1961 年頃に購入した標本で，総数は約 20,000 点，ほぼ整理済みである。採集地は主に岩手県内で，特に水沢市周辺で採集されたものが多い。
- * 工藤祐舜コレクション：北海道帝国大学教授だった工藤祐舜氏が台北帝国大学教授に転

任する際に、個人で所蔵していた植物標本が吉井義次（植物生態学講座初代教授）を通じて当植物標本室に移管されたもの。北海道各地のものに加え、北千島（パラムシル島）、北サハリンの植物標本が多く含まれており、全て整理済みである。

- * 鈴木貞次郎・貞雄コレクション：日本産タケ・ササ類の研究者として知られる鈴木貞次郎・貞雄父子の採集品で、鈴木貞雄氏より国立科学博物館に寄贈されたものを、国立科学博物館の金井弘夫氏を通じて当植物標本室に移管したものが大部分を占める。他に、少数ではあるが、鈴木貞次郎・貞雄両氏から直接当植物標本室に寄贈された標本もある。数は重複品も含めて約 80,000 点にのぼり、特にタケ・ササ類が多い。少数ながら戦前に北朝鮮や中国東北部で採集された標本も含まれる。日本国内では特に福島県の標本が充実しており、福島県植物誌の証拠標本も多く含まれる。2009 年度にタケ・ササ類を除く一般標本の整理がようやく完了したが、タケ・ササ類はまだ大部分未整理である。
- * 照屋全昌コレクション：戦前にシンガポールに在住していた照屋全昌氏が自身で採集しシンガポール植物園に寄贈した植物標本の重複品を、同植物園の好意により寄贈を受けたもの。シンガポールとマレー半島南部で採集されたものが多く、この地域の植物を知る上で貴重な資料である。全て整理済みである。
- * 御江久夫コレクション：山口大学の御江久夫氏が琉球列島と韓国において採集した植物標本で、点数は約 5,000 点。琉球列島の植物標本には初島住彦による琉球植物誌の証拠標本を含む。全て整理済みである。
- * 山中二男コレクション：高知大学で長く四国地方の植物を研究していた高知大学の故山中二男氏のコレクションで、氏の死後遺族から寄贈された。点数は約 80,000 点で、特に四国地方の標本が多い。大部分が未整理の状態にある。
- * 中澤保コレクション：高知県南国市の中澤保氏から 2007 年と 2008 年の 2 回にわたって寄贈を受けた日本産植物のコレクションで、特に四国の標本が充実している。点数は約 3 万点。ラベルがつけられていないためまだ大部分未整理である。
- * 吉川純幹コレクション：日本産スゲ属図譜の作者である吉川純幹氏のコレクションで、永らく未整理のまま上越教育大学に保管されていたが、最近になって東北大学に移管された。点数は重複品も含めて約 20,000 点、その大部分をスゲ属植物が占め、日本産スゲ属植物図譜の基となった標本も多く含まれている。まだ整理された標本はごく一部である。
- * 湯沢陽一コレクション：福島県いわき市在住の湯沢陽一氏から寄贈を受けたコレクションで、以前から「福島県植物誌」の証拠標本を中心に寄贈を受けていたが、2009 年度に湯沢氏がそれまで所蔵していた標本の一括寄贈を受けた。総点数は重複品を含んでおよそ 10000 点に達し、全てにラベルがつけられている(一部はラベル情報が日本語で書かれているため現在欧文ラベルの作成を行っている)。標本の大部分は福島県いわき市とその周辺で採集されたものであり、「福島県植物誌」の証拠標本も多い。整理・貼付け作業は現在優先的に行っている所であり、数年のうちに整理が完了する見込みである。

木材標本 (TUSw)

木材標本は日本産の木本植物が中心であるが、中国（福建省）、ネパール、ニュージーランド、オーストラリア産等海外産のものも少数ながら含む。農林水産省森林総合研究所から寄贈を受けたものについては、その木材標本番号 (TWTw no.) で整理されており、それ以外のものについては TUSw 独自の番号が付されて整理され、いずれの標本とも、証拠標本の有無、ある場合はその標本番号や標本データ等が全てデータベース化されて管理されている。木材標本は、光学顕微鏡観察用のプレパラート標本、樹皮つきの材鑑標本、および樹皮の無い板材に加工された標本に大別され、プレパラート標本はヤナギ館内に、他の標本は記念館内の植物標本庫内のキャビネットに保管されている。

東北大学植物園植物標本室 (TUSG)

東北大学植物園の植物標本室は、理学部附属植物園の設立 (1958 年) と同時に設立され、当初は植物園内に自生するかまたは栽培されている植物の標本を収蔵するための標本庫であった。植物分類学連合に登録され公示されている国際的な略称は TUSG である。大場秀章 (1970~1972 年在任) がスタッフとなって以後、標本室は拡充されて標本交換事業も行われるようになり、植物分類学的研究の拠点として整備された。大場の後は内藤俊彦 (1971~2002 年在任) が標本庫の管理を引き継いだ。整理済みの標本約 20,000 点は植物園本館の 1 室に保管されていたが、2007 年度から標本を津田記念館の TUS の標本棚に順次移し、管理を一元化する作業を進めている。2009 年度は離弁花類の残りを移動する作業を行い、これで残されたのは合弁花類のみとなっている。2010 年度をもって一元化作業は完了する予定である。基準標本は 7 点確認されており、そのうち 2 点が正基準標本である。なお、未整理の標本が約 40,000 点あるが、標本データの不備等の影響もあって整理は進んでいない。

本標本庫を特徴づけるコレクションには次のようなものがある。

- * 小笠原諸島産植物コレクション：1971 年に当植物園が行った小笠原諸島植物調査の際に採集された植物標本。 *Pteris boninensis* H. Ohba の正基準標本 (Holotype) を含む。
- * 大場秀章コレクション：東京大学名誉教授の大場秀章氏が、当植物園の助手として赴任した際に、高校時代までに自身で採集したり、生物部の同僚などから寄託されたシダ類を中心とする日本産標本約 8000 点からなる。うち 5000 点ほどは整理されているが、まだ未整理のものが残っている。

(2) 植物園の設立趣旨

植物園は本園および八甲田山分園敷地内に棲息する植物及び動物を保護・保全してそれを長く子孫に伝えるとともに、これを学術上の貴重な資料として保護管理にあたり、東北大学教職員及び学生の植物学研究に資し、一方広く開放して一般の植物学上の知識の進歩、発達とその普及を計る。また、この自然植物園に加えて、多数の植物を国内、国外より蒐集栽培し、本学の教育研究に資するとともに広く植物学の啓蒙の用に供することを目的とし、その基礎的学術研究を行う。これらの諸活動を通して生物多様性保全、絶滅危惧植物

保護，地球環境保全に寄与する。

(3) 植物園の運営方針

- 1) 本園及び八甲田山分園敷地内の動植物を保護管理するとともに，その現状を調査研究し，記録する。
- 2) 本園及び八甲田山分園敷地内の動植物を教育研究に供するとともに広く一般公開し，植物学，自然保護等の啓蒙に資する。
- 3) 所蔵植物さく葉標本，木材標本等の維持管理を行うとともにその収蔵品の充実を図り教育研究に供する。
- 4) 野生植物，特に東北地方に自生する植物を中心に種子を蒐集し，世界の植物園等と種子交換事業を通してそれらの植物の教育研究に寄与する。
- 5) 野生植物の保護，絶滅危惧植物保全のため，当該植物の種子蒐集，育成等を行う。
- 6) 植物学及びその関連諸分野，自然保護，環境問題等についての公開講座，企画展示等を行い，その啓発を計る。

(4) 植物園の組織と運営システム

植物園内の組織

園長 1 (本学専任の教授)

教授 1

助教 2 (本園担当 1, 分園担当 1)

技術職員 4, 再雇用職員技術職員 1

時間雇用職員 2 (事務, 窓口担当), 時間雇用職員 1 (研究室担当),

時間雇用職員 1 (清掃担当)

植物園会議

園長, 教員, 技術職員にて構成

月 1 回開催

植物園の運営に関する実務についての連絡, 実施等を行う

植物園部会委員名簿

農学研究科	両角 和夫	教授 (運営専門委員)
	陶山 佳久	准教授
生命科学研究科	中静 透	教授 (運営専門委員)
	高橋 秀幸	教授
	西谷 和彦	教授
文学研究科	仁平 義明	教授
キャンパス計画室	杉山 丞	特任教授
埋文調査室	藤澤 敦	特任准教授

植物園教員	鈴木 三男 教授
	米倉 浩司 助教
	大山 幹成 助教

植物園兼務教員

生命科学研究所	西谷 和彦 教授
	横山 隆亮 講師
	占部城太郎 教授
	中静 透 教授
	彦坂 幸毅 教授
	酒井 聡樹 准教授
	牧 雅之 准教授
	佐藤 雅志 准教授
文学研究科	仁平 義明 教授
環境科学研究科	境田 清隆 教授
農学研究科	清和 研二 教授
	陶山 佳久 准教授
	昆野 安彦 准教授
高等教育開発推進センター	田嶋 玄一 助教

センター（植物園）協力研究員

大橋 広好 東北大学名誉教授（理学研究科）
 根本 智行 石巻専修大学工学部教授
 黒沢 高秀 福島大学共生システム理工学類准教授
 片岡 博尚 東北大学生命科学研究科元准教授
 上中 央子 東北大学教育研究支援者

（５）植物園の施設概要

本園

所在地 宮城県仙台市青葉区川内 12-2, 45-1, 45-2, 51, 川内山屋敷 50-2

敷地面積 515,217 m²

（うち国指定天然記念物「青葉山」及び国指定史跡「仙台城」範囲 385,153 m²）

植物園本館 S2 1996年（平成8年）竣工 1,883 m²（1階 1,212 m², 2階 671 m²）

植物園記念館（津田記念館） 1986年（昭和61年）竣工 鉄筋コンクリート2階建 建物面積 488 m², 延面積 1,117 m²

植物園標本室（ヤナギ館） 1963年（昭和38年）竣工 鉄筋コンクリート1階建 床面積 131 m²（標本室 81 m², 研究室 25 m², 標本作製室 25 m²）

八甲田山分園

所在地 青森県青森市大字荒川字南荒川山 1-1

敷地面積 74988.94 m²

管理棟 S2 1984 年（昭和 59 年）竣工（1985 年から供用開始）木造 2 階建 128.31 m²

実験棟 S1 1929 年（昭和 4 年）建築，1994 年（平成 6 年）改修 木造平屋建 168.93 m²

新館（特別実験室）S1 1966 年（昭和 41 年）竣工 木造平屋建 38.8 m²

Ⅱ 2011年度の活動状況

Ⅱ-1. 学術資源研究公開センターの活動

2011年度における学術資源研究公開センターの活動のうち、ここではセンター全体の活動として実施したものについて述べる。各業務組織単位で実施した事業についてはⅡ-2「各業務組織の活動」を参照されたい。

1. センターの組織整備・運営

1-1. 運営専門委員会

運営専門委員会議事録

第1回

日 時：平成23年8月3日（水） 13時30分から14時45分

場 所：附属図書館2号館大会議室

出席者：中静委員長(学術資源研究公開センター長・植物園長)

柳田(総合学術博物館長), 佐藤(史料館長), 池尾(教), 金谷(法), 伊藤(経), 掛川(理), 稲田(薬), 伊藤(工), 木下(情報), 星野(環境), 村木(教育情報), 佐々木(金), 堀(加齢), 高桑(多元), 栗林(アジア), 吉本(高教), 鈴木(植物園), 西(博物館), 佐々木(博物館), 高嶋(博物館), 永田(史料館) の各委員

「議 事」

1. 東日本大震災報告

各業務組織の長及び所属委員から、それぞれの東日本大震災における被害状況、復旧状況、及び社会貢献活動等について、【資料1-①~③】に基づき、報告があった。

2. 平成22年度決算

各業務組織の長及び所属委員から、それぞれの平成22年度決算について、【資料2-①~③】に基づき、説明があった後議長から諮り、これを承認した。

3. 平成23年度事業計画及び予算

各業務組織の長及び所属委員から、それぞれの平成23年度事業計画及び予算について、【資料3-①~③】に基づき、次いで、議長から平成23年度全学的基盤経費【資料3-④】に基づき、説明があった後議長から諮り、これを承認した。

4. 教員人事について

議長から、第1回植物園教授選考委員会における検討及び公募状況について、【資料4】に基づき、報告があった。

5. 協力研究員の委嘱について

西委員から、博物館の協力研究員の1名の委嘱について【資料5】に基づき説明があった後議長から諮り、これを承認した。

6. その他

議長から、センターは厳しい予算のなかで運営していることをご理解のうえご支援願

たい旨発言があった。

第2回

日 時：平成24年3月8日（木）10時から11時48分

場 所：附属図書館2号館大会議室

出席者：中静委員長(学術資源研究公開センター長・植物園長)

柳田(総合学術博物館長), 佐藤(史料館長), 池尾(教), 金谷(法), 伊藤(経), 掛川(理), 長友(国際文化), 星野(環境), 堀(加齢研), 中島(通研), 吉本(高教), 鈴木(植物園), 西(博物館), 長瀬(博物館), 佐々木(博物館), 高嶋(博物館), 永田(史料館) の各委員

委任状提出者：11名

「議 事」

議事に先立ち、議長から、委任状提出者（11名）については、審議の際に代理人が委任状提出者数分の投票権を持つこと、及び前回会議議事録についてご意見等がある場合には、会議終了時までお知らせ願いたい旨発言があった。

1. 学術資源研究公開センター長候補者の選考

議長から、任期満了に伴う学術資源研究公開センター長候補者の選考について、以下のとおり説明があった。

- センター長候補者選考委員会を本日付けで設置したいことから、委員を選出するにあたり、このあと投票を行いたいこと、
- 選考委員会で決定した候補者については、今月9日に書面審議（12日を意見等の提出期限）としたいこと
- センター長の選考は、東北大学教育基盤施設群運営委員会の議に基づき、総長が行うこと

次いで行われた投票の結果、中静、柳田、佐藤、西及び永田委員を選考委員に、掛川委員を予備委員とすることの承認を得た。

2. 総合学術博物館長の選考

総合学術博物館長から、任期満了に伴う総合学術博物館長の選考について、総合学術博物館部会における審議の結果、柳田俊雄現館長の再任とした旨報告があった後議長から諮り、承認を得た。

3. 史料館長の選考

史料館長から、任期満了に伴う史料館長の選考について、史料館部会における審議の結果、佐藤弘夫氏（文学研究科教授）を候補者として選考した旨報告があった後議長から諮り、承認を得た。

4. 植物園の教員人事

議長から【資料1】に基づき、植物園教授人事選考委員会における審議の結果、牧雅之氏（生命科学研究科准教授）を候補者として選考した旨報告があった後、投票を

行い、承認を得た。

5. 名誉教授の称号授与

議長から【資料2】に基づき、鈴木三男教授を名誉教授称号授与者として総長宛上申することについて説明があった後諮り、承認を得た。

6. 協力研究員の委嘱

各業務組織の長及び所属委員から【資料3-①～3-③】に基づき、協力研究員の委嘱について説明があった後議長から諮り、承認を得た。

7. 平成23年度活動報告及び平成24年度活動計画 ・ ・ 資料4-①～4-③

各業務組織の長及び所属委員から【資料4-①～4-③】に基づき、平成23年度の活動及び決算見込額、平成24年度の活動計画について報告があった。

なお、出席者から植物園の予算額（マイナス予算）について指摘があり、議長及び関係者から、事業規模を縮小することなく、大学当局や関係施設等と連携を図りながら、抜本的に見直していきたい旨説明があった。

8. その他

1) 東日本大震災からの復旧状況

各業務組織の長及び所属委員から、東日本大震災からの復旧状況について報告があった。

2) 台風（平成23年9月）の被害と復旧状況

各業務組織の長及び所属委員から、台風（平成23年9月発生）の被害と復旧状況について報告があった。

3) 外部資金受入額

議長から【資料5】に基づき、平成23年度の外部資金受入額について報告があった。

2. 資料収集・公開・普及教育事業

2-1. センターデータベースの整備事業

本センターを構成する3業務組織（博物館・植物園・史料館）は、本センターとして組織統合する以前より、それぞれの業務組織において独自の設計思想にもとづいて資料標本データベースの構築に取り組んできた。各業務組織が扱う資料標本の形態は実に多様であり、また、その活用形態も大きく異なっている。そのため、本センターでは、利点の少ない各業務組織のデータベースのシステム的な統合ではなく、資料標本撮影や画像処理等のための設備整備や作業補助体制など、データベース構築に必要な基盤整備を本センターのデータベース整備事業の中核として実施した。

なお、実際に実施した整備事業の詳細については、各業務組織の項目においてデータベース整備事業として記載する。

3. その他

3-1. 附属図書館業務に対する指導・支援

(1) 附属図書館協力研究員としての活動

曾根原 理・大原理恵・小川知幸の3名は、東北大学附属図書館協力研究員として以下の業務を委嘱され、実施した。

1) 曾根原 理

①調査研究室の室員としての活動

- ・貴重図書DB化の業務計画を検討
- ・米国東アジア図書館協議会（於カナダ・トロント）における講演
- ・狩野亨吉関係資料の調査

②斎藤養之助家史料受入・整理検討委員会としての活動

③貴重図書選定委員会の委員としての活動

2) 大原理恵 ※2011年8月以降業務体制の変更により、協力研究員として委嘱された業務以外の学術調査研究

等を含む（平成23年度第1回学術資源研究公開センター運営専門委員会史料館部会議事要録参照）。

- ・貴重図書等委員会委員
- ・貴重図書地震被害状況の調査・震災による損傷等の修復・対策に関する助言
- ・貴重図書に関する調査・報告

3) 小川知幸

- ・震災復旧活動（貴重図書等破損状況の確認および修復リスト作成、破損本修復にかかる助言・選定・業者対応、修復仕様書作成等） 2011年3月～5月、10月～11月。
- ・チャールズ・ダーウィン著『種の起原』（On the Origin of Species, 1859）初版本の鑑定と保存修復 2011年10月～2012年1月。
- ・ミュンスターベルク文庫の照会にかかる業務 2011年6月～2012年3月。
- ・来賓ゲーテ・インスティトゥート総裁クラウス＝ディーター・レーマン教授一行附属図書館来館対応 2011年10月。
- ・狩野文庫『解体新書』、芹澤文庫蔵 Catalogue of the Morse Collection of Japanese pottery by Edward S. Morse 鑑定・「資料紹介」執筆 2011年6月、12月。
- ・準貴重図書ラファエル・フォン・ケーベル文庫目録作成中（2009年度より継続）。
- ・図書情報係貴重図書等目録作成講習会 2012年3月。

Ⅱ－２．各業務組織の活動

総合学術博物館

１．組織・運営・財務

１－１．博物館部会の開催

第１回

日 時：平成２３年７月２５日（月） １７：００～１８：００

場 所：理学部総合棟物理小会議室 ７３５号室

出席者：柳田委員長

委 員：吉田，辻川，西，佐々木，高嶋，佐藤，小川

陪 席：佐藤専門職員

欠 席：阿子島，箕浦，石渡，長岡，長瀬

「議 事」

１）２０１０年度活動報告（２月１７日以降）

柳田委員長から資料 1-1 に基づき説明があり，これを承認した．

２０１０決算書（案）について

西委員から資料 1-2 に基づき説明があり，これを承認した．

２）東日本大震災に関する報告および文化財レスキュー活動について

資料 2-1 に基づき，柳田委員長から震災報告の説明があり，これを承認した．なお，自然史標本館に理学部学生の避難者を受け入れ，博物館教員が交替で管理を行った．佐々木委員よりレスキュー活動の説明があり，これを承認した．

３）２０１１年度活動方針について

西委員および佐々木委員から，資料 3-1 に基づき説明があり，これを承認した．

２０１１年度予算（案）について

西委員から，資料 3-2 に基づき説明があり，これを承認した．

４）協力研究員の推薦について

西委員から資料 4 に基づき説明があり，これを承認した．（中沢弘基）

５）その他

データベース整備について成果公表を考えるべきとの意見があった．

第２回

日 時：平成２４年２月１６日（木） １６：００～１６：５０

場 所：理学部総合棟物理大会議室 ７２１号室

出席者：柳田委員長

委 員：石渡，長岡，西，長瀬，佐藤，小川

陪 席：佐藤専門職員

欠 席：阿子島，吉田，箕浦，辻川，佐々木，高嶋

「議 事」

1) 2011年度活動報告・決算見込みについて

西委員から資料1-1, 1-2に基づき説明があり, これを承認した. なお, 震災により活動開始が7月1日からとなった.

2) 2012年度活動方針について

西委員から, 資料2に基づき説明があり, これを承認した.

3) 協力研究員の推薦について

西委員から資料3に基づき説明があり, これを承認した. (吉田武義)

4) その他

岩石標本のデータベースについて意見があり, 協力研究員と共に次年度から推進する旨, 発言があった.

1-2. 学内・学外からの事業資金受託状況

1-2-1. 学内基金

平成23年度全学的基盤経費に「学術資源研究公開センター公開事業に関わる経費」として, 16,000千円の配分を受けた. これらの事業・企画は, 東北大学開学以来の100年間に蓄積された学術財産を保管・継承し, 学術資源化を図るとともに, その研究成果を広く学内外に公開し, 社会に還元するためのものであり, 学術資源研究公開センターが行うべき基本的事業である.

1-2-2. 学外助成金

- (1) 独立行政法人国立青少年教育振興機構助成金 子どもゆめ基金「なぞの珍獣 パレオパラドキシアを探せ!」(主催:かたちのふしぎ研究グループ, 代表 永広昌之・東北大学総合学術博物館教授)

2. 収蔵・展示事業

2-1. 資料標本等収蔵関連事業

- (1) 資料標本等収蔵関連事業(データベース)

1) 資料標本の受入等

a. 標本受け入れ

- ・はやぶさ超合金模型1点
- ・地球深部探査船「ちきゅう」模型1点
- ・アンモナイト化石9点
- ・コノドント化石110点
- ・オオハクチョウ剥製1点
- ・現生クジラ部分標本36点

b. 新規登録番号発行 No.111040~No.111167

(2) 博物館データベース関連事業

事業概要：

- ・ 標本保管場所確認作業および保管場所データ入力作業
作業対象：薄片標本 693 点，大型現生サンゴ標本 3047 点
- ・ 文献の標本情報入力作業
作業対象：東北大学理科報告（地質学）9 巻，1062 件
- ・ 「博物館デジタル工房」開設準備及び3次元デジタル標本システム開発として以下の作業を実施。
CT 撮影及びデジタル標本作成件数：1113 件
共同研究及び撮影依頼受け入れ標本件数：286 件
（浮遊性有孔虫 220 件，現生爬虫類 44 件，魚竜 1 個体，昆虫 10 件，
コノドント 12 件）
断層像画質改善用プログラム制作作業 3 件

(3) 展示資料標本等の撮影及び画像制作作業（作業委託）

写真撮影：魚竜館標本 55 件

(4) データベースアクセス数

公開データベースアクセス数：54,924 件（2011 年度：2011 年 4 月～2012 年 3 月）
2010 年度は 69,330（2010 年 4 月-2011 年 3 月）

(5) ホームページおよびデータベースサイト訪問者数

- ・ 総合学術博物館 HP（トップページ）訪問者数
合計 118,387（2011 年度）（2010 年度は 139,981）
- ・ 公開データベース閲覧者数
e-foram stock（三次元電子標本データベース）
合計 14,042（2011 年度）（2010 年度は 19,986）
- ・ 河口慧海
合計 7,639（2011 年度）（2010 年度は 8,073）
- ・ 河口慧海展
合計 1,001（2011 年度）（2010 年度は 512）
- ・ 金属博物館寄贈データベース
合計 4,840（2011 年度）（2010 年度は 5,649）
- ・ 考古資料データベース
合計 10,307（2011 年度）（2010 年度は 12,547）
- ・ 鉱物データベース
合計 4,187（2011 年度）（2010 年度は 4,054）
- ・ 冬虫夏草データベース
合計 7,937（2011 年度）（2010 年度は 6,769）
- ・ さく葉標本データベース
合計 1,341（2011 年度）（2010 年度は 1,458）
- ・ 斉藤常正有孔虫標本データベース
合計 12,662（2011 年度）（2010 年度は 19,959）

2-2. 展示関連事業

現在は理学部自然史標本館を共用しており，常設展示は自然史標本館のそれを共用している．本年度は企画展を開催した．

(1) 企画展

総合学術博物館の開館に先立ち、東北大学が所蔵する貴重な資料標本類の学術コレクションを広く紹介する展覧会「東北大学総合学術博物館のすべて」シリーズを、8年にわたり毎年1～2回ほど開催している。今年度は下記の企画展を実施した。

1) 東北大学総合学術博物館のすべて XII

「復興 南三陸町・歌津魚竜館 ―世界最古の魚竜のふるさと」

仙台市科学館・南三陸町との共催、福井県立恐竜博物館・東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会・宮城県被災文化財等保全連絡会議の協力により、企画展「東北大学総合学術博物館のすべて XII 復興 南三陸町・歌津魚竜館 ―世界最古の魚竜のふるさと」を、仙台市科学館エントランスホールを会場として、2012年2月7日から3月25日まで開催した。この企画展では、2011年3月11日の津波により被災した歌津魚竜館の収蔵標本を展示した他、総合学術博物館が参加した文化財レスキュー活動を紹介し、新たな魚竜館展示を再構築した。

2) 特別展示「東日本大震災―何が起こったか―その記録と解析」

共催：総合学術博物館・総務部広報課

内容：河北新報による東日本大震災の写真記録，今回の地震と津波についての東北大の研究，東北大の災害対応を紹介。

会場：片平キャンパス・エクステンション教育研究棟広報スペース

期間：2011年9月28日から2012年3月（片平まつりでのパネル展示

会場の入場者数は10月8日1,548人，9日1,163人）

3) 理学部開講100周年記念展示

共催：総合学術博物館・理学研究科

内容：東北大学理学部は，前身の東北帝国大学理科大学が1911年9月に講義を開始してから，2011年で100周年を迎えた。理学部の各学科の歴史や業績，最新の研究を紹介。

a) 理学部オープンキャンパス，日時：2011年7月27日・28日，会場：理学部自然史標本館

b) 理学部開講100周年記念式典，日時：2011年9月10日 会場：仙台メトロポリタンホテル

c) 期間：2011年10月14日から11月10日，会場：川内萩ホール展示ギャラリー

d) 理学部開講100周年記念公開シンポジウム，日時：2012年3月15日，会場：せんだいメディアテーク

4) 特別展示「はやぶさ・かぐやを支えた東北大の研究」

共催：総合学術博物館，総務部広報課

内容：前年度の特別展示「東北が支える宇宙惑星科学」から抜粋して，小惑星探査機「はやぶさ」と月周回衛星「かぐや」にかかわる東北大の研究を紹介。

会場：片平キャンパス・エクステンション教育研究棟広報スペース

期間：2011年5月から2012年3月

2-3. その他

(1) 広報関連事業

- ・常設展示および企画展，普及講演会，普及事業等の広報のために，ホームページ制作，印刷物制作及び新聞等への掲載依頼を行った。
- ・仙台市博物館連携ネットワーク SMMA に参加した。

3. 教育・教育支援・普及教育活動

3-1. 入館者統計等

博物館収蔵標本の公開は理学研究科自然史標本館の施設を共有して行っている。2011年度の入館者数は下表の通りである。

2011年度総合学術博物館（自然史標本館）入館者数

有 料 者 数				無 料 者 数		合 計		
個 人		団 体		大 人	小 人	大 人	小 人	計
大 人	小 人	大 人	小 人	大 人	小 人	大 人	小 人	計
3,616	642	232	0	2,009	1,256	5,857	1,897	7,754

備考

- 3月11日の東日本大震災により，3月12日から6月30日まで休館，7月1日に開館
- ホームカミングデーの標本館無料開放
- 開館記念日（10月3日）の無料開放
- オープンキャンパス（7月27日～28日）の無料開放（延べ1,254名）

3-2. 学内教育との連携

(1) 授業・実習等での博物館の利用

2011年度には次のような学内の授業・実習において博物館の利用があった。

- 全学教育科目：地球の科学（延べ人数88人）
惑星地球のダイナミクス（リタソフ：20名，留学生向け）
- 専門教育科目：岩石学入門（吉田：33名）
- その他：博物館学Ⅱ（51名）

自然科学基礎 C (宮城教育大学教育学部 川村 : 56 名)

地球肝要の変遷と生物の進化 (山形大学理学部 丸山 : 31 名)

セミナー (佐藤 : 延べ 6 名)

3-3. 学外機関の利用

県内・県外の小中高等学校および大学での授業の一環として、また、社会学級、子供会、教員の研修その他の活動としての博物館の利用があった。多人数の団体の延べ利用回数、利用人数は次表のとおりである。

2011 年度 学校・団体等利用状況 (学内授業を除く : 有料・無料を含む)

利用区分	延べ利用回数	延べ利用人数	備 考
オープンユニバーシティ	2	1,254	オープンキャンパス (1,254)
他大学	2	88	宮教大 1, 山形大 1
小学校	12	337	県内 10, 山形 1, 福島 1
中学校	14	302	県内 3, 福島 11
高等学校	8	356	県内 4, 福島 2, 秋田 1, 岩手 1
高専・専門学校	1	12	県内 1
その他	6	90	県内 1, 岩手 1, その他 4
計	45	2,439	

3-4. 体験活動等

博物館が企画・実施あるいは後援した博物館体験活動等の企画と実施状況は以下の通りである。

(1) 大学博物館体験活動

子どもゆめ基金助成活動 (独立行政法人国立青少年教育振興機構より助成) 「なぞの珍獣 パレオパラドキシアを探せ！」(主催:かたちのふしぎ研究グループ, 代表 永広昌之東北大学総合学術博物館教授) を後援した。本活動は、小学校高学年～高校生を対象として、2011 年 8 月 17～18 日に実施された。1 日目は仙台市太白区北赤石名取川河床で 1500 万年前の地層を観察し、化石発掘をおこなった。2 日目は午前には室内で化石整形作業とレプリカ作成を行い、午後は国立科学博物館の甲能直樹先生によるパレオパラドキシア化石の講義。参加者 30 名。

3-5. ニュースレター・ホームページ

(1) ニュースレターの発行状況

1) ニュースレター「Omnividens」(オムニヴィデンス), no. 39, 2011.8, 8 p.

「魚竜館被災す 救援を請う」- 東北大標本救難隊活動報告, 世界を再構成する オル

テリウス『世界の舞台』のコンポジションなど.

2) ニュースレター「Omnividens」(オムニヴィデンス), no.40, 2011.12, 8 p.

「原発事故にかかわる放射線関連の活動」東日本大震災研究レポート, 「東日本大震災～何が起こったか～ その記録と解析」展示報告, 「なぞの珍獣パレオパラドキシアを探せ!」体験活動報告など.

3) ニュースレター「Omnividens」(オムニヴィデンス), no.41, 2012.3, 8 p.

レスキューとしての企画展「復興, 南三陸町・歌津魚竜館」ー世界最古の魚竜のふるさと 開催報告, 「グローバル化する近代地図帳」, サンゴと熱帯魚の生体展示を始めましたなど.

(2) 総合学術博物館ホームページ

2007年1月31日に総合学術博物館のホームページを全面的にリニューアルして以降, 継続して情報の更新を行っており, 本年度は主に以下の更新が行われた.

2011年8月17日

ニュースレター第39号をアップ

2011年9月1日

大学博物館体験活動「なぞの珍獣 パレオパラドキシアを探せ!」活動報告をアップ

2011年12月21日

ニュースレター第40号をアップ

2012年2月6日

企画展「復興 南三陸町・歌津魚竜館開催のお知らせ」をアップ

2012年2月29日

その他の展示「東日本大震災 ～何が起こったか～ その記録と解析」をアップ

2012年3月26日

ニュースレター第41号をアップ

4. 学生に対する教育活動

4-1. 担当した講義名

(1) 学部専門教育(文学部・理学部)

「考古学各論」, 「考古学概論」, 「考古学実習」, 「博物館学Ⅱ」, 「地球の科学」(分担), 「地学実験」(分担), 「進化古生物学」, 「地圏情報解析学」, 「地圏情報解析学実習Ⅱ」, 「日本の地質誌」(分担), 「固体地球の進化」, 「野外実習Ⅱ」, 「野外巡検Ⅳ」(分担), 「造岩鉱物学」(分担), 「鉱物組織学」, 「地球物質科学概論」(分担), 「古生物学実習」(分担), 「セミナー」(分担), 「課題研究」

(2) 大学院教育(文学研究科・理学研究科)

「博物館資料論特論」, 「考古学研究実習Ⅰ」, 「考古学研究実習Ⅱ」, 「地殻力学特論Ⅱ」,

「群集進化学特論」, 「群集進化学特論」(分担), 「鈹物成因論特論」(分担), 「鈹物学特選講義Ⅱ」, 「セミナー」(分担), 「地圏進化学・環境動態論特別セミナー」(分担), 「課題研究」, 「地圏進化学特別研究」

(3) 短期留学生受入プログラム

Evolution of the West Pacific Island Arcs and Their Environment

4-2 学部大学院生指導実績

- a. 標本館の展示水槽で卒業研究の飼育実験を実施
- b. デジタル標本データベースシステム「e-Specimen」を利用した修士研究および博士研究の実施
- c. 研究室セミナー・発表会を標本館で実施
- d. 文学部考古学教室研究指導
大学院文学研究科考古学研究室の院生, 学生を山形県船形町高倉山遺跡で旧石器調査の指導

5. 研究活動

5-1. 研究支援活動

- (1) 資料標本の研究教育利用
 - a. 古生物・地球科学標本: 14 件
 - b. 考古学資料: 1 件
 - c. 理化学機器資料: 2 件
 - d. 人類学標本: 3 件
 - e. 生物学標本: 2 件
 - f. 金属学資料: 1 件計 23 件

5-2. 研究活動

- (1) 2011 年度大学博物館等協議会・第 6 回博物科学会
博物科学会は, 学術資料標本にもとづく科学を推進している研究者相互の情報交換, 研究成果発表および社会地域貢献の方法論等の情報交換の場として, 2011 年 6 月 23 日と 22 日に名古屋大学で開催された. 本博物館からは, 佐々木理准教授が『宮城県南三陸町「歌津魚竜館」津波災害レスキュー報告』, ポスター発表は『東日本大震災による東北大学附属図書館・史料館の被災と復旧』を発表した.

5-3. 学術出版物の発行

総合学術博物館研究紀要 (Bulletin of the Tohoku University Museum) No. 11 を 2012 年 3 月

に発行した。掲載論文は以下の通りである。

Studies of the Late Palaeolithic Culture in the Mogami River Basin vol. 2 The Kamino-A site
Report of the third term excavation
AMS Radiocarbon Dating Report
Carbonized woods unearthed from the Kamino-A site
Reexamination of the Soni type pottery; Typological features and radiocarbon dating of pot-sherds
from Ito Nobuo Collection.

史料館

1. 組織・運営

1-1. 組織整備（公文書室等の設置）

学術資源研究公開センター規程の改正（平成23年6月1日改正，4月1日より遡及適用）により，史料館に公文書室・記念資料室の2室を新たに設置した。

このうち公文書室は，平成23年4月1日の「公文書等の管理に関する法律」の施行に伴い，同法第二条第3項第二号に定める歴史的に重要な公文書等の保存等をおこなう「国立公文書館等」として，内閣総理大臣指定による指定を受けた（4月1日付）。また「記念資料室」は，同じく「公文書等の管理に関する法律」第二条第5項第三号に定める歴史的資料等の保有施設として内閣総理大臣による指定を受けた（4月1日付）。

1-2. 利用規則等の制定・改正

（1）公文書室利用等要項の制定

上記公文書室の設置にともない，公文書室が管理する特定歴史公文書等の管理（公開）に関する規則として，「東北大学学術資源研究公開センター史料館公文書室利用等要項」を制定した（6月1日付総長裁定，4月1日より適用）。

（2）利用審査基準の制定

上記要項の制定に伴い，特定歴史公文書等の利用審査にかかる基準として「東北大学学術資源研究公開センター史料館公文書室における公文書管理法に基づく利用請求に対する処分に係る審査基準」を制定した（館長決定）

（3）史料館利用規則の改正

上記公文書室利用等要項の制定に伴い，従来の「東北大学学術資源研究公開センター史料館利用規則」について，同要項との調整の必要が生じたため改正をおこなった。

1-3. 関係委員会の開催

（1）学術資源研究公開センター運営専門委員会史料館部会

以下の3回にわたり同部会を開催した。

①第1回（平成23年8月1日（月））

- 場 所 附属図書館1号館2階会議室
- 出席者 佐藤委員長（館長） 柳澤（図・副館長），柳原（文），加藤（教），
小林（金研），平川（東北ア），羽田（高等教育），永田（史料館），
大原（史料館）の各委員
- 欠席者 曾根原（史料館）
- 陪席者 徳竹 剛（公文書室・教育研究支援者），附属図書館総務課庶務係長
- 議 題 （1）東日本大震災における被災状況と対応について
（2）平成23年度事業計画と実施状況について
（3）平成22年度決算および平成23年度予算案について

<議事録>

議長から、議事に先立ち、平成23年3月11日に発生した東日本大震災の被害状況報告が議題の（1）として報告されることと、平成23年4月1日付けで国立館公文書館からの指定を受け、新たに公文書室が設けられ、これにより史料館は公文書室・記念資料室の2室体制で運営されていくことの報告があり、それに伴うスタッフの業務体制の紹介があった。また大原助教は8月から附属図書館で東北大学所蔵学術資料の調査研究を中心に担当することになった旨の報告があった。

議 事

○前回、平成23年2月23日（水）開催の議事要録（案）の確認

○議題

（1）東日本大震災における被災状況と対応について

東日本大震災における被災状況と対応について、永田委員から資料2に基づき報告があった後、委員から次のような発言があった。

平川委員：東北歴史資料館との連携について、東北芸術工科大学、奈良国立文化財研修所に送り、資料のフリーズドライ措置を行い、史料館でも使用されている冷凍庫も購入し、歴史資料の保存を行っている。もし不足が生じる場合は協力いただきたい。

議長：史料館の災害復旧に追われていることが多いが、地域の支援についても、努力していきたい。

平川委員：史料館でも震災アーカイブに着手するということが、どのように進めるのか。大学全体としてこれまであった防災科学研究拠点が災害科学国際研究拠点としてさらに拡大して、研究所化していくということであるが、そこで東日本大震災アーカイブについても、積極的に取り組んでいこうとする動きがあるので、それに関連づけていただけるとよいのではないか。

柳原委員：2階の雨漏りの状況はどうか。

永田委員：ブルーシートを再度張り直してから、幾分収まっている状況であるが、大雨が降ると、ところどころ雨漏りが発生している状況である。

柳原委員：ブルーシートでの応急処置のままでは、資料の保存環境として、不安が

あるため慎重に対応して欲しい。

(2) 平成23年度事業計画と実施状況について

平成23年度事業計画と実施状況について、永田委員から資料2に基づき報告があった後、次のような質疑応答があった。

柳澤委員：VI. 教育・研究活動の(1)全学教育科目「東北大学のひとびと」はどのセメスターの開講になるか。

永田委員：カレントトピックスという位置づけになり、2セメスターの5校時目になる。

柳澤委員：全学教育科目において、本学の偉大な先輩たちの足跡を説くことは、学生たちにとっては興味深いことであり、非常に良い刺激になるので、良いことである。

議長：こういったテーマは学生の興味を引き、さまざまな展開が期待できるので有意義なことである。

(3) 平成22年度決算および平成23年度予算案について

平成22年度決算および平成23年度予算案については、永田委員から資料4-1、4-2に基づき報告があり、議長から年度末に発生した東日本大震災の影響により、執行できなかった予算があったため新年度に繰り越すこととなったこと、本年度の予算についても遅れているため昨年度の予算を元にした仮予算として示していることの補足説明があった後、次のような質疑応答があった。

柳澤委員：史料館では金額的にはどのくらいの被害があったのか。

永田委員：施設の被害が中心であり、現在、見積もりをとっているところである。

柳澤委員：有効な復旧のためには、使用先制限の少ない、裁量の大きい予算のような、流動性のある予算措置が望まれると思う。

以上

②第2回（平成24年2月15日（木））

場 所 附属図書館1号館2階会議室

出席者 佐藤 議長（館長），柳澤（図・副館長），柳原（文），平川（東北ア），永田（史料館），曾根原（史料館），大原（史料館）の各委員

欠席者 羽田（高等教育）委員

陪席者 加藤教育研究支援者（史料館），菊地附属図書館総務課庶務係長

議題 (1) 史料館長候補者推薦委員会の設置について

(2) その他（史料館の改修について）

資料 1：学術資源研究公開センター規程（資料1）

2：史料館長候補者選考に関する申し合わせ（資料2）

3：史料館部会名簿（資料3）

<議事録>

○ 前回：平成23年8月1日（月）開催の議事要録（案）の確認

これについて、大原委員から、冒頭の議長からの報告事項中4行目以降の史料館ス

タッフの担当業務の変更について、重要な事項であるため、具体的な内容を表現して欲しい旨の要望があった。これについて、議長から申し出は了承することとし、修正については当方に一任して欲しい旨の発言があった。

○ 議 題

(1) 史料館長候補者推薦委員会の設置について

議長から、佐藤伸宏 現史料館長の任期満了に伴う次期史料館長候補者推薦の手順等に関して、資料 1, 2 に基づき説明があった。説明にあたって、資料 2 に記載はないが、これまでの慣例により、史料館教員は推薦委員に含まれない旨の付言があり、その後、委員の選出について諮り、佐藤、柳澤、柳原、平川・羽田の 5 名を史料館長候補者推薦委員に選出することとし、了承された。

さらに、議長から今後の進め方として、史料館長候補者推薦委員会で候補者が決定され、その決定を受け、後日開催される第 3 回史料館部会です承された後、3 月 8 日(木)の学術資源研究公開センター専門員会に推薦し承認を得る旨の説明があった。

(2) その他

(史料館の改修について)

史料館の改修について、永田委員から次のような報告があった。

- ・従前から耐震補強の工事を予定していたが、昨年の東日本大震災により屋根が壊れ、これらの修繕も改修に加わった。
- ・改修計画として、平成 23 年度の第 3 次補正予算に計上されることとなり、予算確保されることとなった。
- ・ただし、着工は、青葉山地区など被害の程度が大きい地区が優先となるため、史料館の改修は平成 24 年度後半になる見通しである。
- ・工事に伴い、休館・一部展示室の一時閉鎖の必要が生じてくる。

③第 3 回(平成 24 年 3 月 1 日(木))

場 所 附属図書館 1 号館 2 階会議室

出席者 佐藤 議長(館長)、柳澤(図・副館長)、柳原(文)、平川(東北ア)、羽田(高等教育)、永田(史料館)、曾根原(史料館)、大原(史料館)の各委員

陪席者 菊地附属図書館総務課庶務係長

- 議題 (1) 史料館長候補者の推薦について
(2) 史料館の改修計画について
(3) 平成 23 年度事業報告および予算執行状況
(4) 平成 24 年度事業計画について
(5) 協力研究員について

配付資料

- 1 : 平成 23 年度第 2 回史料館部会議事要録
- 2 : 史料館長候補者推薦調書

- 3：史料館の改修工事について
- 4-1：史料館平成23年度事業報告
- 4-2：史料館平成23年度予算執行状況
- 5：史料館平成24年度事業計画(案)
- 6：平成24年度協力研究員名簿

<議事内容>

議 事

- (1) 前回：平成24年2月15日(水)開催の議事要録(案)の確認
原案通り了承された。
- (2) 史料館長候補者の推薦について
次期史料館長候補者の選出について、議長から資料2に基づき史料館長候補者推薦委員会での検討結果について説明があり、文学研究科日本思想史専攻分野の佐藤 弘夫教授を推薦する旨の報告があった後、3月8日(木)の学術資源研究公開センター専門委員会に上申し、了承を求める旨の発言があった。
- (3) 史料館の改修計画について(資料3)
史料館の改修計画について、永田委員から資料3に基づき報告があり、種々意見交換の後、了承された。
- (4) 平成23年度事業報告および予算執行状況
平成23年度事業報告および予算執行状況について、永田委員からそれぞれ資料4-1、4-2に基づき報告があり、次のような意見交換の後、了承された。
羽田委員：震災による備品の破損等への予算措置がなされたが、史料館には措置がなかったか。
永田委員：特にはなかった。
- (5) 平成24年度事業計画について
平成24年度事業計画について、永田委員から資料5に基づき報告があった後、
羽田委員：業績目録について、PDFなどのデータ化することは可能か
永田委員：編集を省いた形での生のデータをPDF化する予定である。
羽田委員：要望であるが、現在、高等教育開発推進センター資料室に旧教養部時代の資料・写真・看板とセンター創設時の平成16年頃に初代センター長である坂本副学長から預かった段ボール十数箱のセンター関係の個人文書があるがこれらを預かっていただけないか。
また、教育研究のところで職員研修について、高等教育開発推進センターでは大学本部との共催で新任教員FDを行っているが、よりよいものにするために新任教員FDと高等教育開発推進センターでの研修について、全学的にアンケートをとるが史料館に「東北大学の歴史」の講義をお願いできないかということと、講義の内容や研修を受講できなかったひとのために動画化させてもらえないかをお願いしたい。

議長、永田委員：出来る限り協力したい。

羽田委員：学内で利用するときの支払いが校費支払い手続きではなく、立替払いつづきになっているのはなぜか。

永田委員：予算振替が可能かどうかは今後検討したい。

柳原委員：大島正隆に関する展示を来年度も開催するが、史料館の企画展という位置づけになるのか。

永田委員：資料5の事業計画に入れていないが、そのようになる予定である。

議長：日程等も決まっているようなので、事業計画に追加しておくこととしたい。

(6) 協力研究員について

来年度に委嘱する協力研究員について、永田委員から資料6に基づき報告があり、新規委嘱の公文書室教育研究支援者加藤諭氏については、学術資源研究公開センターのスタッフとして科研費獲得や共同研究等をおこなえるよう同人を位置付けることが、センターおよび史料館の活動の充実に有益と判断するためである旨の付言があった。議事の最後に議長から、今年度の委員各位の協力に対して謝辞があった。

(2) 東北大学公文書管理委員会

第1回 日時 平成24年1月19日

場所 本部1号館3階第1会議室

出席者 北村委員長（副学長）、高橋（総務部長）、佐藤（公文書室長）、米本（総務課長）、平川（東北アジア研究センター）、永田（史料館）委員

議題 (1) 公文書管理法施行に伴う文書管理・移管制度改正の経緯
(2) 公文書管理委員会の設置について
(3) 法人文書の管理に係る事項
(4) 特定歴史公文書の管理に係る事項
(5) その他

※議事録は省略

1-4. 学内外からの事業資金獲得状況

(1) 平成23年度全学的基盤経費

学術資源研究公開センター配分経費のうち、史料館企画展・休日開館経費および東北大学デジタルアーカイブズ整備経費として合計1,500千円の配分を受けた。

2. 資料の管理・公開（アーカイブズ事業）

2-1. 資料の受入・整理

(1) 公文書室所管資料（特定歴史公文書・刊行物）の受入・整理・公開

①資料の受入・移管

1) 特定歴史公文書（保存期間満了後公文書室に移管された法人文書）

平成22年度末保存期間満了文書の評価数 計3621ファイル
 平成23年度特定歴史公文書の受入数 計112冊（本部67／部局45）
 平成21年度以前満了文書の追加移管 計15冊
 2）学内刊行物の新規収集 計173点

平成23年度に受け入れた特定歴史公文書（移管元別内訳）

総務／総務課	6	教学／学生支援課	9	教育学研究科	2	情報科学研究科	2
総務／法務課	11	施設／計画課	2	法学研究科	15	生命科学研究所	3
総務／広報課	8	情報／情報基盤課	2	経済学研究科	3	金属材料研究所	5
研協／研究協力課	2	環境安全室	2	理学研究科	2	加齢医学研究所	5
国際交流課	7			医学系研究科	3	多元物質科学研究所	2
教学／学務課	4			薬学研究科	3	サイクロ・R I	1
教学／教務課	7			工学研究科	6	大学病院	3
教学／入試課	5	本部合計	67	農学研究科	3	研究科等合計	60

※数字の単位は冊数／法学研究科移管分には、法文学部関係文書（昭和20年代）を含む

②目録の整備・公表

特定歴史公文書の目録公開 計1061冊

平成23年度に公開を開始した特定歴史公文書（移管元別内訳）※数字の単位は冊数

資料群名	冊数	主な内容、備考	利用制限
旧教養部文書(国際文化研究科)	109	運営委員会・教授会議事録, 紛争関係	制限あり
北條総長引継書類(総務部人事課)	7	第2代総長交代時の引継書	全部公開
卒業式・記念式典等音声記録(広報課)	27	電子化したかたちで公開	全部公開
旧法文学部・法学部文書(法学研究科)	13	特設研究科関係等, 戦後期のもの	制限あり
報国隊関係等(総務課ほか)	7	東北帝国大学報国隊関係等, 戦中期	全部公開
大学問題関係資料(総務課)	29	昭和40年代大学紛争関係	全部公開
概算要求関係(財務部財務課(主計))	379	創立期以来の予算書・概算要求関係等	全部公開
旧学生部文書(学生課 第2次公開)	109	戦後期の学生課外活動, 学生運動等	制限あり
総務部総務課移管文書	212	官制関係, イールズ事件 ほか	制限あり
金属材料研究所教授会議事録	41		
2010・2011年度移管文書	128	2009～2010年度末保存期間満了文書	制限あり
合計(予定)	1061		

③資料複製・補修等

特定歴史公文書等のマイクロフィルム撮影 16冊(3073コマ)
 1940年代～50年代の未複製公文書のマイクロフィルムを作成
 特定歴史公文書等の電子化 28冊(25537コマ)
 評議会議事録(大正4～昭和38年分)マイクロフィルムの電子複製を作成

(2) 個人・関連団体寄贈資料等（記念資料室所管）の受入・整理

①新規資料の収集・受入

平成 23 年度における受贈資料群 13 件

平成 23 年度に受入れた個人・団体等寄贈資料一覧

資料名・資料群名	備考（旧蔵者）
酒井清一郎氏旧蔵インバネス	法文学部卒業生
古田良一関係資料（海外留学関係資料等）	元法文学部教授（国史学）
村上哲見名誉教授寄贈資料（小川環樹・蘇歩青書幅）	元文学部教授（中国文学）
錦織一男氏寄贈医学部第三内科資料（ビデオ，テープ等）	山形徹一・黒川利雄関係等
大島正隆関係資料（大島智夫氏寄贈）	元法文学部副手（国史学）
大島正隆関係資料（森嘉兵衛氏旧蔵書簡）	
大島正隆書簡写し（柳田国男宛）	
鴨沢律子氏寄贈資料（学生時代写真）	文学部卒業生
東北大学交響楽団関係資料（定期演奏会プログラム等）	
熊谷岱蔵書画（鈴木千賀志旧蔵）	元総長／医学部教授
真島利行日記 ※日本化学会「化学遺産」認定	元理学部教授／阪大総長
新妻弘明教授寄贈資料（環境科学研究科・工学部関係）	平成 23 年度定年退職
科学計測研究所太陽炉関係資料（多元研教授等の寄贈）	
学友会応援団旗（教育学生支援部）	
片平キャンパス北門門標（財務部資産調達管理課）	

②目録の整備・公表

平成 23 年度に目録を公表した資料群 11 件

平成 23 年度公開 個人・関連団体資料一覧

資料群名	数量	内容等
千葉胤成文書（文学部教授）	79 点	原稿，メモ，書簡類
本川弘一関係資料（医学部教授・第 12 代総長）	51 点	学長式辞等原稿，色紙
八木・宇田アンテナ関係資料（ニューマン文書）	1 冊	英軍レーダー手 Newman のノートを旧陸軍で翻訳印刷したもの。
科学計測研究所太陽炉関係資料	114 点	
阿部日本文化研究所資料	19 点	研究所の事業報告等経営事務書類
細谷恒夫文書（「戦後教育資料」収載．法文・教育）	350 点	学制改革，教育学部創設関係
林威文書（理学部教授）	11 点	理学部戦災復興関係など
抜山平一文書（工学部教授）	188 点	電気通信研究所設立・戦時研究関係等
小町谷操三文書（法文学部教授）		著作原稿等
塩釜伊兵衛文書（工専教授）		向山観象所観測記録等
梅沢伊勢三文書（法文学部卒業生）		ノート・原稿等

(3) デジタルアーカイブズの整備（インターネット上での資料情報提供）

①画像データベースの増補

東北大学関係写真データベース 697点（累計 5960点）

②資料検索性データベース・目録の増補

特定歴史公文書 ファイル名 1061, 件名 156

刊行物 記事名 5067

個人・関連団体文書 資料群 5件

③「東北大学の災害体験と復興記録」（東北大学災害対応アーカイブズ）の公開

東北大学防災科学研究拠点のプロジェクト「みちのく震録伝」への協力機関として、当館所蔵資料中の下記の大学における災害対応に関する記録を電子化し、インターネット上で公開している。

史料館データベースの登録・公開状況（2011年度末時点）

	特定歴史公文書		刊行物			個人・団体文書	写真	備考
	ファイル名	件名	誌名	書名	記事名	資料群名		
2010年度末現在	1626	3428	2198	594	—	34	5272	
2011年度新規分	1061	156	—	—	5067	5	688	
累計	2687	3584	2198	594	5067	39	5960	

(4) 定年退職教員関係資料の作成・収集

①業績目録の作成 38名

②肖像写真の作成 33名

※作成した業績目録・肖像写真は、当館において記録として保存公開するとともに、当該教員にも一定数を贈呈した。

※冊子体業績目録の作成・贈呈は平成23年度分をもって終了し、平成24年度以降は電子データによる業績リストの収集・公開をおこなう予定である。

2-2. 資料利用者への対応

(1) 資料利用状況

平成23年度は、東日本大震災による被災のため5月末日まで一般の利用を休止し、6月1日より利用を再開した。利用状況は下記の通りである。

①史料館全体としての利用状況

項目	件数	人数	
利用請求・申請および利用数	372件	119人	
複写・写しの交付	442件	70人	
出版物等掲載申請数	197件	54人	
閲覧室利用者数（のべ人数）	—	210人	22年度 84人
閲覧カード発行件数	—	97人	

②公文書室所管資料（特定歴史公文書・刊行物）の利用状況

項目	件数	人数	
一般利用請求数	179件	45人	閲覧又は写しの交付請求の総数
利用決定数	179件	31人	
全部利用決定数	174件		
一部利用決定数	5件		
全部利用制限数	0件		
閲覧利用数	139件	31人	
写しの交付請求数	122件	25人	
デジタルカメラ撮影	1件	1人	
利用決定に関する異議申し立て件数	0件	0人	
出版物等掲載申請数（一般資料）	0件	0人	
学内部局等の利用	1件	1部局	

③個人情報等の利用状況

項目	件数	人数	
一般利用数	191件	73人	閲覧又は複写申請の総数
閲覧利用数	191件	73人	
複写申請数（一般資料）	63件	15人	
出版物等掲載申請数（一般資料）	14件	8人	

④画像データベース掲載画像の利用状況

項目	件数	人数	
複写申請数（写真データ）	257件	30人	
出版物等掲載申請数（写真データ）	183件	46人	

※件数は、請求書に記載された資料名（資料群名）ごとに1件とカウントしている。

※人数は、1日単位でのべ人数である。

（２）レファレンス対応

平成23年度における主なレファレンス事項

- ・第二高等学校医学部を卒業した祖父の在籍確認および卒業年次等の確認をしたい
- ・ハンス・モーリッシュの出身地及び彼がアレロパシーの提唱者と言えるか
- ・大島正隆の父正満について
- ・蘇歩青および陳建功に関する資料について
- ・父親（ニュージーランド在住）の日本訪問時の写真の撮影場所が東北大学であるか
- ・宮城県沖地震に関する学内委員会の報告書の所在について
- ・カール・レーヴィット関係の書簡と写真について
- ・伊沢富次郎の履歴

- ・女子入学に関する文部省からの照会の利用
- ・真島利行氏の絵はがき及び日記借用について
- ・第二高等学校校歌「天は東北山高く」について
- ・林鶴一・藤原松三郎に関する資料について
- ・史料館の平面図について
- ・中川愛咲教授の退職願と診断書
- ・東北大学進学指導学生会の資料について
- ・臨時理化学研究所の学内規程等について
- ・仙台高等工業旧教員の履歴に関する資料

3. 普及・社会教育事業

3-1. 展示会および関連企画の開催

(1) 常設展示

①「アーカイブズが語る東北大学のなりたち」(6/1～10/2 代替常設展)

東日本大震災に伴う常設展示室被災のため、常設展「歴史のなかの東北大学」再開までの代替常設展示として、企画展示室に於いて「アーカイブズが語る東北大学のなりたち」を開催した。

②「歴史のなかの東北大学」の再開(10月8日～)

東日本大震災に伴う本館施設の被災のため、平成23年3月14日以降展示を休止した。その後展示室の仮復旧工事をおこない、10月8日より公開を再開した(包摂校展示コーナー「もうひとつの源流—東北大学の包摂校—」を除く)

(2) 魯迅記念展示

①「魯迅と東北大学」の整備・公開(7月19日～)

平成22年度総長裁量経費により整備を進めていた「魯迅記念展示室」についても、東日本大震災に伴う施設被災の影響で整備が遅れ、7月19日より一般公開を開始した。

②魯迅記念展示室オープニング行事(9月28日)

同室の開設に伴い、9月28日にオープニングセレモニーを実施した。同時にミニ企画展「学都仙台の留学生たち」(9/5～10/2)を同時に開催した。

(3) 企画展示等

①企画展示 「探してみよう! 東北大学のアーカイブズ」(10/8～11/11)

公文書管理法施行に伴う歴史公文書移管制度への普及啓発を兼ね、大学アーカイブズに関する一般的な理解の拡大を目的に、標記企画展を開催した。また10月7,8日におこなわれた東北大学附置研究所一般公開「片平まつり 2011」の共催企画としても開催した。期間中来場者は1,013名にのぼった。

②「新公開資料速報展」

整理が修了し新たに目録を公開する資料の紹介を兼ね、「新公開資料速報展」を随時実施している。平成23年度は下記の2回の展示を実施した。

- ・相対性原理を広めよう—大正・昭和期の科学者たちの交流（池辺常刀文書）（8/2～31）
- ・ダイナマイトにも負けない学長—本川弘—関係史料（1/17～2/20）

③「コレクション紹介展」

公文書や個人文書としては公開できない、美術資料その他の多様な大学史資料を紹介することを目的とする「コレクション紹介展」を随時実施している。平成23年度は、「シリーズ 学者の肖像」と銘打って下記の2回の展示を実施した。

- ・児島喜久雄画 中村善太郎教授像（7/4～29）
- ・岡田三郎助作 山形仲藝博士寿像（11/18～12/23）

④「星寮のおひなさま」展（2/24～3/14）

毎年ひな祭りの時期にあわせて展示公開している、星寮（旧医学部附属病院看護婦寮）において永年使用されてきた昭和初期のひな人形を今年度も公開した。

（４）館外での展示開催

①企画展 「清風一過—大島正隆の歴史学と民俗学—」（9/27～10/3）

附属図書館エントランスホール／大島正隆文書研究会との共催で開催。にて旧法文学部卒業生副手をつとめ、東北中世史研究に先駆的な足跡を残しつつ夭折した歴史学者・大島正隆の人と学問を展示紹介した。

②川内萩ホール展示ギャラリー常設展「かわうち今昔ものがたり」（11/14～）

同ギャラリーへの常設展示設置に伴い、埋蔵文化財調査室、植物園と共同で展示を企画・実施している

3-2. 展示室の利用状況

（１）利用統計

平成23年度は、東日本大震災による被災のため5月末日まで一般の利用を休止し、6月1日より利用を再開したため、展示室の年間公開日数は215日となった。

史料館展示室への入場者数

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	総計
公開日数	—	—	22	20	20	20	30	22	20	19	21	21	215
入場者数(累計)	—	—	196	294	617	835	1853	2153	2298	2438	2677	3024	4327

※入場者数は、1階企画展示室入口においてカウントした

※企画展示室は6月1日より、魯迅記念展示室は7月19日より、常設展示室は10月2日よりそれぞれ公開を開始した

（２）各種団体等による展示見学への対応（展示解説等）

平成23年度の対応件数 26件

見学団体の内訳

区分	件数	備考
本学卒業生同窓会等	1件	クラス会、寮生OB会など
国際交流団体等	15件	日中友好協会関係、中国からの各種訪日団など

その他一般	10件	各種文化施設・学会等主催行事による見学など
総計	26件	

主な見学団体

宮城県バレーボール協会／长春市訪日団／天津大学

中国地質学会／仙台商工会議所／日中友好協会／大連理工大／同済大学

仙台文学館友の会／一関市大原公民館／芦東山記念館／東北多文化アカデミー

東北工業大学留学生一行／私立栄光学園／浙江大学／フィジカルヘルスフォーラム一行

3-3. 他機関開催の展示会への出陳

国立科学博物館「化学者展ーニッポンの近代化学の夜明け」(9/23～12/11)に
真島利行関係資料(真島利行文書および理学部化学教室寄贈資料)を出陳した

4. 教育・研修・学習支援活動

4-1. 教育・学習活動における史料館の利用

(1) 史料館を活用した授業・講習の実施 4件

2011年度における、当館施設を利用して実施した授業科目は、下記の通りである

全学教育	展開科目(カレントトピックス)	「東北大学のひとびと」
	基礎ゼミ	「歴史をみつける方法」
	基礎ゼミ	「日本近世史入門」
	国際共修ゼミ	「日本の思想と歴史」
学部教育	文学部・文学研究科開講科目	「日本史実習」
留学生対象	東北大学サマープログラム	Time Travel Tohoku University

4-2 全学教育の担当

(1) カレントトピックス科目「東北大学のひとびと」

史料館教員2名と文学研究科、高等教育開発推進センターの教員3名の共同で、全学教育科目(カレントトピックス科目群:第2セメスター)において「東北大学のひとびと」を新たに開講した。

(2) 基礎ゼミ等の担当状況

基礎ゼミ	1件
国際共修ゼミ	2件(第1・第2セメスター各1)
計	3件

4-3. 職員研修の担当

2011年度においては、以下の講義を担当した。

東北大学初任者オリエンテーションにおける講義「東北大学の歴史」 2回

5. 調査・研究活動（各教員の研究業績は巻末の業績一覧参照）

5-1. 学術出版物の発行

（1）『東北大学史料館紀要』第7号の刊行（2012年3月）

掲載内容

調査研究

- ・財団法人の学術助成についての一考察 —創始期の斎藤報恩会による学術研究補助の変遷と東北地方学術振興を中心に—（米澤晋彦・吉葉恭行）
- ・戦時科学技術動員下の東北帝国大学—大久保準三文書を手掛かりとして—（吉葉恭行）
- ・村岡典嗣『日本国民性ノ精神史的研究』執筆の背景（本村昌文）
- ・東北大学史料館所蔵カール・レーヴィット関係資料について（鈴木道男・曾根原理）
- ・1969年における東北大学の学生運動—豊田武収集資料を通じて—（加藤諭）
- ・<試論>書庫の亀裂—古典籍利用・保存についての内省的記述の試み—（大原理恵）

展示記録

- ・魯迅と東北大学—歴史のなかの留学生（永田英明）
- ・探してみよう！ 東北大学のアーカイブズ（永田英明・徳竹剛・加藤諭）
- ・清風一過—大島正隆の歴史学と民俗学（大島正隆文書研究会）

東日本大震災の記録

- ・災害と大学アーカイブズ—東日本大震災における東北大学史料館の対応（永田英明）

資料公開

- ・平成22年度に公開した法人文書／平成22年度に公開した個人文書
- 平成22年度事業年報

5-2. 学会・研究会・研修会等への参加および報告

①全国大学史資料協議会全国研究会（於皇學館大學 10月5～6日）

教員1名が参加し、下記の研究報告をおこなった。

「災害と大学アーカイブズ—東北大学の場合—」（永田英明）

②全国歴史資料保存利用機関連絡協議会大会（於群馬県立文書館等 10月27～29日）

教育研究支援者1名が参加した

③米国東アジア図書館協議会（2012年3月15日）

助教1名が参加し、下記の報告をおこなった。

「2011年3月11日以降の東北大学—図書館と史料館を中心に—」（曾根原理）

5-3. 学会誌・学外メディア等における報告

①国立公文書館機関誌『アーカイブズ』への寄稿

永田英明・徳竹剛「東日本大震災における東北大学史料館の被災状況と対応」

（『アーカイブズ』45号、平成23年10月）

5-4. 研修会等への参加

- ①国立公文書館主催「アーカイブズ研修Ⅰ」(8/29～9/2)への参加
教育研究支援者1名が参加した

5-5. 科学研究費獲得状況

平成 21 年度における館員の科学研究費獲得は合計 4 件となった。内訳は下記の通りである
(研究代表者のみ)。

挑戦的萌芽研究	代表 1
基盤研究 (B)	代表 1
基盤研究 (C)	代表 3
若手研究 (B)	代表 1

6. その他

6-1. 広報・情報公開 (ニュースレター・ホームページ)

(1) 『東北大学史料館だより』

平成 23 年度は下記の 2 回発行した。

15 号 (2011 年 9 月)

巻頭コラム 88 年前の大震災と東北大学／公文書管理法の施行と史料館公文書室の設置
(永田英明)／東日本大震災における史料館の被災状況と復旧について／新しい閲覧室
がオープン！／大学史の書棚から／資料の公開について／おしらせ

16 号 (2012 年 3 月)

巻頭コラム 東北大学の災害復興記録とアーカイブズ／髭の写真－仙台医学専門学校留
学時期の魯迅の写真について (日中友好協会宮城県連事務局長 渡辺 襄)／魯迅記念
展示室のオープニング行事がおこなわれました／企画展を開催しました／資料の公開に
ついて／史料館のうごき／おしらせ

(2) ホームページ

1) 史料館ホームページの改訂

史料館公文書室の設置を契機に、史料館ホームページの全面改訂をおこなった。

2) 魯迅記念展示室サイトの作成・公開

同展示室の開設を契機に、展示内容等を紹介するサイトを作成・公開した。

6-2. 東日本大震災への対応

東日本大震災の発生にともなう活動として、下記の活動をおこなった。

- (1) 災害対応記録の情報提供サイト (「東北大学の災害体験と復興記録」) の開設 (前掲)
- (2) 東日本大震災デジタルアーカイブズ「みちのく震録伝」への協力
- (3) 本学学内における公文書被災状況調査の実施

- (4) 全国大学史資料協議会全国研究会「災害とアーカイヴズ」における報告（前掲）
- (5) 国立公文書館機関誌『アーカイヴズ』における報告（前掲）
- (6) 宮城歴史資料保全ネットワークの活動への協力（レスキュー資料の冷凍保存）

植物園

1. 組織・運営

1-1. 補修・整備工事、庶務報告等

(1) 本園

2011年

- ・ 4月1日中静透園長，事務補佐員2名が着任した。
- ・ 4月7日震度6弱の余震が発生し，園内施設に新たな被害が生じた。
- ・ 4月13日植物園内，本館，ヤナギ館，記念館について詳細な震災被害調査を行った。
- ・ 5月25日～27日に名古屋で開催された植物園協会大会に鈴木教授と園技術職員が参加した。
- ・ 5月26日ヤナギ館裏の土砂崩れ現場の埋蔵文化財調査が行われた。
- ・ 5月31日前日に土砂災害警戒情報および大雨警報の発令があり，臨時閉園措置を行った。本沢で大規模な土砂崩れが発生した。
- ・ 6月1日見晴坂付近のオオタカの繁殖調査が行われ，去年の営巣場所でオオタカが確認された。
- ・ 6月6日井上総長，野家理事による震災被害状況視察が行われた。
- ・ 6月8日仙台市文化財課の佐藤氏が天然記念物被害状況調査のために来園し，土砂崩れの現場を視察した。
- ・ 6月24日大雨警報の発令のため臨時閉園した。
- ・ 7月1日 前日から大雨警報が出ていたため，園路を部分閉鎖して開園した。
- ・ 7月8日～7月10日八甲田山分園で行われた日本植物園協会研究会に中静園長他7名が参加した。
- ・ 7月12日～14日八甲田山分園整備を技術職員2名が行った。
- ・ 7月19日仙台市文化財課が砂防ダム左岸崖の落石現場を視察した。
- ・ 7月26日宮城県および仙台市文化財課が震災および台風被害箇所を視察した。
- ・ 7月28日～29日オープンキャンパスに協力し，高校生の無料入園を実施した。
- ・ 8月3日学術資源研究公開センター運営専門委員会が開催された。
- ・ 8月13日～8月16日にかけてお盆休みのため閉園した。
- ・ 8月19日震度5弱の地震が発生したため，臨時閉園し安全確認を行った。
- ・ 8月28日停電断水のため臨時閉園を行った。
- ・ 9月3日台風接近のため臨時閉園を行った。
- ・ 9月下旬園内枯損木の伐採を行った。
- ・ 9月21日～22日台風15号接近と土砂崩れ発止のため臨時閉園した。
- ・ 9月21日～22日技術職員1名がチェンソー講習会に参加した。
- ・ 9月28日砂防ダム左岸崖の落石除去工事が仙台市文化財課立会いの下で行われた。
- ・ 10月3日～5日技術職員2名が八甲田山分園整備を行った。
- ・ 10月4日台風15号被害の復旧が完了したため，中の坂と本沢道の下流部分の園路を一

般開放した。

- ・10月7日津波で被災した中野小学校のスギ円盤の文化財レスキューを行った。
- ・10月8日にホームカミングデーが開催され、参加者の無料入園を行った。
- ・10月16日市道青葉山-亀岡線沿いの植物園敷地に車両が突っ込み、フェンス、境界標識等が破損した。
- ・10月16日スウェーデン樹木学会一行が来園した。
- ・11月14日～16日、29日～30日ホイールローダーの操作研修を技術職員3名が受講した。
- ・11月16日～17日未公開地域のゴミ拾いと巡視を行った。
- ・12月12日仙台市文化財課が震災復旧に伴う天然記念物の現状変更の内容について視察を行った。
- ・12月15日宮城県および仙台市文化財課が震災復旧に伴う現状変更の内容について視察を行った。
- ・12月31日 本館裏で大量の血痕が見つかり、警察による検分が行われたが、人間の血痕ではなかった。

2012年

- ・1月17日文部科学省担当者が園内の台風15号による被災箇所を視察した。
- ・1月下旬園内の枯損木伐採が行われた。
- ・1月下旬～2月上旬ヤナギ館の改修工事が行われた。
- ・3月8日学術資源研究公開センター運営専門委員会が開催された。
- ・3月15日植物園利用研究報告会が開催された。
- ・3月20日日本園が開園した。

(2) 八甲田山分園

5月26日 開園。

8月3-7日 本園技術職員によって園内の整備が行われた。

9月14-17日 植物園種子交換事業のための種子採集が行われた。

10月25日 井上総長らによる八甲田山分園の視察が行われた。訪問者は以下の通り。

[井上総長，北村総長室長，飯島理事，兵頭副学長，丸山総務課長，村岡研究協力課長，門脇事務長，谷口秘書室長]

10月26日 閉園。

1-2. 植物園部会の開催

2011年度は植物園部会は開催されなかった。

1-3. 学内外からの事業資金獲得状況

(1) 平成23年度全学的基盤経費

学術資源研究公開センターに配分された「学術資源研究公開センター公開事業に関わる経費」のうち、5,300千円の交付を受けた。この経費は、天然記念物「青葉山」中心とする地域を保護管理しながら、一般に公開し、かつ各種社会教育事業を行うため使用された。具体的には、1)「紅葉の賀」企画、2)一般公開に要する各種の維持管理・整備経費など

に使用された。

(2) 学外助成金

- 1) 財団法人自然環境研究センターより 「学術研究の経費」1,463千円 植物園が準コアサイトとして調査に参加しているモニタリングサイト1000の実施費用に用いられる。
- 2) 植物園の震災復興資金として、個人寄付金を4名から計130千円を受領した。また、植物標本復旧の資金として、雑誌「Annals of Botany」から500千円の寄付金を受領した。

1-4. 東日本大震災被害復旧

- ・本園は平成23年3月11日に発生した東日本大震災および5月の台風2号、9月の台風15号により、園内施設や園路に甚大な被害を被った。国の補正予算により、これらの復旧工事が平成24年2月～8月にかけて行われた。
- ・破損したさく葉標本は、ヒマラヤ植物研究会などの外部研究者のボランティアの支援を受け、修復を行った。また補正予算により、破損した標本棚を購入した。
- ・木材プレパラート標本は、森林総合研究所および京大生存圏研究所の人的、金銭的援助により破損したプレパラートの修復を行った。
- ・上記ボランティアの旅費、滞在費として、個人寄付金、雑誌「Annals of Botany」の寄付金を活用した。

1-5. その他

(1) 植物園会議

植物園の運営を協議する会議として、教員・技術職員・事務員で構成される植物園会議を原則として月1回開催している。平成23年度は、11回の会議を開催した。

(2) 植物園で発生した事故災害

2011年度に植物園で発生した事故のうち、重大な案件のみを以下で掲載した。例えば災害では物的被害で金額が大きいもの、事故では人的被害で入院や長期の加療が必要なもの、外部機関（警察、消防）へ通報したのものを選んだ。

2011年4月～2012年3月

- ・ 4月7日深夜に仙台市で平成23年東北地方太平洋沖地震の余震とみられる震度6弱の地震が発生し、本館正面玄関上の屋根外装板の落下・栽培ヤナギ鉢の落下破損・本館事務室付近の天井部材が破損する被害が出た。
- ・ 5月31日台風1102号から変わった温帯低気圧による大雨で本沢奥のメグスリ坂下右岸で土砂崩れが発生し園路を塞いだ。土砂災害の危険があったので臨時閉園した。
- ・ 9月21日台風1115号接近のため臨時閉園した。台風による倒木や土砂崩れのため9月22日も臨時閉園した。園路の仮復旧を行い翌日から通常開園した（通行止め箇所：①-ロックガーデン、⑬-⑭、⑯-⑰、⑩-⑰、②-⑰、望洋台東屋-③）。
- ・ 10月16日市道青葉山-亀岡線の植物園敷地境界で車両事故が発生した。フェンス3ス

- ン、境界柱1本、縁石と樹木の擦過傷の被害を受けた。事故当事者の補償により破損した設備は補修し、樹木の傷は自前で殺菌剤を塗布して処置した。
- ・ 12月31日植物園本館裏の窓ガラスや建物周辺3箇所で血痕が発見されたので理学部警務員室、中静植物園園長、理学部施設管理係へ連絡し中央警察署に通報した。捜査の結果、平成24年1月6日に中央署より人の血液ではないと連絡があった。

2. 収蔵・展示事業

2-1. 資料標本等収蔵関連事業

東北大学植物標本室(TUS)の2011年度における活動は以下の通りである。

(1) スタッフ

主任：鈴木三男。キュレーター：米倉浩司(八甲田山分園)、大橋広好(名誉教授)、根本智行(石巻専修大学)、黒沢高秀(福島大学)

(2) 来訪者

2011年度に植物分類・地理学、生態学、薬学などの研究のため本標本室に来訪し、利用した外来研究者はのべ282名(上記キュレーターは含まない)あった。また、植物園スタッフを除く学内研究者は延べ27名あった。なお、上記外来研究者の中には、2011年3月11日の東日本大震災によって棚から飛び出したり破損したりした標本や文献類の整理のためにボランティアとして参加して下さった宮城植物の会のメンバーが多数含まれており、また2012年1月からは宮城植物の会による宮城県植物誌作成のための標本調査が始まったため、例年に比べて多く計上されている。

(3) 標本の貼付状況

2011年度には新たに11218点の標本が貼付され標本庫に収められた。

(4) 寄贈標本

2011年度は以下の機関および個人より標本の寄贈を受けた。

- ・ 独立行政法人森林総合研究所：日本(熊本県南部、東京都西部および山梨県東部)産木本植物の材鑑標本とその証拠標本計315点
- ・ 東京大学総合研究博物館(TI)：ヒマラヤ(ネパール・ブータン)産種子植物標本463点
- ・ 上野雄規(仙台市野草園)：東北地方おし葉展および宮城県おしば展出品標本43点
庄子邦光コレクション 327点

また、国立科学博物館(TNS)に、スタッフなどの採集した日本および韓国産標本の重複品180点を寄贈した。

(5) 標本交換

2011年度は以下の国内4ヶ所、国外3ヶ所の研究機関から計1326点の交換標本を受

入れた。

- ・ Harvard University Herbaria (A): 61 点
- ・ Main Botanical Garden, Russian Academy of Sciences, Moscow, Russia (MHA): 162 点
- ・ 大本花明山植物園 (OOM) : 183 点
- ・ 大阪自然史博物館 (OSA): 300 点
- ・ 頌栄短期大学(SHO): 200 点

また、以下の機関に交換標本の発送を行った。

- ・ 福井県越前町立福井総合植物園(FUK): 400 点
- ・ 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園(SAPT): 269 点
- ・ 福島大学生態システム工学科(FKSE): 270 点
- ・ 京都大学総合博物館(KYO): 330 点
- ・ 頌栄短期大学(SHO): 253 点
- ・ 徳島県立博物館(TKPM): 343 点

(6) 標本貸し出し

2011 年度は以下の 2 機関に標本の貸し出しを行った。

韓国：ソウル大学校樹木園(SNUA)へ：日本産(1点のみアメリカ産) バラ科ナナカマド属植物 55 点，セリ科ヤマゼリ属植物 55 点，計 110 点

千葉県立博物館分館海の博物館へ：タマアジサイ標本 105 点

2-2. 展示関連事業

(1) 企画展

川内萩ホール展示ギャラリーの常設展設置に際し、川内地区の自然を紹介するパネルを分担で担当した。

3. 教育・教育支援・普及教育活動

3-1. 入館者統計等

3-1-1. 本園

植物園では、通常 3 月の春分の日から 11 月 30 日にかけて本館の展示室および天然記念物「青葉山」を一般公開しているが、2011 年度は東日本大震災（3.11）の被害により、開園日を 5 月 10 日からとし、園路も一部限定で 11 月 30 日まで公開した。

この間、5/31・6/24・9/3・9/21～22 台風・大雨等による臨時閉園、8/13～16 夏季休園、8/28・9/19 設備点検による臨時休園、オープンキャンパス 7/27～28・ホームカミングデー10/8 入園料一部無料、11/3（紅葉の賀）無料開放とした（5/4 植物園の日は中止）。

2011 年度の入園者数は下表の通りである。

2011 年度植物園一般入園者数

有 料 入 園 者				無 料 入 園 者					合計
一般	団体	年間パスポート	小計	本学教職員学生	幼児	パスポート	その他	小計	
3,704	220	76	4,000	958	138	791	1,123	3,010	7,010

備考：無料入園者の「パスポート」は、植物園発行の「年間パスポート」、仙台市教育委員会発行の「どこでもパスポート」、および校長より正式な依頼のあった「自主研修」による入場者を含む。

また、後述の学内、学外の研究、教育などの利用を目的とした利用者を集計すると下表のようになる。

2011 年度植物園利用者数

研究・教育・調査・資料調 等		一般入園者	合計
学内利用者	学外利用者		
958	639	5,413	7,010

3-1-2. 八甲田山分園

2011 年度は、5 月 26 日に開園し、10 月 26 日に閉園した。この間、園内を無料で一般公開し、多数の入園者が訪れた。入園者の統計は無料入園でゲート等がないためにとることができない。

また、後述する大学などの実習により以下のような研究者の利用があった。

2011 年の利用研究者（のべ宿泊数）

実習(基礎ゼミも含む)教官: 51 名(うち東北大学 25, 以下 () 内は同じ) 実習 TA: 40 名 (12)
 実習院生: 0 名 (0) 実習, 基礎ゼミ学生: 246 名 (122) 研究教官・PD: 56 名 (45), 研究院生: 131 (131), 研究学生: 0 名(0), 研究補助院生: 74 名 (61), 研究補助学生: 9 名(2), 技官他: 8 名 (8). その他: 24 名 (21) 計 639 名 (427)

3-2. 学内教育との連携

3-2-1. 本園

植物園は、植物園を舞台にしたフィールド調査、研究試料や研究情報の提供、講義・実習の場として、学内の研究者、学生に広く利用されている。2011 年度においては、以下のような植物園の利用があった。

2011 年度学内利用者数

研究・調査・資料調 等			講義・実習	合計
教員	大学院生	学生	学生 (延べ)	
7	7	32	2,077	2,123

2011 年度に植物園で実施された講義，実習の科目名

科 目 名	人 数	備 考
地学専攻 基礎ゼミ	224	16名×14回
生物学科 遺伝学	700	50名×14回
生物学科 植物形態学	700	50名×14回
経済学部 講義	15	1回
全学教育 国際共修ゼミ	18	1回
教養教育院 基礎ゼミ	26	15名×1回，11名×1回
全学教育 基礎ゼミ	15	1回
国文学 集中講義	30	1回
科学者の卵養成講座	89	1回
心理学研究室卒論中間発表	40	1回
心理学研究室茶話会講演	40	1回
心理学研究室卒論・修論発表会	70	1回
地学専攻環境動態論講座	20	1回
植物構造機能進化学講座セミナー	90	10名×7回，20名×1回
計	2,077	

3-2-2. 八甲田山分園

2011 年度は以下の学内の実習において八甲田山分園の利用があった。園内および八甲田山系の案内など実習支援を行った。

- ・東北大学古植生学実習 7/25～7/28（うち八甲田での活動は 7/26～7/28）鈴木三男教授，大山幹成助教，伊藤由美子（青森県埋蔵文化財センター）。2年次学生 10名
- ・東北大学植物生態学実習 7/30～8/3 中静透教授，酒井聡樹准教授。3年次学生 24名
- ・基礎ゼミ「インセクトフィールドサイエンス」8/3-8/6 遅沢壮一講師(理学部地質学教室) 1年次学生 2名

3-3. 学外機関の利用

3-3-1. 本園

植物園は，植物園を舞台にしたフィールド調査，研究試料や研究情報の提供，講義・実習の場として，学外の研究者，学生に利用されている。

2011 年度学外利用者数

外来研究者	植物園関係者	計	その他	合計
14	35	49	20	69

【参考】：外来研究者・植物園関係者・その他の所属機関等

区 分	所 属 機 関 等
外 来 研 究 者	北海道大学，東北工業大学，山形大学，石巻専修大学，東京都立神代高等学校
植 物 園 関 係 者	樹木学会（スウェーデン）
そ の 他	自然薬食微生物研究所（NMI），和光純薬工業株式会社，アジア航測，川崎地質，環境保全センター，仙台市博物館，仙台市文化財課，総合環境計画，応用地質

また植物園では，県内，県外の小中高等学校の授業，および各種団体の研修などの協力依頼に対し，園内および展示施設の解説を適宜行っている。（遠足は除く）

利用区分	利 用 回 数	利 用 人 数	備 考
オープンキャンパス	2	43	高校生
小学校	2	51	県内 2
中学校	2	31	県内 2
高等学校・専門学校	3	50	県内 3
その他	7	201	ヤンググリーンスクール，日本薬用植物友の会，森林インストラクター協会，荒町シルバーセンター，東大崎婦人会，尚綱学院大学（市民講座），生涯学習施設「里仁館」
計	16	376	

（内訳）小学校：仙台市立松陵西小学校 3 年 49 名，仙台市立木町通小学校 6 年 2 名

中学校：美里町立南郷中学校 2 年 13 名，名取市みどり台中学校 1 年 18 名

高等学校・専門学校：東北文化学園こども未来科 16 名・仙台コミュニケーションアート専門学校 18 名，仙台幼児保育専門学校 16 名

その他：ヤンググリーンスクール 36 名，日本薬用植物友の会 20 名，森林インストラクター協会 9 名，荒町シルバーセンター 12 名，東大崎婦人会 30 名，尚綱学院大学（市民大学講座）49 名，生涯学習施設「里人館」45 名

3-3-2. 八甲田山分園

（1）他大学の実習

2011 年度は以下の他大学の実習において八甲田山分園の利用があった。園内および八甲

田山系の案内・解説など実習支援を行った。

東京情報大学総合情報学部実習 8/1～8/5. 原慶太郎教授, 富田瑞樹准教授, S. Kevine 准教授. 学部3年次学生9名, 4年次学生3名.

横浜国立大学環境情報学府実習 8/17～8/21. 持田幸良教授. 学部2年次学生17名.

立正大学地球環境学部実習 9/7～9/10. 米林伸准教授. 学部3年次学生5名.

(2) 観察会・研修会

2011年度は以下の勉強会が行われた。

日本植物園協会植物園長会議および勉強会 7/8～7/10. 植物園協会加盟の植物園代表8名.

3-4. 報道機関・一般社会人等への対応

(1) 報道機関への対応

- 1) 河北新報 2011年5月11日(夕刊)掲載 開園情報
- 2) 東北放送 ウォッチみやぎ 取材協力(震災及び開花情報) 2011年5月20日放送
- 3) 河北新報 掲載未定 開園状況とるーぷる仙台運行開始確認(電話取材のみ 6/1)
- 4) 仙台市史通信 25号掲載(2011年8月) 写真撮影許可(仙台北二の丸杉並木)
- 5) 家庭画報 掲載依頼 2011年9月号 植物園特集記事の一部
- 6) フジテレビ とくダネ 取材協力(8/10) 放送日未定(日本の亜熱帯化について)
- 7) NHK 科学文化部 取材協力(10/5) 2011年10月8日放送(鈴木教授の取材)
- 8) 仙台放送, 東日本放送, 読売新聞, 河北新報 取材協力 文化財レスキュー(中野小学校所蔵標本・スギ円盤) 2011年10月7日放送, 10月8日掲載
- 9) 河北新報 2011年10月18日(夕刊)掲載 現在の開園状況
- 10) 東北放送 ウォッチみやぎ 取材協力(開園情報) 2012年3月20日放送
- 11) ミヤギテレビ 気象情報 取材協力(開花情報) 2012年3月27日放送
- 12) TBC ラジオ 出演協力 グッドモーニング 2012年3月30日放送

3-5. 講演会・体験活動等

植物園が企画・実施または共催した企画と実施状況は以下の通りである。

(1) 植物園を利用したイベント

1) 植物園・文学研究科共催 「紅葉の賀」

平成23年11月3日 野点, ガイドツアー, 俳句会, 公開講演会 参加者: 402名

(2) 植物園利用研究発表会

本学の教員, 大学院生, 学生, 他大学, 各種研究機関の研究者等が本植物園を利用して行っている各種研究について, その成果を取り纏め, また, 研究成果の普及を計るために, 平成9年度より「植物園利用研究成果報告会」を開催している。今年度は, 平成24年3月15日(木)に開催され, 4件の研究発表が行われた。また, この利用研究発表会の要旨集である利用研究報告書には, さらに4件の要旨掲載があった。

日時：平成24年3月15日（木） 10:00～11:25

場所：東北大学植物園 講義室

プログラム

10:00～10:05 開会の挨拶

10:05～10:25 植物園近隣緑地空間と広瀬川

～三原良吉著「広瀬川の歴史と伝説」の地理教育教材づくりへ向けて～

*松山 正将・菊地 清文・佐伯 吉勝（東北工大・工）

10:25～10:45 東北大学植物園における小河川の水質変化に関する調査

*高橋恵・熊谷秀樹・中山正与（東北工大・工）

10:45～11:05 7年間の温暖化実験における湿原群集構造の変化

*神山千穂(東北大・院・生命)・及川真平（東農大・国際食料情報）・彦坂幸毅（東北大・院・生命）

11:05～11:25 山形大学に導入したAMS システム

*門叶冬樹・加藤和浩・庵下 稔(山大・理, 山大高感度加速器質量分析センター)・YU-AMSグループ

要旨のみ掲載

植物園の昆虫, Part 5

*遅沢壮一（東北大・院・理）・東北大学昆虫研究会

多雪地における幹先端部の力学的強度の樹種間比較

*野村拓真（京大・院・農）・長田典之（京大・フィールド科学教育研究センター）
北山兼弘（京大・院・農）

エゾリンドウにおける花の開閉運動の適応的意義

*富里祐介（東北大・院・生命科学）

湿原の炭素循環の決定要因

*井上 晃（東北大・院・生命科学）

3-6. ニュースレター・ホームページ・出版

(1) 植物園ホームページ

2011年度における植物園ホームページでは、2011年3月11日に発生した東日本大震災による当園の被害と復旧状況の情報について特別サイトを立ち上げ、来園者に随時配信した。とくに、ホームページの更新・管理では、技術職員と共に綿密な連絡をしながら、園内の復旧工事に伴う一部園路の閉鎖や大雨による臨時休園など、来園者への利便性を重視し、リアルタイムで植物園情報の発信を行った。また、この震災に伴って学外から寄せられた寄付金、破損した植物標本の修復作業に携わったボランティアの方々へのお礼を掲載した。さらに、5月以降には部分的な開園となったため、季節の草花の写真、危険生物の情報、イベント開催の告知・報告（例えば、「紅葉の賀」）などをインターネット上で報告し、一般市民や東北大学教職員・学生が親しみを持って来園できるような広報活動を再開した。

以下に 2011 年度に行われたホームページ管理・更新履歴を列挙する。

- 2011 年 4 月 18 日 震災による被害と復旧状況についてのサイトを作成。
- 2011 年 4 月 18 日 東日本大震災による園内の被害と復旧状況を報告。
- 2011 年 4 月 28 日 5 月 10 日からの部分的な開園を告知。
- 2011 年 5 月 13 日 部分開園の周知と公開部分などの情報を掲載。
- 2011 年 5 月 18 日 教員（教授）募集の情報を掲載。
- 2011 年 5 月 24 日 園内の草花の情報を更新。
- 2011 年 5 月 30 日 東北大学植物園カレンダーの更新。
- 2011 年 5 月 30 日 るーぷる仙台の運行状況について報告。
- 2011 年 5 月 30 日 大雨に伴う土砂災害の危険性があるため 5 月 31 日の臨時休園を告知。
- 2011 年 6 月 7 日 園内の草花の情報を更新。
- 2011 年 6 月 12 日 園内の草花の情報を更新。
- 2011 年 6 月 24 日 大雨に伴う土砂災害の危険性があるため 6 月 24 日の臨時休園を告知。
- 2011 年 6 月 28 日 園内の草花の情報を更新。
- 2011 年 7 月 1 日 園内の草花の情報を更新。
- 2011 年 7 月 19 日 8 月 13 日～16 日の断水による臨時休園を告知。
- 2011 年 8 月 1 日 園内の草花の情報を更新。
- 2011 年 9 月 1 日 台風接近に伴う土砂災害の危険性があるため 9 月 3 日の臨時休園を告知。
- 2011 年 9 月 1 日 園内の草花の情報を更新。
- 2011 年 9 月 16 日 園内の草花の情報を更新。
- 2011 年 9 月 18 日 停電・断水による 9 月 19 日の臨時休園を告知。
- 2011 年 9 月 20 日 台風接近に伴う土砂災害の危険性があるため 9 月 21 日の臨時休園を告知。
- 2011 年 9 月 22 日 台風による倒木の影響により、9 月 22 日の臨時休園を告知。
- 2011 年 9 月 23 日 台風による倒木の撤去作業の終了を報告、9 月 23 日からの開園を告知。
- 2011 年 10 月 6 日 園内での山菜・キノコ採取の被害報告と採取禁止の注意喚起を知らせる情報を掲載。
- 2011 年 10 月 6 日 東北大学オープンキャンパス「紅葉の賀」のイベント情報を掲載。
- 2011 年 10 月 20 日 園内の草花の情報を更新。
- 2011 年 11 月 28 日 冬季休園と翌年の開園日を告知。
- 2012 年 3 月 11 日 寄付金（東日本大震災関連）のお礼を掲載。
- 2012 年 3 月 11 日 3 月 20 日の開園の告知と一部園路の閉鎖情報を掲載。園内の草花の情報を更新。

4. 全学・学部・大学院生への指導

4-1. 授与した大学院学位

生命科学研究所博士後期課程（博士）

(論文審査委員：主査)

箱崎真隆：完新世後期針葉樹埋没林の年輪年代学研究

4-2. 担当した講義名

(1) 全学教育

「生命科学概論」 第1 Semester 2 単位

「自然科学総合実験」 第2 Semester 2 単位のうち 2/3 (8 回)

(2) 学部専門教育 (理学部)

「植物形態学」 第3 Semester 2 単位

「生物学へのアプローチ」 第1 Semester 1 単位の 1/12 (1 回)

「進化学実習」 第5 Semester 2 単位のうち, 3 回

「植生史学実習」 第3 Semester (集中) 1 単位

「生物学演習」 第6 Semester 2 単位のうち 1/2 (5 回)

(3) 大学院教育 (生命科学研究科)

「生態システム生命科学特論」 2 単位のうち 1/11 (1 回)

「生態学合同講義」 1 回

5. 研究活動

5-1. 研究支援活動

(1) 本園

1) 研究調査目的での利用研究申請

- ・ ライラック開花観察による春の温暖化予知 門松昌彦 (北海道大学北方生物圏フィールド科学センター)
- ・ 植物園内を流れる小河川および湧水の水質と流量の調査 中山正与 (東北工業大学 工学部)
- ・ 年輪試料を用いた宇宙線強度変動の研究 門叶冬樹 (山形大学理学部)
- ・ アゲハチョウ科の個体群動態 昆野安彦 (東北大学大学院農学系研究科)
- ・ 冬虫夏草属の発生調査 戸田真奈美 (NMI 自然薬食微生物研究所)
- ・ 植物の機能形質データに基づく樹木多様性の損失が森林生態系の機能・サービスに与える影響の解明 黒川絃子 (東北大学大学院生命科学研究科)
- ・ 河川菌類群集の生態把握と河川資源の分解への寄与推定調査 三浦 彩 (東北大学生命科学研究科)
- ・ キカラスウリ塊根からの研究用材料 (レクチン) の精製 秋長 歩 (和光純薬工業株式会社 臨床検査薬研究所)
- ・ 日本産トネリコ属木材の比較解剖学 佐野雄三 (北海道大学大学院農学研究院)
- ・ 樹木材密度の温度勾配依存性の検証 饗庭正寛 (東北大学大学院生命科学研究科)
- ・ 東北大学植物園の空間放射線量の調査 長久保和義 (東北大学大学院工学研究科量子

エネルギー工学専攻)

- ・ センニンソウ属クサボタン節のさく葉標本調査 三池田 修 (東京都立神代高等学校)
- ・ 植物標本の整理・管理方法の見学・閲覧 根本智行 (石巻専修大学)

2) ヤナギ園を利用した調査研究

- ・ 2011年度は無し

3) 栽培植物受け入れ

一般公開用植栽植物の種苗育成のため以下の植物種子を受入れた.

- ・ *Rumex longifolius* DC.
採集地: 青森県青森市
採集日時: 2011年7月23日
採集者: 米倉浩司
- ・ *Glaucidium palmatum* Siebold et Zucc.
採集地: 青森県青森市
採集日時: 2011年10月5日
採集者: 関 正典, 大内 匠.
- ・ *Lithospermum erythrorhizon* Siebold et Zucc.
採集地: 青森県下北郡東通村
採集日時: 2011年10月7日
採集者: 米倉浩司
- ・ *Rosa rugosa* Thunb.
採集地: 青森県上北郡六ヶ所村
採集日時: 2011年10月8日
採集者: 米倉浩司
- ・ *Pyrus ussuriensis* Maxim.
採集地: 青森県十和田市
採集日時: 2011年10月12日
採集者: 米倉浩司

(2) 八甲田山分園

1) 学内研究者

中静透 (教授) 高山生態系の脆弱性解明のための長期モニタリング

黒川 紘子 (助教) 高山生態系の脆弱性解明のための長期モニタリング

神山千穂 (PD): 異なる標高の湿原における植物群集構造と機能型に着目した光をめぐる種間相互作用の時空間的変化

富里 裕介 (M1): 花冠の開閉行動が花の繁殖成功率に与える影響

井上 晃 (M1): 高山における標高の違いによる物質分解と循環速度の差異のモニタリング

2) 学外研究者

久保田正秀((財) 自然環境研究センター) 絶滅危惧植物の種子収集・保存推進

柴田 英昭 (北海道大学北方生物圏フィールド科学センター) 高山における標高の違いに

よる土壌呼吸量と炭素循環の差異究明のための長期モニタリング

野村拓真（京都大学大学院農学研究科）多雪地域に生育する木本植物の成長段階に伴う枝の弾性および脆性の変化に関する比較研究

5-2. 研究活動

（1）植物園及び植物構造機能進化学講座の研究教育活動（教員の業績を除く）

1) 発表論文等

上中央子 2012. 東宮遺跡 24 号畑遺構における花粉分析. ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団, 38, 472-474.

上中央子・川畑和弘 2012. 紐状繊維. 下之郷遺跡の史跡整備に伴う発掘調査報告書, 滋賀県守山市教育委員会, 2, 91-92.

及川輝樹・星野安治・山田和芳・伴雅雄・奥野充 2011. 火山噴火を高時間分解能に記録するもの - 年輪, 年縞, 腐植質土壌 -. 地質学雑誌, 117, 口絵.

Ohyama, M., Hoshino, Y., Hakozaki, M., Yonenobu, H. 2011. Development of Tree-ring Chronologies over the Last Two Millennia in Japan. Proceedings of the Wood Culture and Science Kyoto 2011, 218-219.

箱崎真隆・小川とみ・鈴木三男 2011. 新潟県姫御前遺跡及び竹花遺跡出土木材の樹種. 北陸新幹線関係発掘調査報告書 XIV-姫御前遺跡 II・竹花遺跡 I, 新潟県埋蔵文化財報告書, 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団, 207, 130-142.

箱崎真隆・大山幹成・星野安治・佐々木由香 2011. 新田（1）遺跡出土木材の年輪年代測定と放射性炭素年代測定から推定される遺構間の年代関係. 石江遺跡群発掘調査報告書 IV-石江土地区画整理事業に伴う発掘調査（第2分冊：石江遺跡群分析編2）, 青森市埋蔵文化財報告書, 青森市教育委員会, 108(2), 62-72.

星野安治・及川輝樹 2011. 年輪年代学的手法による火山活動の年代決定. 地質学雑誌, 17, 663-670, doi:10.5575/geosoc.2011.0001.

堀内一穂・千葉拓児・星野安治・大山幹成・田中孝幸 2011. 現生樹木年輪の¹⁴C濃度に見られる樹種間のオフセット：生物季節学的効果の可能性. 第13回AMSシンポジウム報告書, 74-76.

吉田明弘・鈴木三男・金 憲爽・大井信三・中島 礼・工藤雄一郎・安藤寿男・西本豊弘 2011. 茨城県花室川堆積物の花粉・木材化石からみた最終氷期の環境変遷と絶滅種ヒメハリゲヤキの古生態. 植生史研究, 20, 20-46. 星野安治・及川輝樹 2011. 年輪年代学的手法による火山活動の年代決定. 地質学雑誌, 17, 663-670, doi:10.5575/geosoc.2011.0001.

2) 学会等での発表

稲垣哲也・篠塚良嗣・山田和芳・林田明・米延仁志・土川覚・Saarinen, T.・吉田明弘・五反田克也・星野安治・大山幹成・小田寛貴・安田喜憲 2011. 近赤外分光法による湖

- 堆積物の非破壊・簡便評価. 日本地球惑星連合大会 2011 年大会, ポスター発表, 千葉, 2011 年 5 月 25 日.
- 岡田靖・佐藤高史・片岡太郎・小林啓・大山幹成・星野安治・門叶冬樹・加藤和浩・庵下稔 2011. 庭月観音像における自然科学的調査を踏まえた修復実践. 文化財保存修復学会第 33 回大会, 奈良, ポスター発表, 2011 年 6 月 5 日.
- 岡田靖・佐藤高史・片岡太郎・小林啓・大山幹成・星野安治・門叶冬樹・加藤和浩・庵下稔 2011. 庭月観音像の解体修復に伴う自然科学的調査. 日本文化財科学会第 28 回大会, つくば, 口頭発表, 2011 年 6 月 12 日.
- 北川淳子・藤木利之・山田和芳・星野安治・米延仁志・安田喜憲 2011. 湖沼堆積物による人間干渉の歴史復元 - 白巢峠, 田立湿原を例にして. 日本地球惑星連合大会 2011 年大会, 口頭発表, 千葉, 2011 年 5 月 25 日.
- 小林和貴・鈴木三男・能城修一・工藤雄一郎・鯨本眞友美・網谷克彦 鳥浜貝塚遺跡から出土したウルシ材の年代. 日本植生史学会第 26 回大会, 弘前, ポスター発表, 2011 年 11 月 5-6 日.
- 小林和貴・吉田明弘・関正典・米倉浩司・大山幹成・鈴木三男 2011. 東北大学植物園における「モニタリングサイト 1000 (重要生態系監視地域モニタリング推進事業)」の実施状況について, 日本植物園協会第 46 回大会研究会, ポスター発表, 2011 年 5 月 26 日.
- 添田雄二・青野友哉・菅野修広・松田宏介・三谷智広・中村賢太郎・上中央子・渡邊 剛・宮地 鼓・鈴木正章・伊達元成 2011. 小氷期最寒冷期の実態とアイヌ民族との関係 -伊達市カムイタブコブ下遺跡の重要性-, 北海道考古学会, 口頭発表, 2011 年 12 月 17 日.
- 中島 礼・大井信三・安藤寿男・吉田明弘・国府田良樹・工藤雄一郎・西本豊弘 2011. 茨城県南部花室川低地にみられる最終氷期テフラ群. 日本地質学会第 118 年学術大会, 口頭発表, 2011 年 9 月 11 日.
- 箱崎真隆・大山幹成・星野安治・佐々木由香・藤根久・パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ・木村淳一 2011. 新田 (1) 遺跡出土木材の年輪年代測定と放射性炭素測定から推定される遺構間の年代関係. 日本文化財科学会第 28 回大会, つくば, ポスター発表, 2011 年 6 月 11-12 日.
- 箱崎真隆・大山幹成・星野安治・佐々木由香・藤根久・パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ・木村淳一 2011. 新田 (1) 遺跡出土木材の年輪年代測定と放射性炭素測定から推定される遺構間の年代関係, 日本文化財科学会, つくば, ポスター発表, 2011 年 6 月 11-12 日
- 箱崎真隆 2011. 青森のヒバの歴史を年輪に読む, 日本植生史学会, 弘前, 公開シンポジウム「ヒバ, 五千年の歴史と文化」話題 4, 2011 年 11 月 5-6 日.
- 星野安治・山田和芳・篠塚良嗣・米延仁志・大山幹成・北川淳子 2011. 長野県深見池年縞堆積物を用いた樹木年輪年代学的手法の応用. 日本地球惑星連合大会 2011 年大会, 口頭発表, 千葉, 2011 年 5 月 25 日.

- 星野安治・米延仁志・大山幹成・小田寛貴 2011. 日本産樹木を用いた過去約 2000 年間の標準年輪曲線ネットワーク構築. 日本第四紀学会 2011 年大会, 鳴門, 口頭発表, 2011 年 8 月 27 日 (口頭発表賞 (若手部門) 受賞).
- 山田和芳・原口 強・瀬戸浩二・岡崎裕子・中島広海・永島 郁・秋満 睦・林田 明・中野遼馬・齋藤めぐみ・五反田克也・北川淳子・吉田明弘・米延仁志 2012. 小川原湖における東北地方太平洋沖地震に関連する津波堆積物のモダンアナログ. 汽水域研究会, 口頭発表, 2012 年 1 月 8 日.
- 吉田明弘・木村裕子・守田益宗・竹内貞子・篠塚良嗣・山田和芳・五反田克也・米延仁志・安田喜憲 2011. 青森県小川原湖の花粉組成による完新世の植生変遷と定量的な古気候の復元. 2011 年日本地球惑星科学連合大会, 口頭発表, 2011 年 5 月 25 日.
- 吉田明弘 2011. 最終氷期以降の自然環境と八甲田山の植生～海・風・土が生み出した自然～. 社団法人日本植物園協会主催「平成 23 年度第 2 回植物研究会」. 2011 年 7 月 9 日【招待講演】.
- 吉田明弘 2011. 完新世の東北日本の古気候データからみた東アジアモンスーンの活動性と太陽活動, 偏西風の蛇行性. 独立行政法人電力中央研究所主催「地球温暖化の環境考古学・歴史学に関する文献レビュー／共同研究会」第 2 回研究会, 2011 年 7 月 17 日【招待講演】.
- 吉田明弘・米延仁志・守田益宗・竹内貞子・篠塚良嗣・山田和芳・五反田克也・安田喜憲 2011. 東北日本の古気候データからみた完新世の東アジアモンスーンの活動性. 日本第四紀学会 2011 年大会, 口頭発表, 2011 年 8 月 26 日.
- 吉田明弘 2012. 東北日本の花粉化石データが示す完新世の気候変動シグナル. 信州大学山岳科学研究所シンポジウム「過去 10,000 年間に日本の山で何が起こったのか? - 完新世の気候変動と山地景観の形成 -」, 2012 年 1 月 28 日【招待講演】.
- 山田和芳・米延仁志・星野安治・大山幹成・小田寛貴・北川淳子・安田喜憲・齋藤めぐみ 2011. 湖沼年縞の年輪年代学的研究の試み - 長野県深見池を例に -. 日本第四紀学会 2011 年大会, 鳴門, ポスター発表, 2011 年 8 月 26-27 日.
- Kitagawa, J., Yamada, K., Ohyama, M., Hoshino, Y., Shinozuka, Y., Yonenobu, H., Yasuda, Y. 2011. Analysis of recent vegetation change for the regeneration of Kiso-hinoki cypress. The 52nd Annual Meeting of the Society for Economic Botany, Oral, St. Louis, U.S.A, 11 July, 2011.
- Ohyama, M., Hoshino, Y., Hakozaki, M., Yonenobu, H. 2011. Development of Tree-ring Chronologies over the Last Two Millennia in Japan. Wood Culture and Science Kyoto 2011, Kyoto, Japan, Poster, 7 August, 2011.
- Sakashita, W., Yokoyama, Y., Miyahara, H., Yonenobu, H., Ohyama, M., Hoshino, Y., Nakatsuka, T. 2011. Causal Link between Solar Variability and Climate Anomalies in East Asia during the Maunder Minimum. American Geophysical Union Fall Meeting 2011, Poster, San Francisco, U.S.A, 9 December, 2011.

3) フィールド調査

- ・5月31日から6月1日にかけて、和歌山県新宮市「浮島の森」にて、大山幹成、箱崎真隆が泥炭地での樹木の生育状況を調査した。
- ・6月10日に、つくば市の森林総合研究所にて、大山幹成、星野安治が、木材試料の年輪年代学調査を行った。
- ・6月16日から2月24日にかけて、茨城県常陸大宮市にて、鈴木三男、小林和貴がウルシ樹皮試料の採取を行った。
- ・6月21日に、青森県青森市埋蔵文化財センターにて、大山幹成、箱崎真隆が年輪解析試料を返却した。
- ・6月22日から29日にかけて、熊本県南部の人吉盆地周辺にて木材採集会が行われ、鈴木三男、大山幹成、米倉浩司、田中孝尚、小林和貴、星野安治が参加した。
- ・6月24日から26日にかけて、国際日本文化研究センターにて、吉田明弘がボーリングコア試料の調査を行った。
- ・6月30日から7月2日にかけて、宮崎県椎葉村の九州大学演習林にて、大山幹成、星野安治が年輪年代学試料のコア採取を行った。
- ・8月4日、青森県埋蔵文化財センターにて、星野安治が、十三盛遺跡出土木質遺物の調査を行った。
- ・8月20日から9月2日にかけて、中国の湖北省、四川省、貴州省の山間地にて、鈴木三男、米倉浩司、小林和貴、大内匠が編組製品及び編組製品素材可能植物の調査を行った。
- ・9月1日から10日にかけて、ペルー、ナスカ周辺にて、大山幹成、星野安治が、植生調査及び木質遺物の調査を行った。
- ・9月4日から9日にかけて、山梨県北都留郡丹波山村周辺にて木材採集会が行われ、田中孝尚、小林和貴が参加した。
- ・9月6日から9日にかけて、青森県小川原湖にて、吉田明弘が水質調査及び表層堆積物の調査を行った。
- ・9月10日から11日にかけて、岩手県八幡平にて、吉田明弘が植生及び表層地質の調査を行った。
- ・9月12日に、鳥取県教育文化財団にて、小林和貴が出土編組製品の調査を行った。
- ・9月14日から16日にかけて、北海道伊達市有珠町字向有珠町カムイタプロプ下遺跡にて上中央子が花粉・種実分析試料の採取を行った。
- ・9月29日から10月2日にかけて、理学部生物学科2年生を対象とした古植生実習が開催され、鈴木三男、大山幹成、小林和貴、星野安治、吉田明弘、箱崎真隆が参加した。
- ・10月7日、仙台市中野栄小学校にて、大山幹成、星野安治、箱崎真隆、津久井孝博、関正典が、被災円板のレスキュー活動を行った。
- ・10月7日から12日にかけて、東京都西部にて木材採集会が行われ、田中孝尚、小林和貴が参加した。
- ・10月31日、青森県埋蔵文化財センターにて、星野安治が、十三盛遺跡出土木質遺物の調

査を行った。

- ・11月24日から26日にかけて、宮崎県椎葉村の九州大学演習林において、大山幹成がツガ年輪試料の採取を行った。また、同所において古民家の年輪調査を実施した。
- ・12月5日から8日にかけて、佐賀県佐賀市教育委員会埋蔵文化財調査室にて、鈴木三男、小林和貴が出土編組製品の調査を行った。
- ・12月13日から14日にかけて、静岡県埋蔵文化財センターにて、鈴木三男、小林和貴が出土木製品の調査を行った。
- ・12月13日から20日にかけて、茨城県土浦市にて、吉田明弘がトレンチ調査を行った。
- ・12月13日から14日にかけて、秋田県大館郷土博物館にて、大山幹成、星野安治が、茂木屋敷跡遺跡出土木質遺物の調査を行った。
- ・1月10日に京都大学生存圏研究所材鑑調査室にて、大山幹成が年輪資料の調査を行った。
- ・1月8日から12日にかけて、鳥取県（鳥取県教育文化事業団、鳥取市歴史博物館、鳥取市教育委員会、鳥取県埋蔵文化財センター、米子市教育委員会）にて、鈴木三男、小林和貴が出土編組製品の調査を行った。
- ・1月25日から1月27日にかけて、東京都護国寺にて、大山幹成、星野安治が、月光殿建築古材の年輪調査を行った。
- ・2月17日から18日にかけて、岩手県立大学にて、吉田明弘がボーリングコア試料の調査を行った。
- ・2月20日から21日にかけて、宮崎県椎葉村において、大山幹成が古民家の年輪調査を実施した。
- ・2月21日から22日にかけて、新潟県（新潟県埋蔵文化財センター、上越市埋蔵文化財センター）にて、鈴木三男、小林和貴が出土編組製品の調査を行った。
- ・3月1日から2日にかけて、静岡県埋蔵文化財センターにて、鈴木三男、大山幹成、小林和貴、星野安治が出土木製品の調査を行った。
- ・3月13日、東京都護国寺にて、星野安治が、建築古材の調査を行った。
- ・3月24日から4月3日にかけて、ベトナムにて吉田明弘が植生および土地利用の調査を行った。

4) 学会等への参加

- ・5月11日から12日にかけて、つくば市で行われた日本文化財科学会第28回大会に、大山幹成、星野安治が参加し、口頭発表・ポスター発表を行った。
- ・5月14日から15日にかけて、東北大学で東北地理学会2011年度春季大会が行われ、吉田明弘が参加した。
- ・5月20日から27日にかけて、幕張メッセ（千葉市）で日本地球惑星科学連合2011年大会が行われ、星野安治、吉田明弘が口頭発表・ポスター発表を行った。
- ・7月9日から7月10日にかけて、青森県で社団法人日本植物園協会主催平成23年度第2回植物研究会が開催され、鈴木三男、大山幹成、米倉浩司、吉田明弘が参加した。吉田

明弘が講演を行った。

- ・7月17日から7月18日にかけて、青森県是川縄文館で独立行政法人電力中央研究所によって開催された「地球温暖化の環境考古学・歴史学に関する文献レビュー／共同研究会」第2回研究会に吉田明弘が講演を行った。
- ・8月6日から9日にかけて、京都大学宇治キャンパスで Wood Culture and Science Kyoto 2011 が行われ、鈴木三男、大山幹成がポスター発表を行った。
- ・8月26日から8月28日にかけて、鳴門教育大学で日本第四紀学会 2011 年大会が行われ、吉田明弘、星野安治、大山幹成が口頭発表・ポスター発表を行った。
- ・10月8日～9日にかけて、仙台市戦災復興記念館で東北地理学会 2011 年度秋季大会が行われ、吉田明弘が参加した。
- ・11月5日から6日にかけて、弘前大学(弘前市)で、日本植生史学会第26回大会が行われ、鈴木三男、大山幹成、小林和貴、星野安治、吉田明弘、箱崎真隆、上中央子が参加し、口頭発表・ポスター発表を行った。鈴木三男、箱崎真隆が公開シンポジウムにて発表を行った。
- ・11月6日から7日にかけて、青森県東通村で日本植生史学会第33回談話会が行われ、鈴木三男、箱崎真隆が参加した。
- ・12月17日から18日にかけて、岩手大学で東北植物学会第1回大会（岩手大会）が開催され、鈴木三男、大山幹成が参加した。
- ・1月28日に信州大学で開催された信州大学山岳科学研究所シンポジウム「過去10,000年間に日本の山で何が起こったのか？－完新世の気候変動と山地景観の形成－」において吉田明弘が講演を行った。

5) 植物園研究室の教育活動

- ・4/10～4/12 に理学部生物学科3年次対象の進化学実習を行い、鈴木三男、大山幹成、米倉浩司の他、TAとして研究室のポストドクターおよび学生が担当した。
- ・9/29～10/2, 10/15 に理学部生物学科2年次対象の古植生学実習を行った。参加学生は5名であった。スタッフは鈴木、大山、米倉の他、応援として伊藤由美子氏(青森県埋蔵文化センター)とTA5名の合計10名であった。9/29～9/30は青森県五所川原市の出来島海岸沿いの露頭にある埋没林堆積層を調査し、現場から植物遺体分析用の試料を採取した。10/1～10/2は八甲田山分園において、採集した資料の分析を行った。10/15は植物園研究室において八甲田山分園でやりきれなかった作業を行い、まとめを行った。

(2) モニタリングサイト 1000

モニタリングサイト 1000 とは、平成 14 年に策定された新・生物多様性国家戦略に基づき環境省生物多様性センターが中心となって行っている調査で、全国 1000 カ所の調査サイトで長期にわたる継続的なモニタリングを行って、自然環境データを収集、蓄積し、そのデータを分析することにより、自然環境の移り変わりを捉え、迅速かつ適切な保全対策

につなげることを目指している。天然記念物「青葉山」は、この調査における森林サイトの準コアサイトとして選定され、平成 17 年度より調査を開始した。昨年度は、前年度に引き続いてリタートラップによる森林生産量の測定、ピットホールトラップによる昆虫の調査が行われた。調査の概要は以下の通りである。

調査内容：リタートラップ調査	12 回
ピットホールトラップ調査	4 回
落葉層調査	1 回

Ⅱ－３．教員の研究教育活動

総合学術博物館

● 柳田 俊雄（教授）

1. 教育活動

- (1) 学内教育への参加
 - ・学部専門教育：「考古学概論」，「考古学各論」，「考古学研究実習Ⅰ」
 - ・大学院教育：「博物館資料論特論」，「考古学研究実習Ⅱ」
 - ・学芸員課程科目：「博物館学Ⅱ（博物館資料論）」
 - ・野外調査指導（考古学研究実習Ⅰ・Ⅱ）：大学院文学研究科考古学研究室の院生，学生を山形県船形町高倉山遺跡で旧石器発掘調査の指導

2. 研究活動

- (1) 研究の概要
 - 1) 日本列島内の前・中期旧石器時代の変遷を解明する研究．大分県早水台遺跡出土の石器群の分析と研究【基盤研究（C）, 『東北大学の旧石器のアジア的位置づけ』】を活用する
 - 2) 東北地方の後期旧石器時代の編年研究をおこなうため，東北地方のローム層中の「暗色帯」と石器群の関係を整理する
 - 3) 最上川流域の後期旧石器時代の研究2で『上ミ野A遺跡 第3次発掘調査報告書』の作成と編集
 - 4) 大学院文学研究科考古学研究室と最上川流域の山形県船形町高倉山遺跡で旧石器遺跡の調査
- (2) 学術論文等
 - 1) 「大分県早水台遺跡出土の下層石器群の概要－第8次調査の整理作業を終えて－」『宮城考古学』第13号 12月 pp31～44（査読無）
 - 2) 「大分県早水台遺跡下層出土石器群と東海地方二遺跡の比較研究」東北大学大学院文学研究科・東北文化研究室『東北文化研究室紀要』通巻第53集3月（査読無）
 - 3) 「最上川流域の後期旧石器時代の研究 2 上ミ野A遺跡 第3次発掘調査報告書」『東北大学総合学術博物館紀要『Bull. Tohoku Univ. Museum』No. 11 3月 共著（分担）伝田惠隆 佐々木智穂 鹿又喜隆 阿子島 香 柳田俊雄（査読有）
- (3) 研究資金受託状況
 - 1) 基盤研究（C）, 『東北大学の旧石器のアジア的位置づけ』

3. 大学運営, 学会運営, 社会的活動等

- 1) 大学博物館等協議会 2011 年度大会・第 6 回博物科学会参加と館長会議に出席
- 2) 「考古学陳列館の被災と復旧」片平祭りポスター作成 (小川助教と共同) 2011 年 9 月
- 3) SMMA 運営委員会・実行委員会出席, 2011 年
- 4) 外国人客員教授の招聘と共同研究—李 鮮 馥 ソウル大学教授 (考古学)
- 5) 東北大学総合学術博物館のすべて「東北考古学の挑戦——挙公開! 東北大学収蔵の考古資料—」展 (2013 年度開催予定) 企画の打ち合わせ
- 6) 学術資源研究公開センター 運営委員会出席
- 7) 東北大学総合学術博物館 部会委員会出席
- 8) その他:
 - a. 旧金属博物館 (あおばインキュベーションスクエア) の建物, その敷地内に設置されている東北大学所有資料の処遇について, 本学理事, 金属材料研究所と交渉する
 - b. 理学部100周年事業の会合に参加した (2011年9月10日)

(1) 学内委員

- 1) 学術資源研究公開センター 博物館館長・運営委員
- 2) 総合学術博物館展示専門委員会: 委員長
- 3) 総合学術博物館運営委員会, 同収蔵専門委員会: 委員
- 4) 東北大学総合学術博物館紀要 編集委員
- 5) 埋蔵文化財調査研究センター運営委員会, 同専門委員会: 委員
- 6) 植物園人事委員会: 委員

(2) 学外委員

- 1) 宮城県教育委員会「東北歴史博物館資料収集・展示委員会」: 委員
- 2) 福島県教育委員会「福島県立博物館収集展示委員」: 委員
- 3) 東北日本旧石器文化を語る会: 世話人代表 (会長)
- 4) 東北史学会 評議委員・理事・編集委員 (2011 年 4~9 月末まで)

(3) 所属学会

日本考古学協会, 東北史学会, 東北日本の旧石器文化を語る会, 宮城県考古学会, 旧石器文化談話会

●西 弘嗣 (教授)

1. 教育活動

(1) 学内教育への参加 (協力教員, 兼務教員を含む)

全学教育科目: 地球環境変遷額特論 (分担)

専門教育科目: 日本の地質誌, 島弧の進化と環境 (分担), 博物館学 II (分担)「セミナー」

(分担), 課題研究

大学院科目: 地球環境科学概論, セミナー(分担), 課題研究

2. 研究活動

(1) 研究概要

1) Completion of integrated stratigraphy between the chemo- and biostratigraphy

The age-model is basic, but very critical data for analyzing geological and paleoenvironmental changes in the past. In particular, the Cretaceous time cannot be calibrated using paleomagnetic data because of long normal chrons spanning from Aptian to Santonian. We established the first integrated age-model of biostratigraphy and chemostratigraphy and radiometric dating in Pacific Ocean. This age-model is correlated with the stratotype sequences in the European/Tethyan region using the carbon isotope curve.

2) Biostratigraphy of western Pacific regions

The geologic age of the continental margin of the western Pacific has been calibrated using macrofossil zones. However, these zones are regional and it is difficult to correlate with a global microfossil zones. We first established the calcareous nannofossil biostratigraphy in the North Fork Cottonwood Creek section of the Budden Canyon Formation (BCF; Hauterivian–Turonian) in northern California, western Pacific regions. We used 16 zones ranging from the BC15 to UC8 Zones. Furthermore, combined biostratigraphic and magnetostratigraphic studies suggest a Hauterivian to mid-Turonian age for the studied sequence. Unconformities probably exist at the base of the Huling Sandstone Member and the upper part of the upper Chickabally Member. The nannofossil assemblages in the North Fork Cottonwood Creek suggests that the study area was under the influence of cold-water conditions during the Barremian to Lower Aptian interval, shifting to tropical/warm-water conditions during the Albian to Turonian interval as a result of the mid-Cretaceous global warming. Although oceanic anoxic events have not yet been reported in the BCF, preliminary total organic carbon, along with nannofossil data, suggest the presence of the global Cenomanian–Turonian boundary oceanic anoxic event 2.

3) Calibration of U-PB dating

We also present new radiometric ages in order to constrain the calibration of the Cretaceous time scale. They have been obtained from volcanic tuffs sampled at Hokkaido (Japan) within the Northwest Pacific marine succession of the Yezo Group, and are compared with ages from the Western Interior and Boreal basins. The calibration data represents good coherency between the U–Pb, $^{40}\text{Ar}/^{39}\text{Ar}$ and K/Ar chronometers when applied simultaneously. We obtain an age of 84.9 ± 0.2 Ma from the base of the Campanian, which provides an upper bound for the Santonian–Campanian limit. The Cenomanian–Turonian limit is dated here at 94.3 ± 0.3 Ma using U–Pb applied to zircons from the North-Pacific basin, and at 94.2 ± 1.0 Ma using $^{40}\text{Ar}/^{39}\text{Ar}$ applied to a Western Interior basin tuff. The Albian–Cenomanian is constrained here between

99.7±0.3 and 99.7±1.3 Ma using, the ID-TIMS and LA-ICPMS U–Pb techniques, respectively. The age of 112.6±1.1 Ma proposed here for the Aptian–

4) Paleoenvironment analysis in OAE2

The Oceanic Anoxic Event 2 (OAE2) at 94 Ma is considered to be one of the largest carbon cycle perturbations in the Earth's history. The global extension of the anoxic conditions associated with OAE2 resulted in the mass accumulation of organic-rich sediments and global extinctions of benthic animals. However, the occurrence of organic material and magnitude of anoxic environments are still unknown about OAE2 in the Pacific Ocean. We represent high-resolution carbon- isotope and degree of pyritization (DOP) data from marine sequences that formed along the continental margins of North America and Asia below the northeastern and northwestern Pacific Ocean. The predominance of low DOP values in these areas revealed that the continental margins of the Pacific Ocean were oxic for most of the OAE2 interval. The anoxity is different between the Atlantic/Tethyan (small oceans) regions and Pacific (large ocean) region.

(2) 学術論文等

(論文)

< ISI 登録誌 >

- 1) Domitsu, H; Uchida, J; Ogane, K; Dobuchi, N; Sato, T; Ikehara, M; Nishi, H; Hasegawa, S; Oda, M (2011). Stratigraphic relationships between the last occurrence of *Neogloboquadrina inglei* and marine isotope stages in the northwest Pacific, D/V Chikyu Expedition 902, Hole C9001C, NEWSLETTERS ON STRATIGRAPHY,44,2,113-122
- 2) Fernando, AGS; Nishi, H; Tanabe, K; Moriya, K; Iba, Y; Kodama, K; Murphy, MA; Okada, H (2011). Calcareous nannofossil biostratigraphic study of forearc basin sediments: Lower to Upper Cretaceous Budden Canyon Formation (Great Valley Group), northern California, USA, ISLAND ARC,20,3,346-370
- 3) Kuroyanagi, A; Kawahata, H; Nishi, H (2011). Seasonal variation in the oxygen isotopic composition of different-sized planktonic foraminifer *Neogloboquadrina pachyderma* (sinistral) in the northwestern North Pacific and implications for reconstruction of the paleoenvironment, PALEOCEANOGRAPHY,26
- 4) Quidelleur, X; Paquette, JL; Fiet, N; Takashima, R; Tiepolo, M; Desmares, D; Nishi, H; Grosheny, D (2011). New U-Pb (ID-TIMS and LA-ICPMS) and $(40)\text{Ar}/(39)\text{Ar}$ geochronological constraints of the Cretaceous geologic time scale calibration from Hokkaido (Japan), CHEMICAL GEOLOGY,286,3-4,72-83

< ISI 登録誌以外の査読付き学術論文 >

- 1) 林 圭一・西 弘嗣・高嶋礼詩・友杉貴茂・川辺文久, 2010. 北海道中央南部に露出する上部白亜系の地質と有孔虫層序. 地質学雑誌 117 巻, 14-34 (2011)

- 2) 小城祐樹・小松俊文・岩本忠剛・高嶋礼詩・高橋 修・西 弘嗣, 2011. 天草上島東部に分布する上部白亜系姫浦層群の層序と詳細な地質年代. 地質学雑誌, 第 117 巻, 第 7 号, 398-416.

(3) 学会講演

<国際会議>

- 1) Koyasu, H., Suzuki, N., Takashima, R. and Nishi, H., Radiolarian faunal changes across the Late Cretaceous in the North Pacific. 13th Conference on Fossil and Recent Radiolarians, Cadiz, Spain, March 29, 2012.

<国内会議>

- 1) 望月 直・中村昌彦・西 弘嗣・川谷哲也・植田剛史, 水中滑空する長頸竜類の静安定性. 第28回エアロ・アクアバイオメカニズム学会定例講演会, 2012年3月23日, 中央大学理工学部.
- 2) 上栗伸一, Moore, T., 大金 薫, 鈴木紀毅, Pálke, H., 西 弘嗣: 前期始新世～前期中新世の低緯度放散虫化石層序 —IODP Leg 320. 2011 年度 MRC 研究集会, 仙台(東北大学), 2012 年 3 月 2 日～3 日.
- 3) 森 達哉・西 弘嗣・高嶋礼詩: 北海道石狩炭田地域に分布する中部-上部始新統幌内層における底生有孔虫の群集変動と古環境. 2011 年度 MRC 研究集会, 仙台(東北大学), 2012 年 3 月 2 日～3 日.
- 4) 黒柳あずみ・川幡穂高・西 弘嗣: 古環境復元における浮遊性有孔虫 *N. pachyderma* (sin.) の酸素同位体比記録の応用と課題. 2011 年度 MRC 研究集会, 仙台(東北大学), 2012 年 3 月 2 日～3 日.
- 5) MATSUZAKI, K., Suzuki, N., Nishi, H., Kawate, Y. and Sakai, T.: Polycystine radiolarian fauna evolution and their related paleoceanographical changes in the Shimokita Peninsula (Tohoku, Japan) through the last 750 ky. 2011 年度 MRC 研究集会, 仙台(東北大学), 2012 年 3 月 2 日～3 日.
- 6) 松井浩紀・西弘嗣: 赤道太平洋域における中新世から後期更新世までの浮遊性有孔虫化石群集 (poster). 2011 年度 MRC 研究集会, 仙台(東北大学), 2012 年 3 月 2 日～3 日.
- 7) 小形 顕・西 弘嗣・高嶋礼詩: 赤道太平洋域における後期始新世から前期中新世の浮遊性有孔虫化石群集 (IODP Exp.320/321) (poster). 2011 年度 MRC 研究集会, 仙台(東北大学), 2012 年 3 月 2 日～3 日.
- 8) Hiroshi Nishi, Reishi Takashima, Toshiro Yamanaka, Kazushige Tanabe, Reconstruction of paleoenvironment in the Pacific Ocean during the mid-Cretaceous Oceanic Anoxic Event 2, 日本地球惑星科学連合大会, 2011 年 5 月
- 9) 西 弘嗣・高嶋礼詩・山中寿朗・林 圭一・望月直・小安浩理, 白亜紀中期 Oceanic Anoxic Event (OAE) 2におけるテーチス海と太平洋の古環境. 日本地質学会第 118 年学術大会, 茨城大学, 2011 年 9 月 9 日～11 日.
- 10) 高嶋礼詩・西 弘嗣・山中寿朗, Quidelleur X., Paquette J. R., Fiet N. 2011, 南フランスと北海道に露出する上部アルビアン～下部セノマニアン統合層序と地質年代. 日本地質学会第 118 年学術大会, 茨城大学, 2011 年 9 月 9 日～11 日.

- 11) 倉沢篤史・土屋正史・豊福高志・北里 洋・西 弘嗣, 浮遊性有孔虫の遺傳的多様性と縁海における遺傳集団の分岐. 日本古生物学会 2011 年年会, 2011 年 7 月 1 日～3 日, 金沢大学(石川県).
- 12) 小安浩理・西 弘嗣・鈴木紀毅・高嶋礼詩, 北太平洋の上部白亜系における放散虫化石群集の変遷. 日本古生物学会 20121 年年会, 2012 年 1 月 20 日～22 日, 群馬県立自然史博物館(群馬県).
- 13) Matuzaki K. R. M., Suzuki, N., Kawate, Y. Nishi, H., Sasaki, T., A last 750 ka Cycladophola davisiana curve east off Shimokita, Japan (JAMSTEC Shakedown Core Hole 9001C) and it's correlativity in the world ocean and paleoceanographical interpretation, focus on the North Pacific Ocean. (poster).日本古生物学会 20121 年年会, 2012 年 1 月 20 日～22 日, 群馬県立自然史博物館(群馬県).
- 14) 安藤卓人・沢田 健・岡野和貴・西 弘嗣・高嶋礼詩, バイオマーカー分析による南東フランス・ボコンティアン堆積盆における中期白亜紀 OAE1b 時の海洋環境変動の復元. 古海洋シンポジウム, 2012 年 1 月 5 日, 千葉.
- 15) 安藤卓人・沢田健・岡野和貴・西弘嗣・高嶋礼詩, ボコンチアン堆積盆における白亜紀海洋無酸素事変 1b パキール層準堆積岩のマルチバイオマーカー分析-古海洋環境変動の復元-. 日本地球惑星科学連合大会, 2011 年 5 月 22 日, 千葉.

(4) 国際研究集会への参加・海外渡航

【共同研究実施状況】

- 1) パリ第三大学 (仏) : 北海道の白亜系凝灰岩の Ar/Ar 年代に関する共同研究.
- 2) ブレーズパスカル大学 (仏) : 北海道の白亜系凝灰岩の U/Pb 年代に関する共同研究.

【外国人研究者受入状況】

- 1) 呂君昌 (中国地質科学院・教授) を学術資源研究公開センター客員教授として受け入れ (2012 年 2 月 17 日～2012 年 3 月 30 日)

(5) シンポジウム・研究集会の開催など

- 1) 古海洋シンポジウムの開催
- 2) Micropaleontology Reference Center 研究集会の開催
- 3) 微化石サマースクールの開催

(6) 研究資金受託状況

- 1) 基盤研究(C) (一般):北太平洋における白亜系標準層序の確立(平成 23 年度 78 万円)
- 2) 基盤研究(B)(海外):白亜紀中期に生じた「メガ・モンスーン事件」の検証(平成 23 年度 507 万円)
- 3) 新学術領域研究(研究領域提案型)(公募研究):南海トラフ地域の標準年代モデルの構築とそれを利用した構造変形史の解明(平成 23 年度 150 万円)
- 4) 基盤研究(S):地球表層システムにおける海洋酸性化と生物大量絶滅(代表 川幡穂高, 平成 23 年度 30 万円, 分担)
- 5) 委託研究:Expedition 320/321 による新生代以降の赤道太平洋の古環境・古機構の変遷の解明(代表 西 弘嗣, 平成 23 年度 3279499 円)
- 6) 平成 23 年度九州大学応用力学研究所共同利用研究, 地球環境力学分野・一般研究

23AO-15, 「流体工学的手法による絶滅遊泳性爬虫類の生体復元」, 研究費: 182000 円, 研究代表者: 西 弘嗣 (東北大学学術資源研究公開センター), 研究協力者: 中村昌彦 (九州大学応用力学研究所), 望月 直 (東北大学大学院理学研究科)

3. 大学運営, 学会運営, 社会的活動等

(1) 学内委員

- 1) 広報戦略会議委員
- 2) 理学部開講 100 周年事業準備委員会委員
- 3) 学術資源研究公開センター運営専門委員会委員
- 4) 総合学術博物館部会委員
- 5) 理学部附属自然史標本館館長

(2) 学外委員

- 1) 日本古生物学会・和雑誌「化石」編集委員
- 2) 日本古生物学会・評議員
- 3) 日本古生物学会・常務委員
- 4) 日本古生物学会・和雑誌「化石」編集委員長 (2005 年～現在)
- 5) 日本古生物学会・洋雑誌「Paleontological Research」編集委員長 (2009 年～現在)
- 6) 日本地質学会代議委員
- 7) Island Arc 編集委員
- 8) 日本地質学会執行理事
- 9) 地球惑星連合財務委員会委員
- 10) 地球惑星連合財務委員会副委員長
- 11) 地球惑星連合財務 WG 委員
- 12) 地球惑星連合理事
- 13) IODP 国内科学検討専門部会地球環境検討専門部会委員
- 14) 統合国際深海掘削計画 (IODP) 科学アドバイズ組織 (SAS) 科学立案パネル (PEP) 委員
- 15) 日本地球掘削科学コンソーシアム (J-DESK) 副会長
- 16) 学術会議関連
- 17) 地球惑星科学委員会 IUGS 分科会 IPA 小委員会 委員
- 18) 日本学術会議連携会員
- 19) Revue de Micropaléontologie 編集委員 (2007 年～現在)

(3) 所属学会

日本地質学会, 日本古生物学会, 日本堆積学会, 東京地学境界, 日本地球惑星科学連
合学会, Geological Society of America, American Geophysical Union

● 佐々木 理 (准教授)

1. 教育活動

(1) 学内教育への参加

学部専門教育：「地球の科学」(分担)、「地学実験」(分担)、「地圏情報解析学」(分担)、「地圏情報解析学実習」(分担)、「野外実習 II」,「セミナー」(分担)、「課題研究」

大学院教育：「群集進化学特論」(分担)、「課題研究」

2. 研究活動

(1) 研究概要

1) デジタル標本システムデータベース「e-Foram Stock」の開発

95年のInternet元年以降,急速なInternet技術の発展と普及により,あらゆる情報環境を急激に変化させつつある.総合学術博物館では,博物館発足以来,博物館における標本研究の新しいコア技術として次世代型標本システムの開発とそれを用いた分類研究法の研究を行ってきた.08年度はデジタル標本のインターネット配信のための実験サイト

「e-Foram Stock」を構築し,実験公開 (<http://webdb2.museum.tohoku.ac.jp/e-foram/index.html>)

を開始した.システム構築では,主にデジタル標本ソフト配信方法,デジタル標本規格及び著作権調整,WWWページデザイン,データベース検索ソフト開発,デジタル標本製作とデジタル標本データベース構築を行った.

2) マイクロフォーカスX線CT断層像の高画質化法の開発

X線CT装置による標本撮影法を確立するために,断層像の画質を空間解像度,コントラスト及びノイズの評価アルゴリズムを検討した.特に,X線検出器のノイズ特性及びS/N比に注目し,ノイズ発生原因を検討し,その低減法を提案した.

3) 浮遊性有孔虫殻形態計測法の開発

現生浮遊性有孔虫の分子生物学的研究は,このグループの少なくない形態的種から複数の遺伝的に異なる隠蔽種を報告している.このことは,従来の形態種の再検討が必要であることを示している.形態種の再検討のため,CT断層像スタックデータに基づく分類形質の3次元形態計測法を開発し,浮遊性有孔虫Globoconella属とNeogloboquadrina属の進化系列を対象として,その有効性の評価を行った.

4) X線CT技術を用いた海洋の炭酸イオン濃度指標の確立

X線CTを用いて浮遊性有孔虫の殻密度,特に,溶解等による密度変化の定量計測法の開発のための基礎的研究を行った.

5) 琥珀中のアリ化石の形態計測法の研究

社会性昆虫であるアリ類は,顕花植物の進化と共に中生代・白亜紀から新生代にかけて適応放散したと考えられている.化石記録にもとづいてアリ類の進化を明らかにするために,琥珀中に保存されているアリ標本の形態学的研究に依存している.その研究精度の向上を目的としてX線CTを用いた形態学的研究法の開発を進めた.

(2) 学術論文等

<ISI 登録誌>

- 1) Jun-ichi Okano, Eisuke Kikuchi, Osamu Sasaki and Shugo Ohi (2011) Geological variation in particle surface-roughness preference in the case-bearing caddisflies. *Behavioral Ecology*, 22(5), 1053-1063.

<その他>

- 1) 佐々木 理 (2011) 宮城県自然史標本レスキュー活動報告. 学術の動向, 16(12), 42-43.
- 2) 佐々木 理 (2011) 「魚竜館被災す. 救援を請う。」—東北大標本救難隊活動報告—. 東北大学総合学術博物館ニュースレター, 39.
- 3) 佐々木 理 (2011) 「レスキューとしての企画展 復興, 南三陸町・歌津魚竜館—世界最古の魚竜のふるさと」. 東北大学総合学術博物館ニュースレター, 41.
- 4) 永広昌之・根本 潤・鹿納晴尚 (2011) 東日本大震災で被災した南三陸地域の自然史標本と歌津魚竜館化石標本レスキュー事業. 復旧復興にかかわる調査・研究事業—報告, 01.

(3) 学会発表・講演等

- 1) 日本学術会議「緊急集会：被災した自然史標本と博物館の復旧・復興にむけて—学術コミュニティは何をすべきか?」: 宮城県自然史標本レスキュー活動報告: 佐々木 理
- 2) 日本地球惑星科学連合 2011 年度連合大会: 炭酸塩溶解指標としての浮遊性有孔虫骨格の X 線 CT トモグラフィ: 木元克典・佐々木 理・鹿納晴尚・岩下智洋・入野智久・多田隆治
- 3) 第 6 回博物科学会: 宮城県南三陸町「歌津魚竜館」津波災害レスキュー報告: 佐々木 理
- 4) 日本地質学会大 118 年学術大会: 高分解能 X 線 CT による浮遊性有孔虫の 3 次元形態解析: 遠藤孝義・佐々木 理・長濱裕幸
- 5) 地質情報展 2011 もと: 宮城県自然史標本レスキュー活動報告: 佐々木 理
- 6) 日本昆虫学会第 71 回大会: X 線 μ -CT 技術によるアリ類標本の三次元形態解析手法の開発: 木下俊一・佐々木 理・溝田浩二・長濱裕幸
- 7) 日本地質学会東北支部会(福島大学;2011年12月17日-18日): 2011, 3.11 大震災で被災した南三陸地域の自然史標本レスキュー事業: 永広昌之・佐々木 理・根本 潤・鹿納晴尚・東北大学総合学術博物館

3. 大学運営, 学会運営, 社会的活動など

(1) 学内委員等

- ・ 広報連絡会議委員
- ・ 情報シナジー機構情報システム利用連絡会議委員
- ・ 学術資源研究公開センター運営専門委員会委員

- ・総合学術博物館部会委員
 - ・青葉山北キャンパス WG 委員
- (2) 学外委員等
- ・仙台市文化財保護審議委員
- (3) 所属学会
- 日本古生物学会, 日本地質学会, 日本進化学会, 日本博物科学会

● 長瀬 敏郎 (准教授)

1. 教育活動

(1) 学内教育への参加

学部専門教育科目: 「地球の科学」(分担), 「造岩鉱物学」(分担), 「鉱物結晶学」, 「地球物質科学概論」(分担), 「セミナー」(分担), 「課題研究」(分担), 「野外調査実習」(分担)

大学院科目: 「鉱物成因論特論」(分担), 「鉱物学特選講義」(分担), 「鉱物学特選講義Ⅱ」(分担),

2. 研究活動

(1) 研究概要

- ・ 黒鉱中の閃亜鉛鉱の生成過程の解明を目指した微細組織の観察
- ・ 準安定相生成に伴う不規則型積層構造の生成過程の解明
- ・ 千葉石の多形に関する研究 (国立科学博物館との共同研究)

(2) 学術論文等

- 1) Evidence for multiple dynamic events and subsequent decompression stage recorded in a shock vein..[Earth and Planetary Science Letters, 307 (3-4), (2011), 361-368] Miyahara M., Ohtani E., Kimura M., Ozawa S., Nagase T., Nishijima M. and Hiraga K. 10.1016/j.epsl.2011.05.010
- 2) Natural dissociation of olivine to (Mg,Fe)SiO₃ perovskite and magnesiowüstite in a shocked Martian meteorite.[Proceedings of the National Academy of Sciences, Early Edition, (2011)] Masaaki Miyahara, Eiji Ohtani, Shin Ozawa, Makoto Kimura, Ahmed El Goresy, Takeshi Sakai, Toshiro Nagase, Kenji Hiraga, Naohisa Hirao, and Yasuo Ohishi 10.1073/pnas.1016921108
- 3) New silica clathrate minerals that are isostructural with natural gas hydrates.[Nature Communications, 2(196), (2011)] Koichi Momma, Takuji Ikeda, Katsumi Nishikubo, Naoki Takahashi, Chibune Honma, Masayuki Takada, Yoshihiro Furukawa, Toshiro Nagase, Yasuhiro Kudoh 10.1038/ncomms1196

- 4) First evidence for natural dissociation of olivine to silicate-perovskite and magnesiowüstite in a shocked Martian meteorite DaG 735.[Meteoritics & Planetary Science,46,(2011), A164-] Miyahara M., Ohtani E., Ozawa S., Kimura M., El Goresy A., Sakai T., Nagase T., Hiraga K., Hirao N., Ohishi Y.

(3) 学会講演等

<国際会議>

- 1) Miyahara M., Ohtani E., Ozawa S., Kimura M., El Goresy A., Sakai T., Nagase T., Hiraga K., Hirao N., Ohishi Y. First evidence for natural dissociation of olivine to silicate-perovskite and magnesiowüstite in a shocked Martian meteorite DaG 735. 74th Annual Meteoritical Society Meeting, 2011.

<国内会議>

- 1) 山田亮一・長瀬敏郎 (2011) 黒鈷鈷床にみられるチムニー構造および初生鈷石組織, 資源地質学会, 東京, 6月22-24日
- 2) 長瀬敏郎・山田亮一 (2011) 黒鈷中の閃亜鉛鈷の透過型電子顕微鏡観察, 東京, 6月22-24日
- 3) 門馬綱一, 長瀬敏郎, 栗林貴弘, 重岡昌子 (2011) 千葉石後の石英仮称の内部組織, 日本鈷物科学会, 水戸, 9月9-11日
- 4) 長瀬敏郎, 栗林貴弘 (2011) 石英結晶からメノウへの結晶粒の細粒化のTEM観察, 日本鈷物科学会, 水戸, 9月9-11日
- 5) 長田直, 栗林貴弘, 長瀬敏郎(2011) 天然スピネル(MgAl₂O₄)のT-O, M-O結合距離と平行温度との関係, 日本鈷物科学会, 水戸, 9月9-11日
- 6) 栗林貴弘, 佐野(古川)亜沙美, 長瀬敏郎, (2011), δ-AlOOHの高圧相転移について, 日本高圧力学会2011年年会, 沖縄, 11月9-11日
- 7) 栗林貴弘, 佐野(古川)亜沙美, 長瀬敏郎, δ-AlOOHの高圧相転移に伴う構造変化, 日本結晶学会2011年年会, 札幌, 11月24-25日
- 8) 宮原正明・大谷栄治・小澤信・木村眞・Ahmed El Goresy・境毅・長瀬敏郎・平賀賢二・平尾直久・大石泰生 (2011) 火星隕石で発見されたオリビンのペロブスカイトとマグネシオブスタイトへの分解. 第52回高圧討論会, 1B05
- 9) 宮原正明・大谷栄治・小澤信・木村眞・Ahmed El Goresy・境毅・長瀬敏郎・平賀賢二・平尾直久・大石泰生 (2011) 火星隕石より発見されたオリビンの高圧分解組織. 2011年日本鈷物科学会年会, R5-06
- 10) 宮原正明・大谷栄治・Ahmed El Goresy・長瀬敏郎・西嶋雅彦 (2011) 小惑星2008 TC₃に由来する隕石ユレイライトと炭素質物質. 2011年日本鈷物科学会年会, S1-O-4
- 11) 宮原正明・金子詳平・大谷栄治・境毅・長瀬敏郎・平尾直久 (2011) 月隕石のα-PbO₂型シリカ及びステイショバイトのTEM観察. 2011年日本鈷物科学会年会, R3-02

- 12) Miyahara, M., Ohtani, E., Kimura, M., Ozawa, S., Nagase, T., Hiraga, K. (2011) Jadeite originating from plagioclase in L6 and H6 chondrites. The 34th Symposium on Antarctic Meteorites.
- 13) Miyahara, M., Ohtani, E., El Goresy, A., Nagase, T., Nishijima, M. (2011) The occurrence of a carbon in ureilite of Almahatta Sitta TC³. Japan Geoscience Union Meeting 2011, MIS002-04.
- 14) Miyahara, M., Ohtani, E., Ozawa, S., Kimura, M., El Goresy, A., Sakai, T., Nagase, T., Hiraga, K., Hirao, N., Ohishi, Y. (2011) Dissociation of olivine to silicate-perovskite and magesiowüstite in a shocked Martian meteorite DaG 735. Japan Geoscience Union Meeting 2011, PPS003-01.

3. 大学運営，学外委員，社会的活動等

(1) 学内委員

学術資源研究公開センター運営専門委員会委員
 学術資源研究公開センター総合学術博物館部会委員
 理学部安全委員会委員

(2) 学外委員

日本鉱物学科学会編集委員会委員
 日本鉱物学科学会評議委員
 日本鉱物学会行事委員
 日本鉱物科学会・会計監査委員
 仙台市天文台・協議会委員
 仙台市科学館・協議会委員
 鉱物科学会・地球惑星科学連合学会選出プログラム委員
 第58回仙台市児童・生徒理科作品展審査委員（小中高との連携）（2011）

(3) 所属学会

日本鉱物科学会，資源地質学会，Mineralogical Society of America

●高嶋 礼詩（准教授）

1. 教育活動

(1) 学内教育への参加（協力教員，兼務教員を含む）

専門教育：地質調査法実習，野外実習 II，地殻岩石学実習 II
 大学院教育：古海洋学特論，地球科学特別講義 I

2. 研究活動

(1) 研究概要

1) 白亜系年代対比に関する研究

北海道・蝦夷層群，南フランス・ブルーマール層において野外調査を実施し，サンプリングを行うと共に，浮遊性有孔虫の抽出，炭素同位体の測定（岡山大学との共同研究），Os 同位体比の測定（英・ダラム大学との共同研究），凝灰岩の $^{40}\text{Ar}/^{39}\text{Ar}$ ，U/Pb の測定（仏・パリ第三大学，ブレーズパスカル大学との共同研究）を行い，詳細な年代対比を行った。

2) 白亜系陸成層の年代対比に関する研究

兵庫県篠山層群（兵庫県立人と自然の博物館，岡山大学との共同研究），手取層群（福井県立恐竜博物館との共同研究）において野外調査を実施し，植物の炭素同位体比の変動と，凝灰岩の U/Pb 年代から白亜紀の恐竜・哺乳類の産出する層準の年代対比を検討した。

3) 白亜紀古環境変動に関する研究

フランスボコンチアン堆積盆地において野外調査を実施し，白亜紀海洋無酸素事変 OAE1b, OAE2 の黒色頁岩を採集すると共に，それらの微化石，化学組成，堆積粒子，堆積相の解析から，当時の古環境の変動を検討した（北海道大学との共同研究）。

4) 白亜紀テクトニクスに関する研究

北海道・蝦夷層群において古地磁気試料を採取し，当時の堆積場の古緯度の検討を行った（大阪府立大学との共同研究）。

5) コケムシの研究

日本の白亜系からコケムシ化石を採集し，その分類学的検討を行った（北海道大学，サンクトペテロブルグ州立大学，熊本大学との共同研究）。

(2) 学術論文等

(論文)

<ISI 登録誌>

- 1) Quidelleur, X., Paquette, J. L., Fiet, N., Takashima, R., Tiepolo, M., Desmares, D., Nishi, H., Grosheny, D. (2011) New U-Pb (ID-TIMS and LA-ICPMS) and $^{40}\text{Ar}/^{39}\text{Ar}$ geochronological constraints of the Cretaceous geologic time scale calibration from Hokkaido (Japan). *Chemical Geology*, 286 72-83.

<ISI 登録誌以外の査読付き学術論文>

- 1) 小城祐樹・小松俊文・岩本忠剛・高嶋礼詩・高橋 修・西 弘嗣 (2011) 天草上島東部に分布する上部白亜系姫浦層群の層序と詳細な地質年代. *地質学雑誌*, 第 117 巻, 第 7 号, 398-416.
- 2) 林 圭一・西 弘嗣・高嶋礼詩・友杉貴茂・川辺文久 (2011) 北海道中央南部に露出する上部白亜系の地質と有孔虫層序. *地質学雑誌*, 第 117 巻, 第 1 号, 14-34.

(3) 学会講演

<国際会議>

- 1) Koyasu, H., Suzuki, N., Takashima, R. and Nishi, H., Radiolarian faunal changes across the Late Cretaceous in the North Pacific. 13th Conference on Fossil and Recent Radiolarians, Cadiz, Spain, March 29, 2012.

<国内会議>

- 1) 小形 颯・西 弘嗣・高嶋礼詩, 赤道太平洋における後期始新世から前期中新世の浮遊性有孔虫化石群集(IODP Exp. 320/321). MRC研究集会, 2012年3月4日, 仙台.
- 2) 松井浩紀・西 弘嗣・高嶋礼詩, 赤道太平洋域における中新世から後期更新世までの浮遊性有孔虫化石群集 (IODP Exp. 320/321) . MRC研究集会, 2012年3月4日, 仙台.
- 3) 森達哉・西 弘嗣・高嶋礼詩, 北海道石狩炭田地域に分布する中部—上部始新統幌内層における底生有孔虫の群集変動と古環境. MRC研究集会, 2012年3月4日, 仙台.
- 4) 小安浩理・西 弘嗣・鈴木紀毅・高嶋礼詩, 北太平洋域の上部白亜系における放散虫化石群集の変遷. 日本古生物学会第161回例会, 2012年1月, 富岡(群馬県).
- 5) 安藤卓人・沢田 健・岡野和貴・西 弘嗣・高嶋礼詩, バイオマーカー分析による南東フランス・ボコンティアン堆積盆における中期白亜紀 OAE1b 時の海洋環境変動の復元. 古海洋シンポジウム, 2012年1月5日, 千葉.
- 6) 高嶋礼詩・西 弘嗣・山中寿朗・Quidelleur X.・Paquette J.L.・Fiet N., 南フランスと北海道に露出する上部アルビアン～下部セノマニアン統合層序と地質年代. 日本地質学会大118回学術大会, 2011年9月9日, 水戸.
- 7) 西 弘嗣・高嶋礼詩・山中寿朗・林 圭一・望月 直・小安浩理, 白亜紀中期 Oceanic Anoxic Event (OAE) 2におけるテーチス海と太平洋の古環境. 日本地質学会大118回学術大会, 2011年9月9日, 水戸.
- 8) 伊藤康人・高嶋礼詩・美藤祐貴・井上貴至, 北海道中央部に分布する中生界の岩石磁気. 日本地質学会大118回学術大会, 2011年9月9日, 水戸.
- 9) 中村英人・沢田 健・高嶋礼詩, 北海道白亜紀中期堆積岩中の陸上植物バイオマーカーを用いた古植生変動復元. 日本地球惑星科学連合大会, 2011年5月22日, 千葉.
- 10) Nishi, H., Takashima, R., Yamanaka, T., Tanabe, K., Hayashi, K., Reconstruction of paleoenvironment in the Pacific Ocean during the mid-Cretaceous Oceanic Anoxic Event 2. 日本地球惑星科学連合大会, 2011年5月22日, 千葉.
- 11) 秋山文孝・山中寿朗・後藤拓也・高嶋礼詩・松原尚志, 白亜系下部篠山層から得られる植物化石の炭素同位体変動を用いた年代対比. 日本地球惑星科学連合大会, 2011年5月22日, 千葉.
- 12) 安藤卓人・沢田 健・岡野和貴・西 弘嗣・高嶋礼詩, ボコンティアン堆積盆における白亜紀海洋無酸素事変1bパキール層準堆積岩のマルチバイオマーカー分析-古海洋環境変動の復元-. 日本地球惑星科学連合大会, 2011年5月22日, 千葉.

(4) 国際研究集会への参加・海外渡航

【学術調査・渡航】

- 1) 2011年10月21～11月2日：南フランスプロバンス地域において白亜紀海洋無酸素事変 OAE1b のサンプリングを実施。

【共同研究実施状況】

- 1) 北海道大学：北海道の白亜紀堆積物およびフランスの白亜紀海洋無酸素事変に関する共同研究および白亜紀・第四紀コケムシ化石の共同研究。
- 2) パリ第三大学（仏）：北海道の白亜系凝灰岩の Ar/Ar 年代に関する共同研究。
- 3) ブレーズパスカル大学（仏）：北海道の白亜系凝灰岩の U/Pb 年代に関する共同研究。
- 4) ダラム大学（英）：北海道の白亜系のオスミウム同位体比に関する研究。
- 5) サンクトペテロブルク州立大学（露）：白亜紀のコケムシ化石の共同研究。
- 6) 岡山大学：日本の白亜系堆積物の炭素同位体変動に関する共同研究。
- 7) 福井県立恐竜博物館：白亜系手取層群の凝灰岩の U/Pb 年代に関する共同研究。
- 8) 兵庫県人と自然の博物館：白亜系篠山層群の統合層序に関する共同研究。
- 9) 熊本大学：白亜系姫浦層群の統合層序およびベトナムのデボン紀・石炭紀境界に関する共同研究。
- 10) 大阪府立大学：北海道の白亜系の古地磁気に関する共同研究。

【外国人研究者受入状況】

- 1) 呂君昌（中国地質科学院・教授）を学術資源研究公開センター客員教授として受け入れ（2012年2月17日～2012年3月30日）
- (5) シンポジウム・研究集会の開催など
- 1) 古海洋シンポジウムの開催（2012年1月5～6日，東京大学大気海洋研究所）
 - 2) Micropaleontology Reference Center 研究集会の開催（2012年3月2～4日，東北大学）
- (6) 研究資金受託状況
- 1) JST 研究シーズ探索プログラム「白亜紀中期の超温暖化による環境・生態系変動解明」，代表，(4,000,000 円)
 - 2) 科学研究費補助金 基盤研究 C 分担 (100,000 円)

3. 大学運営，学会運営，社会的活動等

(1) 学内委員

- 1) 学術資源研究公開センター運営専門委員会委員
- 2) 総合学術博物館部会委員

(2) 学外委員

- 1) 国際陸上科学掘削計画 (ICDP) 国内委員。
- 2) 地質標準化委員会委員

(3) 所属学会

日本地質学会, 日本岩石鉱物鉱床学会, 日本古生物学会, 日本地球惑星科学連合学会,
Geological Society of America, American Geophysical Union

● 佐藤 慎一 (助教)

1. 教育活動

(1) 学内教育への参加 (協力教員)

学部専門教育: 「地球の科学」(分担), 「地学実験」(分担), 「進化古生物学」(分担),
「古生物学実習」(分担), 「地圏環境科学科セミナー」

2. 研究活動

(1) 研究概要

1) 大規模干拓堤防建設に伴う貝類群集の時間的変化の比較

有明海の諫早湾奥部では, 3,550ha の干潟・浅海域を全長 7,050m の潮受け堤防によって閉め切る「潮止め」が, 1997年4月14日に完了した. 本研究では, 長崎大学の研究グループとの共同調査として, 諫早湾調整池における潮止め前後の水質の変化と, それに伴う底生生物相の時間的変化を詳細に追跡した. 一方, 韓国中西部のセマングム (Saemangeum) 干拓予定海域では, 世界最長の 33km の潮受け堤防により, 諫早湾干拓の 10 倍以上 (40,100ha) の干潟・浅海域を閉切る工事が行われている. ここでも, 2000年5月より継続的に定量調査を行い, 貝類群集の時間的変化を明らかにして, それを諫早湾の研究結果と比較することで, 急激な環境変動に伴う底生生物の反応の共通性について考察した (佐藤, 2000; 佐藤ほか, 2001; Sato and Azuma, 2002; 佐藤・金澤, 2004; 金澤ほか, 2005; Sato, 2006; Sato et al., 2007; 佐藤, 2011; 佐藤・東, 2011; 上杉ほか, 2012).

2) 干潟貝類の現生古生態学的研究

考現地質学 (Aktuogeologie) の一分野として, 人為的影響を含む現生生物の変化を対象にした生態学的な実験や観察などを通して化石の古生態を考察する研究方法を「現生古生態学」と定義した (佐藤, 2000). 具体的には, アサリやハマグリなど食用種や, ヒラタヌマコダキガイ・サキグロタマツメタなどの外来種を対象とした分類・分布・生活史・食性に関する研究を, 卒論生や修論生と共同で研究を行っている (Kanazawa and Sato, 2008; Hasegawa and Sato, 2009; Torii et al., 2010; Sato et al., 2011; Chiba and Sato, 2012 など).

3) 黄海-有明海の干潟貝類群集の比較と氷河性海水準変動に伴う時空間的変遷の復元

本研究では, 特に地史的な繋がりが強く底生生物相が酷似する黄海と有明海の干潟貝類群集を対象にして, 両海域における貝類相の定量的な比較と, 氷河性海水準変動に

伴う貝類群集の時間・空間的変遷を復元することを目指している。近年、日本各地において浅海域の開発に伴う環境破壊が社会的な関心事となり、干潟の価値や生物多様性の保全に関する議論が頻繁に行われるようになった。しかし、浅海域における底生生物相の基礎的データはまだ不足し、各海域間での生物多様性の定量的な比較はほとんど行われていない。また、黄海や有明海などの干潟に見られる底生生物相は、主に最終氷期（約1万5千年前）以降の海水準変動に伴って形成されている。したがって、その時間・空間的な形成過程を復元することは、干潟の生物多様性を理解する上で非常に重要な示唆を与えることができる。本研究は、黄海と有明海において干潟貝類群集の定量的データを数多く収集し、それを比較することにより干潟の生物多様性を詳細に把握する。さらに、両海域周辺から産出する貝化石を利用して、これらの干潟貝類群集の時空間における変遷を復元することを目的としている。

4) 東日本大震災前後の底生動物相の変化

2011年3月11日に発生した東日本大震災により、干潟や浅海域の環境や底生動物も甚大なダメージを受けた。本研究では、過去10年間にわたり継続的に調査してきた宮城県周辺の干潟・浅海域における底生動物相のデータ（Sato et al., 2012）と比較することで、東日本大震災前後の底生動物相の変化を明らかにし、今後の生態系の回復傾向をモニタリングする。本研究では、宮城県東名浜、蒲生干潟、松川浦、仙台湾浅海域において調査定点を設置して、定容試料を採集して含まれる底生動物の種数・個体数をカウントしてゆく。

(2) 学術論文等

<ISI 登録誌>

- 1) Sato, S., Owada, M., Haga, T., Hong, J.S., Lützen, J and Yamashita, H. (2011) Genus-specific commensalism of the galeommatoid bivalve *Koreamya arcuata* (A. Adams, 1856) associated with lingulid brachiopods. *Molluscan Research*, 31, 95-105.
- 2) Hong, J.S., Sekino, M. and Sato, S. (2012) Molecular species diagnosis confirmed the occurrence of Kumamoto oyster *Crassostrea sikamea* in Korean waters. *Fisheries Science*, 78, 259-267.
- 3) Chiba, T. and Sato, S. (2012) Size-selective predation and drillhole site selectivity in *Euspira fortunei* (Gastropoda: Naticidae): Implications for ecological and paleoecological studies. *Journal of Molluscan Studies*, 78, 205-212.
- 4) Sato, S., Chiba, T. and Hasegawa, H. (2012) Long-term fluctuation in mollusk populations before and after the appearance of an alien predator *Euspira fortunei* (Gastropoda: Naticidae) on the Tona Coast, Miyagi Prefecture, northern Japan. *Fisheries Science*, 78, 589-595.

<ISI 登録誌以外の査読付き学術論文>

- 1) 上杉 誠・佐藤慎一・佐藤正典・松尾匡敏・近藤 寛・東 幹夫 (2012) 諫早湾潮止め

後 10 年間の有明海における主な底生動物相の変化. 日本ベントス学会誌, 66, 82-92.
<査読なし論文>

- 1) 佐藤慎一 (2011) 諫早湾閉め切り以降の有明海奥部の底生動物相の変化. 遺伝, 65, 87-92.
- 2) 佐藤慎一・東幹夫 (2011) 有明海の<変化>を追う-なぜ開門が必要か. 岩波科学, 81, 458-467.
- 3) 佐藤慎一 (2012) 日本と韓国における複式干拓堤防建設後の底生動物相変化の比較-諫早湾への海水導入後に何が起こるか? 沿岸海洋研究, 49, 111-117.

<著書>

- 1) 佐藤慎一 (2011) コラム:アサリにあげられた穴はなぜ左の殻に多いのか? コラム:韓国セマングム干拓とサキグロタマツメタ研究. 大越健嗣・大越和加(編)『海のブラックバス-サキグロタマツメタ』, 30-33 頁, 115-118 頁, 恒星社厚生閣, 東京.

(3) 学会講演

- 1) 佐藤慎一, 諫早干潟の価値と再生への期待. 干潟を守る日 2011 in 諫早シンポジウム「諫早湾開門-農漁共存に向けて対話を求めて」, 2011 年 4 月 16 日, 諫早市
- 2) 佐藤慎一・洪在上・関野正志, 韓国南海岸(順天湾)における貝類相の特徴と, 黄海・日本周辺海域との比較. 日本貝類学会平成 23 年度福岡大会, 2011 年 4 月 17 日, 九州大学
- 3) 千葉友樹・佐藤慎一・長谷川裕美, 宮城県東名海岸におけるサキグロタマツメタの侵入と二枚貝類との捕食-被食関係. 日本貝類学会平成 23 年度福岡大会, 2011 年 4 月 17 日, 九州大学
- 4) 佐藤慎一, 韓国における複式干拓とその開門の結果と比較して. 日本海洋学会主催公開シンポジウム「諫早湾開門調査について考える」, 2011 年 5 月 15 日, 佐賀大学
- 5) 佐藤慎一, 締切・開門による生態系変化をどうモニタリングすべきか? 日韓国際シンポジウム「緊急シンポジウム-諫早開門問題, 韓国の例に学ぶ」, 2011 年 8 月 2 日, 福岡市
- 6) 藤原 治・谷川晃一郎・佐藤慎一, 2011 年東北地方太平洋沖地震津波による打ち上げ貝類の調査. 第四紀学会 2011 年度大会, 2011 年 8 月 26-28 日, 鳴門教育大学
- 7) 佐藤慎一, 宮城県東名浜における震災前後の貝類相の変化-過去 10 年間のデータと比較して. 日本ベントス学会主催震災緊急シンポジウム「津波と地震とベントス-大攪乱のインパクト」, 2011 年 9 月 19 日, 高知大学

(4) 国際研究集会への参加・海外渡航

(海外渡航)

- 1) 2011 年 8 月 1 日~22 日: 韓国セマングム干拓予定海域における採泥調査など.

(5) 研究資金受託状況

- 1) 2009-2011 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）「日韓共同干潟調査に基づく市民科学者育成プログラムの形成」代表者．総額 3,200 千円（3 年間）
- 2) 2010-2012 年度科学研究費補助金（基盤研究 B 海外学術調査）「生物地理学的視点からみた西太平洋島嶼地域の干潟文化の比較研究」研究分担者．
- 3) 2010-2012 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）「潟域大規模干拓・開門の環境影響に関する研究 ―日韓比較の視点から―」研究分担者．

3. 大学運営，学外委員，社会的活動など

(1) 学内委員

- 1) 総合学術博物館部会委員

(2) 学外委員

- 1) 宮城県レッドデータブック改訂海岸動物分科会委員
- 2) Molluscan Research 編集委員
- 3) 軟体動物多様性学会 編集委員
- 4) 日本ベントス学会 諫早湾干拓問題検討委員
- 5) 日本古生物学会和文誌「化石」編集委員
- 6) 日本ベントス学会 干潟レッドデータブック図鑑編集委員
- 7) Paleontological Research 編集担当幹事

(3) 所属学会

日本地質学会，日本古生物学会，日本貝類学会，日本ベントス学会，日本第四紀学会．

● 小川 知幸（助教）

1. 教育活動

(1) 学内教育への参加

文学研究科兼任

(3) 社会教育

- 1) 文化財レスキュー取材参加，於石巻・牡鹿公民館，2011 年 7 月 18 日．
- 2) 「考古学陳列館の被災と復旧」片平祭りポスター作成（柳田館長と共同）2011 年 9 月．
- 3) SMMA（仙台宮城ミュージアムアライアンス）実行委員会陪席，2011 年 6 月，同運営委員会出席 2011 年 11 月．
- 4) 東北大学総合学術博物館ニュースレター Omnividents[オムニヴィデンス]編集．
- 5) 東北大学総合学術博物館のすべて XIV「東北考古学の挑戦―一挙公開！東北大学収蔵の考古資料―」展企画協力．

2. 研究活動

(1) 研究概要

1) ヨーロッパ活版印刷初期における筆写工房の研究

ヨーロッパ近世の「知」は、とりわけ 15 世紀においてきわめて緊張を孕んだ状態にあった。その革新的表象が、活版印刷術の成立を契機として制作されたインキュナブラであり、50 年間に 2 万 7 千冊が印刷され流通したことは長いあいだ研究者の注目を集めてきた。しかしこのような印刷本の革新性は、手写本が羊皮紙の上で作り上げてきた技術と販売網、読書のハビトゥス、なかんずく 15 世紀に各地に現れた世俗の筆写工房による大量生産システムを基盤にしていたといえる。本研究は、当時最大規模を誇ったエルザスのデューボルト・ラウバー筆写工房に注目して、写本制作の歴史的・社会的背景およびその影響を解明しながら、手写本がいかに印刷本普及の基盤を整備し、「知」の社会状況を変化させるにいたったかを考察する。

2) ヨーロッパ近世における学環の成立の研究

知の情報が狭い分野に秘匿される状態、すなわち専門家たちのコミュニティ内部にのみ発信されることを「インパブリッシュ」とよび、これが特定のコミュニティを超え、外部へと発信されることを「アウトパブリッシュ」とよぶ。コミュニティ外部への知の普及はコミュニティそのものを社会的に強化し、その駆動力となる。つまりこのような知的エリートのコミュニティ＝社会間のオープン・コミュニケーション（学環）が誕生したのは、具体的には 15 世紀後半から 16 世紀にかけての出版界においてであったのではないか。本研究はこれをおもにオルテリウスの『世界の舞台』（*Theatrum Orbis Terrarum*）のテキストおよび図版の収集と分析によって解明することを目的とする。

(2) 学術論文等（論文、著書）

- 1) 小川知幸（2011），世界を再構成する—オルテリウス『世界の舞台』のコンポジション Composition of the *Theatrum Orbis Terrarum*—，東北大学総合学術博物館ニュースレター *Omnividens* [オムニヴィデンス]，東北大学総合学術博物館，No. 39（2011. 7），4—7 頁。
- 2) 小川知幸（2012），グローバル化する近代地図帳，東北大学総合学術博物館ニュースレター *Omnividens* [オムニヴィデンス]，東北大学総合学術博物館，No. 41（2012. 2），4—6 頁。
- 3) 小川知幸（2012），『種の起原』初版本の寄贈と保存修復，東北大学附属図書館調査研究室年報，第 1 号（2012. 3），11—19 頁。
- 4) 小川知幸（2012），漱石と「種の起原」，東北大学附属図書館調査研究室年報，第 1 号（2012. 3），21—22 頁。
- 5) 小川知幸（2012），資料紹介：エドワード・モース著『日本陶器モース・コレクション目録』ケンブリッジ，1901 年刊，東北大学附属図書館調査研究室年報，第 1 号（2012. 3），85—88 頁。

(記事)

- 1) 第6回博物科学会参加報告, 東北大学総合学術博物館ニュースレター Ominividens [オムニヴィデンス], 東北大学総合学術博物館, No. 39 (2011.7), 3頁.

(3) 学会講演

- 1) 小川知幸 (2011), 東日本大震災による東北大学附属図書館・史料館の被災と復旧, 大学博物館等協議会 2011年度大会・第6回博物科学会, 2011年6月23・24日 (於名古屋大学).

(4) 国際研究集会への参加・海外渡航

(海外渡航)

- 1) 海外学術調査: ドイツ国ゲッティンゲン市, シュトゥットガルト市, ヨーロッパ近世における学環の成立の研究 (資料研究調査および収集), 2011年8月2日~8月22日.

(6) 研究資金受託状況 (個人研究への研究資金受託)

- 1) 平成21~23年度 (2009~2011年度) 科学研究費補助金, 若手研究 (B), 課題番号 21720269, ヨーロッパ近世における学環の成立の研究, 代表: 小川知幸, 研究経費総額 3,500千円.

3. 大学運営, 学会運営, 社会的活動等

(1) 学内委員

- 1) 附属図書館協力研究員
- 2) 附属図書館貴重図書等選定委員会委員
- 3) 附属図書館古典資料等修復保存小委員会委員
- 4) 総合学術博物館部会委員

(3) 所属学会

日本西洋史学会, 西洋史研究会, 東北史学会, 博物科学会, ヨーロッパ構造史研究会, 中世アフリカ史研究会

史料館

● 永田 英明（准教授）

1. 教育活動

（1）東北大学での教育活動

（全学教育）

- 1) カレントトピックス科目「東北大学のひとびと」（第1 Semester）授業担当(分担)
- 2) 基礎ゼミ「「歴史」を見つける方法—歴史資料の探し方と考え方—」授業担当

（2）他大学等での教育活動 2件

- 1) 東北学院大学文学部「日本国の誕生」担当
- 2) 東北学院大学文学部「総合演習」担当

（3）研修会・公開講演会等の講師

- 1) 東北大学初任者オリエンテーション「東北大学の歴史」講義，2009年4月1日および10月1日，東北大学
- 2) 「古代の「駅」と最上川水運—駒籠楯跡を考える—」，山形県教育委員会「駒籠楯跡発掘調査報告会」，2012年3月18日

2. 研究活動

（1）研究概要

1) 大学アーカイブズの研究

東北大学の歴史的公文書等を素材に，大学におけるアーカイブズの特色や，その適切な保存・公開のあり方について研究している。

2) 古代交通制度と政治支配との関係についての研究

古代の駅馬・伝馬制度や関所の制度を題材に，日本の古代国家がどのような交通・通信システムによって日本の国土支配を実現していたのかを研究している。

3) 古代国家の地方・地域支配に関する研究

交通施設を含む，古代の地方行政組織や施設が地域に住む人々をどのように編成することで維持され，それが地域にどのような影響を与えていたのかについて研究している。

（2）学術論文等

（論文）

- 1) 永田英明「唐日伝馬制小考」，鈴木靖民・荒井秀規編『古代東アジアの道路と交通』，2011年6月，64p-75p

（調査報告等）

- 1) 永田英明編『東北帝国大学学友会誌・学生新聞記事目録』2012年3月，1-358頁

(総説等)

- 1) 永田英明・徳竹剛「東日本大震災における東北大学史料館の被災状況と対応」(『アーカイブズ』45号, 2011年10月, 49-51頁)

(3) 口頭報告等

- 1) 「災害と大学アーカイブズ—東北大学の場合」全国大学史資料協議会全国研究会, 2011年10月, 三重県伊勢市

(4) 研究資金受託状況

- 1) 「地域間交通からみる古代東北の政治と社会」(研究代表者永田英明), 基盤研究 (C), 2011-2013年度, (継続中) 500,000円

3. 大学運営, 学外委員, 社会的活動等

(1) 学内委員

- 1) 学術資源研究公開センター運営専門委員会 委員
- 2) 学術資源研究公開センター運営専門委員会史料館部会 委員
- 3) 東北大学公文書管理委員会 委員
- 4) キャンパス整備委員会片平部会 委員
- 5) 東北大学埋蔵文化財調査室運営 委員

(2) 学外委員

- 1) NPO 法人・宮城歴史資料保全ネットワーク 監事
- 2) 山形県教育委員会 駒籠楯跡指導検討委員
- 3) 宮城歴史科学研究会 委員
- 4) 東北史学会 評議員

(3) 所属学会

日本アーカイブズ学会, 大学史研究会, 日本史研究会, 史学会, 歴史科学者協議会, 東北史学会, 宮城考古学会, 木簡学会, 大阪歴史学会, 続日本紀研究会, 条里制古代都市研究会

●曾根原理 (助教)

1. 教育活動

(1) 東北大学での教育活動

全学教育: カレントトピックス科目群「東北大学のひとびと」(第1 Semester) 授業担当
全学教育: カレントトピックス科目群「日本の思想と歴史—国際共修ゼミ」(第1・第2 Semester) 授業担当

(2) 他大学等での教育活動

中国・北京日本学研究中心「日本文化特殊研究の講義（日本近世の神国思想とその周辺）」（国際交流基金による派遣事業、2011年6月1～30日）

2. 研究活動

(1) 研究概要

- 1) 日本近世において宗教秩序の頂点にたった東照宮を対象とし、①近世社会における権威やコスモロジー、②それに深く関わる仏教や神道その他の教義・思想の研究を行った。その成果発表のため、国際研究集会で報告を担当した。
- 2) 近世思想形成の前提となる中世の論義・談義の研究のため、日本各地の史料保存機関において、現地調査を実施した（科研費使用）。あわせて東北大学所蔵の古典資料（文書、典籍、聖教類など）の整理と調査を進めた。
- 3) 東北大学法文学部を卒業し東北地方の中世史研究の草分けとなった大島正隆の展示を開催するため、学内外の関係史料調査と研究を進めた。

(2) 学術論文等

(論文)

曾根原 理，徳川將軍家の草創神話，『季刊東北学』27，2011年4月，pp.127-137.

曾根原 理，東照宮創建と日光山－薬師仏をめぐって－，菅原信海・田辺三郎助編『日光－その歴史と宗教』春秋社，2011年10月，pp.235-250.

曾根原 理，徳川家康の年忌儀礼と近世社会－二つの百回忌行事からの考察－，『季刊日本思想史』78，2011年12月，pp.3-14.

曾根原 理，山王一実神道における天皇と將軍，崔世広編『神道と日本文化』中国社会科学出版社，2012年3月，pp. 245-260.

(その他)

- 1) 青柳周一・曾根原 理・松金直美・藤田和敏・梅田千尋・朴澤直秀，〈研究ノート〉米原市柏原成菩提院所蔵史料の紹介と解説（二），滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要 45，2012年3月，pp.43-62.
- 2) 曾根原 理・鈴木道男，東北大学史料館所蔵カール・レーヴィット関係史料について，東北大学史料館紀要 7，2012年3月，pp.46-65.
- 3) 曾根原 理，東北大学附属図書館所蔵「名取屋文書」の解説と紹介，東北大学附属図書館調査研究室紀要 1，2012年3月，pp.3-9.
- 4) 曾根原 理，創立百周年記念寄稿「狩野文庫への招待／古典目録の編纂」，東北大学附属図書館調査研究室紀要 1，2012年3月，pp.77-84.
- 5) 青森県史編さん中世部会編，『青森県史』資料編中世3北奥関係資料，青森県，2012年3月，pp.1-785.（執筆分担 88,251,619,626-634,777-779）

(3) 学会講演等

曾根原 理, 徳川家康と天海, 北京日本学研究センター日本学総合講座, 2011年6月23日; 北京, 中華人民共和国.

曾根原 理, 秀吉・家康の神格化と「徳川王権論」(公開シンポジウム「カミになる王－思想史の視点から－」第二報告), 日本思想史学会 2011年度大会, 2011年10月29日; 東京, 学習院大学.

(4) 国際研究集会への参加, 海外渡航

曾根原 理, 日本近世仏教が注目した明代仏教, 東北亜地区多元文化共生実態研究国際学術検討会, 2011年8月3日; シリンホト, 中華人民共和国.

Sonehara Satoshi. Conservation and Uses of Historical Heritage in Japan, Conference of Storytelling of the Cultural Heritage, November 25th 2011; Seoul, Korea.

Sonehara Satoshi. Tohoku University after 3.11, 2011; Focusing on the Library and Archives, 2012 annual meetings of the Council on East Asian Libraries, March 15th 2012; Tronto, Canada.

Sonehara Satoshi. Tendai Shinto in the Muromachi Period: The Changing Aspects of Sanno Gongen, 2012 Conference of the Association for Asian Studies, March 15th 2012; Tronto, Canada.

(5) 研究資金受託状況

- 1) 科学研究費, 基盤研究 B, 東照宮祭祀の確立と展開 (代表: 曾根原 理), 23年度 1400 千円 (直接経費)
- 2) 科学研究費, 挑戦的萌芽研究, 近世仏教を見直す－天台宗を中心に－ (代表: 曾根原 理), 23年度 900 千円 (直接経費)
- 3) 科学研究費, 基盤研究 A, 「書物・出版と社会変容」研究の深化と一般化のために (代表: 若尾政希), 23年度配分 120 千円

3. 大学運営, 学会運営, 社会的活動等

(1) 学内委員

- 1) 附属図書館・貴重図書等選定委員会委員
- 2) 附属図書館・齋藤養之助家史料受入・整理検討委員会委員
- 3) 附属図書館・協力研究員
- 4) 学術資源研究公開センター・運営専門委員会史料館部会委員

(2) 学外委員

- 1) 日本仏教総合研究学会・理事
- 2) 日本山岳修験学会・理事

- 3) 日本文芸研究会・委員/総務委員長
- 4) 青森県史編さん中世部会・調査研究員

(3) 所属学会

神道宗教学会・中世文学会・天台学会・東北史学会・日本アーカイヴズ学会・日本古文書学会・日本山岳修験学会・日本史研究会・日本思想史学会・日本仏教総合研究学会・日本文芸研究会・仏教史学会・仏教文学会

● 大原 理恵 (助教)

1. 教育活動

(1) 学内教育への参加

文学研究科 日本文化学講座 兼務

2. 研究活動

(1) 研究の概要

- 1) 日本古典文学の研究. 特に平安時代物語を中心とする.
- 2) 和漢書古典籍に関する研究.

(2) 学術論文等

- 1) 大原理恵「〈試論〉書庫の亀裂—古典籍利用・保存についての内省的記述の試み—」
東北大学史料館紀要7 東北大学史料館 2012年3月 79～93頁
- 2) 大原理恵「随筆・雑記類について：和漢書貴重図書目録の周辺」東北大学附属図書館調査研究室年報1 東北大学附属図書館 2012年3月 23～28頁

3. 大学運営，学会運営，社会的活動等

(1) 学内委員

附属図書館貴重図書等委員会委員

(2) 所属学会

中古文学会

植物園

● 鈴木 三男（教授）

1. 教育活動

(1) 学内教育への参加

(全学)

「生命科学概論」 第1 Semester 2 単位

(理学部)

「植物形態学」 第3 Semester 2 単位

「生物学へのアプローチ」 第1 Semester 1 単位の 1/12 (1 回)

「進化学実習」 第5 Semester 2 単位のうち, 3 回

「植生史学実習」 第3 Semester (集中) 1 単位

(大学院生命科学研究所)

「生態システム生命科学特論」 2 単位のうち 1/11 (1 回)

「生態学合同講義」 1 回

(2) 学生指導

生命科学研究所博士後期課程 (博士)

(論文審査委員: 主査)

箱崎真隆: 完新世後期針葉樹埋没林の年輪年代学研究

2. 研究活動

(1) 研究概要

科学研究費補助金(基盤研究(A))「東アジアの新石器時代遺跡出土編組製品等素材の考古植物学研究拠点の形成と展開」の研究遂行のため, 研究分担者, 研究協力者らとともに組織された「あみもの研究会」の下, 調査・研究活動を展開した. 佐賀県佐賀市の東名遺跡では大量の編組製品を始め, 多くの植物性遺物が出土した. これらは縄文時代早期のものであり, これまでこの時期の, 特に縄文時代が早くから展開した九州地域での植物性遺物が大量に得られたことはなく, 縄文時代早期の植物利用を調べる格好の遺跡であることから, 佐賀市からの受託研究「東名遺跡出土植物性遺物調査」を合わせて遂行し, 数百点に及ぶ箆編みものおよび縄, 繊維状植物束などからその部位(体部, 底部, 口縁部など)毎に試料を取り, 徒手切片あるいはパラフィン包埋法を用いて切片を作成し, 検鏡, 同定を行った. 一方, 三内丸山遺跡など国内の新石器時代遺跡, 中国浙江省田螺山遺跡などから出土した木質遺物について同定を試みた. これと平行して, 国内において編組製品素材可能植物をリストアップし, 国内においてそれらの試料標本を採取し, 茎, 蔓等の部分の組織切片を作成した. これらは編組製品素材可能植物データベースを構築する基本データとなる. また, 東アジアにおける編組製品への植物利用の実情を調査するため中国湖北省・四川省・貴州省を訪れ, 編組製品等植物利用の調査を行った.

(2) 学術論文等

1) 発表論文

Choi, S.K., Kim, K., Jeong, E.K., Terada, K., Suzuki, M. and Uematsu, H. 2010. Fossil woods from the Miocene in Yamagata Prefecture, Japan. *IAWA Journal* 31:95-117

Lim, J.D., Jeong, E.K., Kim, K., Suzuki, M., Paik, I.S. and Kim, H.M. 2010. Miocene woods of the Janggi Basin in Korea: Implications for paleofloral changes. *Geosciences Journal* 14:11-22

Noshiro, S., Suzuki, M. and Sasaki, Y. 2011. Introduction of *Toxicodendron vernicifluum* Stokes (lacquer tree) and its implication during the prehistoric Jomon period in Japan. *Proc. Wood Culture and Science Kyoto2011*:49

Suzuki, M., Noshiro, S., Kobayashi, K., Sasaki, Y. and Nishida, I. 2011. Material plants of baskets excavated from the Earliest Jomon Higashimyo site, Kyushu, Japan. *Proc. Wood Culture and Science Kyoto2011*:50-55

吉田明弘・鈴木三男・金 憲爽・大井信三・中島 礼・工藤雄一郎・安藤寿男・西本豊弘. 2011. 茨城県花室川堆積物の花粉・木材化石からみた最終氷期の環境変遷と絶滅種ヒメハリゲヤキの古生態. *植生史研究* 20:27-40

鈴木三男・小林和貴. 2011. 青森県三内丸山遺跡出土の小型編組製品（縄文ポシエット）および富山県桜町遺跡出土縄製品の素材植物. *植生史研究* 20: 83-88

2) 著書

鈴木三男. 2011. 植物相から見た縄文時代のはじまり. 「縄文はいつから！？-地球環境の変動と縄文文化」, 新泉社:115-128

3) その他

Suzuki, M. 2011. Foreword for *Metasequoia: The legacy of Dr. Shigeru Miki*. *Jpn. J. Histor. Bot.* 19:v

吉田明弘・鈴木 三男. 2010. 茨城県つくば市にナウマンゾウが住んでいた頃?: 花室川堆積物の花粉化石からみた古環境復元. *季刊地理学* 62:164-165

(3) 学会講演

小林和貴・鈴木三男・能城修一・工藤雄一郎・鯨本眞友美・網谷克彦 鳥浜貝塚遺跡から出土したウルシ材の年代. 2011. 日本植生史学会第 26 回大会, 弘前, ポスター発表, 2011 年 11 月 5-6 日.

小林和貴・吉田明弘・関正典・米倉浩司・大山幹成・鈴木三男 2011. 東北大学植物園における「モニタリングサイト 1000 (重要生態系監視地域モニタリング推進事業)」の実施状況について, 日本植物園協会第 46 回大会研究会, ポスター発表, 2011 年 5 月 26 日.

能城修一・佐々木由香・鈴木三男・村上由美子 2011. 弥生時代から古墳時代の関東平野におけるイチイガシ資源利用. 日本植生史学会第 26 回大会, 弘前, 口頭発表, 2011 年 11 月 6 日.

鈴木三男・小林和貴 2011. 青森県三内丸山遺跡から出土した小型編組製品, いわゆる「縄

文ポシエット」および富山県小矢部市桜町遺跡出土縄製品の素材植物. 日本植生史学会第26回大会, 弘前, 口頭発表, 2011年11月6日.

(4) 招待講演・講師等

- ・日本植生史学会第26回大会公開シンポジウム「ヒバ, 五千年の歴史と文化」オーガナイザー, 弘前大学, 2011年11月5日

(5) 研究資金受託状況

H21～24年 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(A))「東アジアの新石器時代遺跡出土編組製品等素材の考古植物学研究拠点の形成と展開」代表 8,580,000円(直接経費6,600,000円, 間接経費1,980,000円)

H23 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(A))海外学術調査「中国における都市の生成一良渚遺跡群の学際的総合研究」研究分担(代表者 中村慎一金沢大学教授) 390,000円(直接経費300,000円, 間接経費90,000円)

H23 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(A))「霞ヶ浦沿岸花室川流域の旧石器文化の研究」研究分担(代表者 西本豊弘国立歴史民俗博物館教授) 260,000円(直接経費200,000円, 間接経費60,000円)

H23 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(A))「森林資源保全のための樹木遺伝子バーコードの基盤構築と有効性に関する研究」研究分担(代表者 吉丸博志森林総合研究所領域長) 1,170,000円(直接経費900,000円, 間接経費270,000円)

H23年 佐賀県佐賀市からの受託研究「東名遺跡出土植物性遺物調査」代表 642,000円(直接経費584,000円, 間接経費58,000円)

H23年 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所からの受託研究「平成23年度埋蔵文化財発掘調査(木製品保存処理)に伴う樹種調査」代表 3,821,970円(直接経費2,939,970円 間接経費882,000円)

3. 大学運営, 学会運営, 社会的活動等

(1) 学外委員

- 1) 北海道函館市大船C遺跡整備委員会委員
- 2) 青森県三内丸山遺跡調査指導委員会委員
- 3) 宮城県多賀城跡調査研究委員会委員
- 4) 宮城県栗原市山王囿遺跡整備指導委員会委員
- 5) 宮城県東松島市里浜貝塚遺跡整備指導委員会委員
- 6) 秋田県北秋田市伊勢堂岱遺跡調査指導委員会委員
- 7) 仙台市杜の都の環境を作る審議会会長
- 8) 仙台市文化財審議会委員
- 9) 山形県文化財審議会委員

(2) 所属学会，学会運営など

- 1) (社) 日本植物園協会理事
- 2) (社) 日本植物学会会員
- 3) 日本植物分類学会会員
- 4) 日本植物形態学会会員
- 5) 日本古生物学会会員
- 6) 日本第四紀学会会員
- 7) 日本植生史学会会員
- 8) 植物地理・分類学会名誉会員
- 9) 種生物学会会員
- 10) ヒマラヤ植物研究会会員
- 11) IAWA (International Association of Wood Anatomists) 会員
- 12) IAPT (International Association of Plant Taxonomists) 会員
- 13) IOP (International Organization of Palaeobotany) 会員

● 大山 幹成 (助教)

1. 教育活動

(1) 学内教育への参加

(全学)

「自然科学総合実験」 第2セメスター 2単位の0.5単位 (4回)

(理学部)

「進化学実習」 第5セメスター 2単位のうち，3回

「古植生史学実習」 第3セメスター (集中) 1単位

「生物学演習」 第6セメスター 2単位のうち1/2 (5回)

2. 研究活動

(1) 研究概要

樹木は，周囲の環境の影響を受け年々広狭の年輪を形成する．この性質を利用し，年代測定および古環境の復元などの研究を行う分野が年輪年代学である．東日本においては，この分野の研究及び年輪データの蓄積は不十分な状態にあり，当該地域における木質文化財の年代測定および古気候復元の基礎データとするため，スギ，ヒバなどを中心とした標準年輪曲線 (標準的な年輪幅変動パターン) の構築および古気候復元の研究を進めている．今年度，主に進めた研究は以下の通りである．

- ・青森県の新田 (1) 遺跡等のヒバ材，秋田県茂木屋敷跡のスギ材，東京都の神田淡路町二丁目遺跡のヒノキ材など精力的に試料収集と解析を進め，標準年輪曲線を空間的，時間的に充実させることができた．

- ・東北芸術工科大学の岡田靖氏（専門：木彫像修復）と共同で、山形県の庭月観音像の科学的調査を行い、一昨年度、秋田県の遺跡で構築した標準年輪曲線を基に、仏像の修復年代について重要な情報を提供した。また、この仏像の使用樹種についても樹種同定を行った。
- ・長野県深見池年縞堆積物を対象とし、複数コアの年縞を樹木年輪年代学的手法を用いてクロスデーティングを行い、年縞の暦年を年単位で確定させるという新しい研究にも取り組み始めた。

（2）学術論文等

1) 発表論文

Ohyama, M., Hoshino, Y., Hakozaki, M., Yonenobu, H. 2011. Development of Tree-ring Chronologies over the Last Two Millennia in Japan. Proceedings of the Wood Culture and Science Kyoto 2011, 218-219.

2) 著書

大山幹成. 2011. 木材の構造と進化. 福島和彦・船田良・杉山淳司・高部圭司・梅澤俊明・山本浩之(編)「木質の形成 バイオマス科学への招待」第二版, 21-25. 海青社, 大津

3) その他

岡田靖・佐藤高史・片岡太郎・小林啓・大山幹成・星野安治・門叶冬樹・加藤和浩・庵下稔 2011. 庭月観音像の科学的調査と修復実践に関する研究. 平成22年度東北芸術工科大学 文化財保存修復研究センター紀要, 1:3-46

箱崎真隆・大山幹成・星野安治・佐々木由香 2011. 新田（1）遺跡出土木材の年輪年代測定と放射性炭素年代測定から推定される遺構間の年代関係. 石江遺跡群発掘調査報告書 IV－石江土地区画整理事業に伴う発掘調査(第2分冊:石江遺跡群分析編2), 青森市埋蔵文化財報告書, 青森市教育委員会, 108(2), 62-72.

星野安治・大山幹成 2011. 東京都千代田区神田淡路町二丁目遺跡出土木質遺物の年輪年代学調査. 東京都千代田区神田淡路町二丁目遺跡 - 平成21年度淡路町二丁目西部地区第一種市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -, 淡路町二丁目西部地区市街地再開発組合・株式会社四門, 314-315.

堀内一穂・千葉拓児・星野安治・大山幹成・田中孝幸 2011. 現生樹木年輪の¹⁴C濃度にみられる樹種間のオフセット: 生物季節学的効果の可能性. 第13回AMSシンポジウム報告書, 74-76.

（3）学会講演

稲垣哲也・篠塚良嗣・山田和芳・林田明・米延仁志・土川覚・Saarinen, T.・吉田明弘・五反田克也・星野安治・大山幹成・小田寛貴・安田喜憲 2011. 近赤外分光法による湖堆積物の非破壊・簡便評価. 日本地球惑星連合大会 2011年大会, ポスター発表, 千葉, 2011年5月25日.

岡田靖・佐藤高史・片岡太郎・小林啓・大山幹成・星野安治・門叶冬樹・加藤和浩・庵

- 下稔 2011. 庭月観音像における自然科学的調査を踏まえた修復実践. 文化財保存修復学会第33回大会, 奈良, ポスター発表, 2011年6月5日.
- 岡田靖・佐藤高史・片岡太郎・小林啓・大山幹成・星野安治・門叶冬樹・加藤和浩・庵下稔 2011. 庭月観音像の解体修復に伴う自然科学的調査. 日本文化財科学会第28回大会, つくば, 口頭発表, 2011年6月12日.
- 小林和貴・吉田明弘・関正典・米倉浩司・大山幹成・鈴木三男 2011. 東北大学植物園における「モニタリングサイト1000(重要生態系監視地域モニタリング推進事業)」の実施状況について, 日本植物園協会第46回大会研究会, ポスター発表, 2011年5月26日.
- 箱崎真隆・大山幹成・星野安治・佐々木由香・藤根久・パレオ・ラボ AMS年代測定グループ・木村淳一 2011. 新田(1)遺跡出土木材の年輪年代測定と放射性炭素測定から推定される遺構間の年代関係. 日本文化財科学会第28回大会, つくば, ポスター発表, 2011年6月11-12日.
- 星野安治・山田和芳・篠塚良嗣・米延仁志・大山幹成・北川淳子 2011. 長野県深見池年縞堆積物を用いた樹木年輪年代学的手法の応用. 日本地球惑星連合大会2011年大会, 口頭発表, 千葉, 2011年5月25日.
- 星野安治・米延仁志・大山幹成・小田寛貴 2011. 日本産樹木を用いた過去約2000年間の標準年輪曲線ネットワーク構築. 日本第四紀学会2011年大会, 鳴門, 口頭発表, 2011年8月27日(口頭発表賞(若手部門)受賞).
- 山田和芳・米延仁志・星野安治・大山幹成・小田寛貴・北川淳子・安田喜憲・齋藤めぐみ 2011. 湖沼年縞の年輪年代学的研究の試み - 長野県深見池を例に -. 日本第四紀学会2011年大会, 鳴門, ポスター発表, 2011年8月26-27日.
- Kitagawa, J., Yamada, K., Ohyama, M., Hoshino, Y., Shinozuka, Y., Yonenobu, H., Yasuda, Y. 2011. Analysis of recent vegetation change for the regeneration of Kiso-hinoki cypress. The 52nd Annual Meeting of the Society for Economic Botany, Oral, St. Louis, U.S.A, 11 July, 2011.
- Ohyama, M., Hoshino, Y., Hakozaiki, M., Yonenobu, H. 2011. Development of Tree-ring Chronologies over the Last Two Millennia in Japan. Wood Culture and Science Kyoto 2011, Kyoto, Japan, Poster, 7 August, 2011.
- Sakashita, W., Yokoyama, Y., Miyahara, H., Yonenobu, H., Ohyama, M., Hoshino, Y., Nakatsuka, T. 2011. Causal Link between Solar Variability and Climate Anomalies in East Asia during the Maunder Minimum. American Geophysical Union Fall Meeting 2011, Poster, San Francisco, U.S.A, 9 December, 2011.

(4) 招待講演・講師等

- 大山幹成: 年輪で年代をはかる, 地底の森ミュージアム第2回考古学講座, 仙台, 2011年1月15日

(5) 研究資金受託状況

H22年～24年 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C))「長期標準年輪曲線の広域ネットワーク拡充とそれに基づく木材産地推定法の検討」代表 1,430,000円(直接経費 1,100,000円, 間接経費 330,000円)

H23年 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(A))「年輪年代学の総合的研究—文化財科学における応用的展開をめざして—」研究分担(代表者 米延仁志 鳴門教育大学准教授) 1,820,000円(直接経費 1,400,000円, 間接経費 420,000円)

H23年 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(B))「気候変動下における国産主要樹種の肥大成長および材質の変動予測」研究分担(代表者 安江恒 信州大学准教授) 767,000円(直接経費 590,000円, 間接経費 177,000円)

3. 大学運営, 学会運営, 社会的活動等

(1) 学内

植物園部会委員

(2) 学外

東日本大震災による天然記念物への影響把握等緊急調査事業検討会委員

(3) 所属学会, 学会運営など

日本木材学会会員

日本植生史学会会員

日本森林学会会員

日本文化財科学学会会員

東北植物学会会員

IAWA (International Association of Wood Anatomists) 会員

Tree-ring society 会員

年輪研究会会員

北海道, 東北保存科学研究会会員

東北植物学会庶務幹事

● 米倉 浩司 (助教)

1. 教育活動

(1) 学内教育への参加

(全学)

「自然科学総合実験」 第2セメスター 2単位の0.5単位 (4回)

(理学部)

- 「進化学実習」 第5セメスター 2単位のうち, 3回
「植生史学実習」 第3セメスター (集中) 1単位
「生物学演習」 第6セメスター 2単位のうち 1/2 (5回)

2. 研究活動

(1) 研究概要

2009年に提案された系統関係に基づく被子植物の新たな分類体系を紹介するプロジェクトに参加し, 科の和名の統一化をはかった(伊藤ほか 2012).

日本に自生するか帰化状態にある全ての維管束植物の現段階で正しいと考えられる正しい学名と和名を網羅した目録を, 系統関係に基づく分類体系に従って配列し, ハンディな著作として著した(米倉 2012). この中では新学名の正式な命名は行わなかったが, いくつかの植物について和名を新称した.

Yonekura (2006)で行ったシロバナウツボグサの新学名に, 命名規約上の誤りがあったために訂正を行った(Ohashi et al. 2011).

東アジア産のタデ科植物の分類学的研究: シロバナサクラタデとその近縁種を分類学的 b に再検討して2種を認め, シロバナサクラタデの変種として沖縄と台湾に固有のケサクラタデを認識した. また, サクラタデは日本と韓国のみならず中国大陸に広く分布し, 中国の文献でシロバナサクラタデとされているものかなりの部分がこれに当たること, さらにサクラタデは東南アジア原産で香辛料としても栽培される *Persicaria odorata* (Lour.) Soják の亜種とされるべきであり, 真の *P. odorata* もまた中国南部に産することを新たに明らかにした. この過程で, 混乱していた学名を正すために, 過去に発表されたいくつかの種や変種について選定基準標本の指定を行った(Yonekura 2012).

(2) 学術論文等

1) 発表論文

Ohashi K, Ohashi H and Yonekura K (2011) A new name for a white-flowered form of *Prunella vulgaris* subsp. *asiatica* (Lamiaceae). *The Journal of Japanese Botany* 86(6): 370–372.

Yonekura K. 2012. Notes on Polygonaceae in Japan and its adjacent regions (II). *The Journal of Japanese Botany* 87(3): 151–168.

2) その他

1. 米倉浩司 2011. 邑田仁(監修) 日本維管束植物目録. 379 pp. 北隆館.
2. 伊藤元己・田村 実・戸部 博・永益英敏・藤井伸二・米倉浩司 2012. APG III 分類体系. 戸部 博・田村 実(編) 新しい植物分類学 I: 230–238.

(3) データベース

Yonekura, K. and Kajita, T. BG Plants 和名 - 学名インデックス (Ylist)
<http://bean.bio.chiba-u.jp/bgplants/> (2003.7~)

(4) 海外調査等

(株) カメイからの助成金を得て、2011年8/22～9/3に日本植物園協会海外事情調査団(鈴木三男団長)の一員として中国の湖北省、重慶市、貴州省を訪問し、中国中部要素の針葉樹や固有樹木の自生地域を訪れた。

3. 大学運営，学会運営，社会的活動等

(1) 所属学会，学会運営など

日本植物分類学会会員

同 絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会委員

同 植物データベース専門委員会委員

同 国際植物命名規約邦訳委員会委員

ヒマラヤ植物研究会会員